

流星堂の居候 - U n i n t e n
d e d h a r e M -

津梨つな

高校卒業を機に何の目的もアテもなく上京した主人公——常盤 大樹。

紆余曲折の末、質屋・流星堂に居候することになった彼が体験する

新たな生活と人々との触れ合い。

人付き合いに疎く、その手の経験も皆無な男が

今、運命に試される。

無自覚誑し気質の主人公とそれを取り巻く少女（漏れなくヒロイン）たちの行く末や如何に。

※初作品の為、色々と練習も兼ねた自己満投稿です。

独自設定・独自解釈ご理解の程宜しくお願い致します。

※文章力鍛錬中です。おかしいところありましたらどんどん教えて戴けると幸いです。

※紆余曲折の詳細は後日前日談として投稿予定です。

2
0
1
9
06
13

タイトルとあらすじを変更しました。

目次

1	1	質屋	居候と孫娘と泥棒	1
1	2	質屋	迷子	23
1	3	M I D N I G H T	迷子通信	37
2	1	市街	おさんぽ日和	55
2	2	市街	対極の姉妹	73
3	1	XXX	市ヶ谷有咲	93
3	2	周辺	有名人？たち	109
3	3	質屋	関係性	135
4	1	市街	H u m a n d e f e c t s	145
4	2	質屋	進展？	171
5	1	市街	妹増殖中につき	191

5	2	市街	妹	VS
5	3	質屋	天使と魔物	
5	4	外出	水色逃避行	
5	5	松原宅	告白	
5	6	質屋	衝突、それから	
6	1	質屋	日常	
6	2	市街・山吹家	謝罪？	
6	3	山吹家	目を逸らさずに	
6	4	山吹家	一旦弛緩	
7	1	XXXX	屑、動く	
7	2	魔窟	始末	
X	X	分岐点と選択		
N	1	病院	懺悔には代償を	

N 2 .. 質屋 痛みに飲びを

N 3 .. 周辺 緊張と弛緩と

N 4 .. 松原家 彼女に捧げる

N E N D .. 想いの先に

1・1.. 質屋 居候と孫娘と泥棒

初投稿です。

導入が下手すぎて長くなってしまったので、いずれプロローグとして出せたらなあと思っております。

ひとまず、1話宜しくお願いします。

東京都内、とある質屋。

今日も一日が始まる。

「ん、この匂い…。万実さん、流石早起きだな…。」

朝食であろう素敵なおいに釣られ、もそもそと起き出る。

寝起きのだらしない顔のまま着替えを始める男――

俺こと、常盤大樹ときわひろきは

色々あってここの手伝いをしている、言わば居候だ。

「おはようございまーっす。」

居間へ向かうと、柔らかい佇まいの老婦人が食卓に3人分の食事を並べているところだった。

「あら、今日は早いねえ。何か予定でもあるのかしら？」

この方は市ヶ谷万実さん。

俺を拾って住まわせてくれている、恩人だ。

この質屋、『流星堂』を切り盛りしている方でもある。

「あれ？有咲はまだ？」

「あの子、いつも朝は遅いから…」

「ちょっと様子見てきますねー。ご飯冷めてもアレだし…。」

有咲というのは万実さんの孫娘で、同じくこの家に住んでいる。

今ではすっかり打ち解けたが、最初は人見知り？が酷くて大変だった。

「有咲ー。まだ寝てんのかー。」

障子の前に立って呼びかけるも返事はなく。

「？あけるぞー。」

開けてみるとそこには。

「…まーたすげえ寝相だな…。」

掛け布団を下敷きに大の字で寝ている女の子の姿があった。

「おいおい…仮にも年頃の娘だろうが…。」

おーい、飯冷めちまうぞー。」

揺すってみる。

「んー……。…ん？」

モゾモゾと体を振った後、ぼんやりと目を開ける。

「…んう？」

「おはよう。飯だぞ。」

「おはよう…？」

寝起き直後の緊張ゼロの表情でこっちを見つめてくるこの子が有咲、市ヶ谷有咲だ。

まだ寝ぼけているのか、なかなか間抜けで面白い顔をしている。

「ほれ、顔洗いに行くぞ。」

「んー…」

差し出した手につかまり、立ち上がる。

まあ、さすがに洗面所までは付いていなくていいだろ。

「コケンなよー。」

ふらふらしながらも洗面所へと向かう有咲を見送り、何気なく庭を見やる。

「しかし、初めて見た時も驚いたが中々の風情だなあ…。」

俺がお世話になっているここ市ヶ谷家は、趣のある立派な日本家屋だ。

表向きは質屋ということ以小綺麗な印象だが、居住スペースに関しては歴史というか、いい意味で時間の流れを感じられる空間がある。

しっかりした造りの蔵である。

蔵に至っては俺の作業場でもあるんだが、それはまあおいおい話すとして…と、和の空気に浸っていると

「どうしたのそんなところで立って。」

軽く身支度を整えた有咲が戻ってきたようだ。

「ん、やっぱ和風建築っていいなあって思ってたな。」

「ふーん……。ご飯、食べないの？」

「お、そうだったそうだった。」

万実さん待ってるよな。」

「いこ。」

その後、万実さんの朝餉に舌鼓を打ち、今日も今日とて任された仕事に取り掛かる。

質屋ということもあって、ジャンル問わず様々な物がこの蔵には詰め込まれている。

それを整理・検品・管理するのが俺の担当だ。

初日こそ久々の筋肉痛に苦しんだものだが、今じゃすっかり慣れたもの。

中にはとんでもない値打ち物も眠っていたりして、まるで宝探しでもしている気分だ。

そんな調子で、仕事に慣れて来たのを見兼ねてか、昨日万実さんよりも一つの

仕事を任されていた。

「あのねえ、仕事って言うほどじゃあないんだけど。

有咲がねえ。」

「有咲？あの子がどうかしたんです？」

「あの子、今年から高校生なんだけどねえ。

…まだ、一度も学校に行っていないのよ。」

「…まじすか。」

「なんでも、勉強は出来ているから行かなくていいんですって。」

そんなんアリか。

いやでも勉強以外でも行つといたほうがいいんじゃないのか…。というか、

「え、あの子友達とかいないんですか。」

「見たことはないわねえ。小学生の頃なんかは、お友達のお話もする子だったのだけど…。」

「なるほど…。それはちょっと心配ですね。」

「だからね、大樹さんには」

「学校に行くよう説得するってことですかね。」

「お願いできるかしら？」

「任せといてください。ついこの間まで、俺も高校生だったんですから。」

「そうねえ、お願いするわねえ。」

…とは言ったもののなあ。

不登校だとかいじめられてるだとか、そういう方面ならまだしも

『勉強ができるから登校は不要』ときたか。新しいパターンだ。

「んー……。」

「どうしたの、すごい声で唸ってるみたいけど。」

「んお、有咲か。」

「今日は片づけ、しないの？」

「……。」

「無視？」

「有咲。」

「？」

「学校行こうぜ。」

特に何も思いつかなかったんでストレートに言ってみた。

「えー？ いやだけど。」

ストレートに返ってきた。

「なんでよ。」

「めんどいし。知り合いも、いないしさ。」

「：まあ、ほら、知り合いとかは作ればさ」

「うっさい。」

あのさ、大樹さんがどういうつもりで急に言い出したのかわかんないけど、行かない理由も行きたくない理由も私が決めてるわけ。

それを行けとか知り合い作れとか、どういう目線で言ってるの？」

めっちゃ怒られたやん。おこやん。ぶんぶんやん。

「勉強だけじゃなくてさ、人とのつながりとか友達とか：

そういうのってやっぱコミュニティの中に入っていないと、な？」

「あんた…大樹さんは何？お父さんにでもなったつもり？」

お父さんて。3歳しか違わんぞ。

「とにかく、私にはそんな必要もないことに割く時間なんてありませんから。」

「ええ…。」

行っちゃったよ。ぶんぶん有咲。

「さあてどうしたもんか。」

早速困ったな。思い付きで喋るとホント碌なことがない。

ひとまずこの問題は後程考えるところとして、今日も蔵の中身に着手しよう。

「…ふう。」

黙々と作業すること数時間。

途中万実さんとの一服など挟みつつ、片付けやら仕分けやらと過ごした。意外と向いてるのかもな、こういう単純作業。

気付けば辺りは暗くなりはじめ、夕日のせいか風景が赤で塗られていた。暗くなったら上がっていいとの事なので、片付けに入る。

万実さんを探して店の方↓台所↓廊下等家の中、と探したのだが見つからず次はどこを探そうかと考えていた時

「……………！」

「……………!!」

蔵の方から声が聞こえた気がした。

「…客か？」

向かってみると。

「泥棒！」「ご、ごめんなさいい！」

ぶんぽう：有咲ともう一人、丁度有咲くらい歳の女の子が何やら揉めていた。

「あんた誰？何狙いで蔵に入ったわけ？」

「わ、私は…その…」

ははあ。あの子が侵入したところとっ捕まえたってとこかな。

もう少し見ているのもアリだが、有咲がマジで通報でもしたら面倒だ。

「有咲ー。何かあったのかー？」

近づきながら声をかけてみる。

「あー？あ、大樹さん。」

こいつ、蔵に侵入してたからさ。きつと骨董品か何か狙いの泥棒だよ。」

「違うんです！私はその、キラキラを集めてたらここに辿りついちゃっただけで

！」

…キラキラ？

「えーっと。」

有咲、取り敢えず一旦その羽交い絞め解いて。話聞こ。」

「：嫌だけど。女子だからって甘くするところじゃないでしょ。」

泥棒だよ？泥」

「わかったから、俺が見てんだから簡単に逃げるわけにもいかないだろう？」

「はあ…。」

渋々といった様子で腕を解く。

「あ、ありがとうございます。」

「で、早速なんだけど。君は？」

「あ、私、戸山香澄です！花咲川女子学園高校・1年A組です！」

「花咲…川…。」

「ほー、有咲と同じ年か。」

「そうなんですか！？アリサ…ありさ…。」

あ！市ヶ谷有咲…さん？」

「え？そ、そうだけど。」

「そうだったんだ…。クラスで凄い頭のいい人がいるって教えてもらったんです！
会えてよかった！」

「はあ！？私は別に…誰にも会いたいとかないけど…。」

「まあまあ…。で、香澄ちゃん？だっけ??」

「はい！香澄です！」

元氣良いな…。

「君はなんでこんなところに入ってきちゃったの？」

「それは…」

数秒ウンウンと唸り言葉を探した後、「あっ」と何か気付いたような素振りを見せ
何かを差し出してきた。

「…なにこれ。」

「これ、帰り道の途中で見つけて。」

辿っているうちに、ここに着いて…」

「…シール？かな？」

ずっと握りしめていたのか、端の方は手汗でしんなりしているが
それらは星形のシールだった。

「ああ、星かぁ。これがキラキラ？」

「そうなんです！私、星型の物とか見るとつい意識がそっちに行っちゃって…」
あー、わかるわ。俺も赤いものとか見るとつい買っちゃう。

「なるほどな。じゃあ本当に偶然でここに来たってわけか。」

…にしてもこのシール、一体何の…」

有咲に訊こうと隣を見やると

「……ッ！」

真っ赤な顔の有咲と目が合った。

え、なに。またぷんぷん有咲？

「有咲？それどういう表情？」

「それ…貼ったの、小さい時の私だ。」

「えっ」

「そうなの!? 有咲も星好き? 小さい時ってどれくらい? ずっとここに住んでるの? このシールどこで買ったの?」

あ、学校も同じなんだっけ! どうして学校来ないの? 一緒に行こう? それとも「ちよ、ちよっとまで! 急に食いついてくんない!」

すげえ食いつきだ。

流石にいきなり泥棒扱いされたからか、最初こそ一歩引いて話していたのに今では逆に有咲を組み伏せそうな勢いで質問攻めだ。

星のシール、チートアイテムか何かだよ。

でも今いいこと聞いたな。

「香澄ちゃん? …学校、楽しい?」

とりあえず星のシールについては後回しとして

「はい! 毎日新しいことばかりで、ドキドキするっていうか、見るものの全部がキラキラしてるって感じです!」

「なるほど。すげえ楽しいのは伝わった。」

テンションたっけえ。

「…有咲と一緒に学校行ったらもつと楽しそうだな？」

一緒に登下校したり、飯食ったりさ。クラスが同じかどうかはわかんないけど、
同学年だろ？」

「——！！！」×2

「ちょ、おま、何勝手に…！」

「行きたいです！いこ？有咲！」

「お前も急に何言って…てかそんなんでもいいのかよ。」

私が…その、どんな奴かだってわからないじゃんか…。」

「えー？うーん…」

しばし考える香澄ちゃん。

「んー…でも、有咲も私の事、わからないでしょ？」

わからないことを知っていくのって、すっごいドキドキするしワクワクするんだ

よ！

それで、その先で有咲とすっごい仲良しになったら、きつとものとキラキラした毎日になると思う！」

「全然わかんねえよ！」

…わかんねえ…けど…。

いいよ、学校、いくよ…。」

「!!有咲ー！」

香澄ちゃんが飛びつく。

「だー！もうくつつくなよ!!

それと！一個条件な!!」

「なあにー有咲ー」

「…早く私の事、知るためにもさ。

お昼とか通学とか、ずっと一緒にいること。そうじゃないなら、行かないからな

！」

「もちろん！ずっと一緒だよ!!有咲！」

あー…うん。

なんかあつという間に問題解決しちゃったけど、何かこう、目の前の風景がすごく儂いや。

「よし、じゃあ香澄ちゃん。有咲の事よろしくな。」

「あ、はい！任せといてください！えへへ」

「いい加減離れろよ！もう…」

名残惜しそうに離れる香澄ちゃん。

「あ、そういえば、お兄さんは何てお名前ですか??」

「あー名乗ってなかったな。ごめん。」

常盤大樹ってんだ。」

「大樹さん…大樹さん…。覚えました！」

「うん。よろしくな、香澄ちゃん。」

「呼び捨てで良いですよ！」

「そ？ おっけい。」

＊＊

ひとまず、時間も時間なので香澄は帰った。

その後の有咲はというと。

「なんであんな余計なこと言ったの。」

ちよいとおこだった。

「余計っていうか、この子なら有咲と仲良くしてくれるかなーって何となく…」

「それが余計っていうの。」

有咲の部屋でプチ説教をかまされていた。

「ああ…ごめん。」

「それに…。」

そ、その、大樹さんが仲良くしてくれてるから、別に友達とか…いいんだけど…」

「え？俺は俺、友達は友達だろ。」

「そうじゃなくて…あーもういいや。」

「??あ、そうだ。このシールなんだけどさ。」

有咲が途中で話を放棄したところで、香澄から渡されていた例のブツを思い出した。

「これ、貼ったの有咲なんだよな？」

「どういった…」

「あ？…小さい時にさ、ピアノ習ってて。」

そこで一曲弾けるようになる度にご褒美って、一枚ずつもらってたんだよ。」

「ほー…ピアノねえ。」

今は弾いてないのか？」

「今は別に。特に弾きたいとも思わないかな。」

ふーん。飽きたとかかな。

因みに俺もピアノを習っていた。シールこそ貰わなかったが、小さい頃は同じようにご褒美があったっけ。

「さて、明日は学校か。」

「迎えに来るって言ってたもんね。準備面倒くさ……」

「ま、いいじゃんか。可愛い子と二人で登校なんて、憧れちゃうわ。」

「は？」

「香澄と一緒になんだろう？」

「……。もう寝るから部屋出てって。」

「はい？いつももっと夜更かしするじゃ」「出てって。」

追い出されてしまった。

なんだよ、もう……。

「明日から学校頑張んな。おやすみ。」

そう言い残し、返事ももらえないまま自室へ向かう。

……俺も寝るか。することないし。

香澄可愛いです。

仕事の合間に書いているため、更新は不定期になりそうです。

一応書き溜めを作ってから投稿の流れで行けたらとは思っています。

1・2..質屋 迷子

書き溜めてある分より、2話まで投稿します。

折角流星堂に住んでいるのにほぼ有咲と絡みがない感じがしますね。

追々増えてくるでしょう。というか増やします。

「おっはよーございまーす!!」

次の朝、いつものように居間へ向かうと、元気のいい挨拶が飛んできた。

「：おはよう、香澄。」

「有咲はまだ寝てますか??」

「うん。てか早くない?」

「有咲と学校行くなって考えたら眠れなくて!」

可愛い。

「あら、大樹さんおはようございます。」

「おはようございまーす。」

「おばあちゃん！この玉子焼きすっごくおいしいです！」

「あらあら、それはよかったわ。お替わりは？」

「いただきます!!」

元氣いっぱいだよ。

「俺、有咲起こしてきますね。」

「はい、お願いしますね。」

毎度思うが、起こしてから二人で居間に向かえばいいんじゃないだろうか。

二度手間だ。などと考えている間に有咲の部屋。

昨日追い出された障子に手をかける。

「あけるぞー」

「ちょ、ちょっとまって！」

いつも通り声かけながら部屋に入った俺が目にしたのは

パジャマ姿で慌てる有咲と床に散らばった大量の下着だった。

「えーっと…。」

「待てって言ったらー！つーか返事するまで開けんな!!」

「悪い！」

バーンと音になるほど戸を閉めつつ退室した。

中ではまだ何か喚いている声が聞こえる、が。

俺の頭の中はその声を聞き取る余裕がないほど、下着のことでいっぱいだった。

なんだあれ、あんなでけえの付けんのか。

最近の高校生はその、発育がいいとか何というか…。

「背は、低いのにな…」

「おい変態。」

背中から低く冷たい声が聞こえる。

「…お、もう着替え終わったのk」「何も見てないよな？」

「えっ」

「何も 見て ないよな？」

何だ？ どれを見られたことに怒ってらっしゃるんだ？

「えーっと…下着のバーゲンセールでもやってたのか？」

「……。いうな。」

「何を。」

「香澄には、言うな。」

「…なんで。」

「下着で迷ってるとか…知られたく無いだろ。」

あーそっちか。

てっきり下着を見たことに怒ってんのかと思った。

「それは言わないけど、有咲って結構胸有るんだな。」

「…あ？」

「背もちっさいからあんまり気にしてなかったけどなかなか…」

「…殺す。」

「えっ」

物騒なことを言い残して廊下をズンズン歩いて行かれた。

「なんだったんだ…。」

大きいことも気にしてたら申し訳ないし、もう触れないようにしよう。

「…と、俺も飯食わなきゃ。」

居間へ向かう。

その後は特に何もなく、初々しく学校へ行く二人を見送り、また蔵の作業に取り掛かった。

作業しつつも頭の中に下着の画像がこびりついていたのは、まあ仕方ないだろう。

✕✕

昼過ぎだろうか。

疲れた腰を伸ばし、日の下へと出てきたところで、またも見慣れない来客を見つけた。

水色の髪をサイドで括り、きよろきよろと回り見渡しながら泣きべそをかいている女の子だ。

…ここは女の子を惹きつける何かでもあるのだろうか。

視線を下へずらすと制服で、学生であることがわかる。しかもその制服は…

「ああ、有咲や香澄と同じ学校の…なんでこんな時間にこんなところに…？」

暫く観察しているとついに涙がぼろぼろ零れ出し…たところで目が合った。

「……………」
「……………」

えーっと…。

声をかけるべきか否か。

不審者扱いされるのもアレだしなあ。

でも泣いてる子を見て見ぬふりってのも…うーん…。

この間もただ見つめあっているだけである。

近づいてみる。

ビクッと怯えたような態度を一瞬見せたが、逃げずに居てくれた。

「君…花咲川の子？」

「ふえ?? えっ、あの……そ、そうです、けど…。」

「ああ、いきなり声かけてごめんね。

怪しい人とかじゃなくて、ここに住んでる者なんだけど、泣いてるのが見えたか

らついいね。」

「す、すみません…でした…。」

「……………学校の時間じゃないの？」

「そうなん、です、けど…。」

まさか素行の悪いタイプか。

そんな風には見えないが…。

「学校に行こうと思ったら…迷っちゃって…。」

「??? え、いつも違うルートで通ってるとか？」

「ふええ、ちがうんです。いつも通りの道が、工事とかで通れなくて遠回りしてたら知らないところに来ちゃってそれで…あうう。」

あー。

ちよつと方向感覚がアレな子なのか、要は。

「そっか。」

スマホとか、持っていないの？GPSで地図とか見れるでしょ？」

「地図を見ても、いつも迷ってしまうみたいで…。」

詰みです。便利ツールも意味なしじゃどうしようもないよね。

でもなんだろう、この庇護欲をそそられる感じ。

「：俺、常盤っていうんだ。常盤大樹。」

「ふえ？あ、わ、私は…ま、松原…花音といいます…。」

「そか。花音ちゃんな。」

いっぱい歩いて疲れたろ？取り敢えずここダイレクトに日光浴びるし、日陰で一回足休めよ？」

「え、いやでもそんな…。」

「あ、怪しくないから大丈夫だよ。ここの、質屋の店員さんもいるしね。」

「そう、ですか…。じゃあ、ちょっとだけ。」

「ん、こっち来て。」

縁側に案内し、休んでもらう。

知らない場所に来ちゃって困惑しながら歩き続けて…きつと足にもだいぶきてるだろうし。

「——そうだったんですね。ここが市ヶ谷さんの…。」

「あいつ、先輩の間でも有名なの？」

そこから話をするに数十分。

ようやく打ち解け、花音ちゃんのことともいろいろと聞いた。

何でも、有咲達の通う花咲川女子学園の2年生らしい。

少しでも気を緩めると迷子になる体質だとか。どんな体質だ。

「でも、さすがに今日はもう学校いけないよなあ…」

「この時間じゃ、行ってもあまり意味ないですね…。」

時刻は14時を過ぎたところだった。

午前中いっぱい歩き回ったとして、体力的にも厳しいだろう。

「ずっとここに居るわけにもいかないし、今日はタクシー呼ぶから帰んなよ。」

「え！そんなタクシー使うなんて…勿体ないです…。」

「いいからいいから、また迷子になっても俺探しに行けないしさー。確実に送ってもらえたほうが安心だろ？」

言い合っているアレなのでもう呼んじゃう。

タクシー配車アプリマジ便利。

「5、6分で来るってさ。自分の家の住所は言えるかい？」

「あ、ありがとうございます。大丈夫です。」

「そ。」

沈黙。

何か言いたそうにこちらをチラチラと見てはいるんだが、何も話しかけてこない。話しかけられないのかな。

「どうかした？」

「ふえ？あ、その…何か御礼をしなくちゃ、と、思いまして…。」

「えーいいよ。」

俺としちゃ、可愛い子とお喋りして過ごせたってだけでラッキーだしさ。」

「かわいいだなんて…そんな…。」

「…照れてんの？」

真っ赤ですよ。いわないけど。

「もう、冗談はやめてください。それじゃ、ええと…連絡先交換しても、いいですか??」

そんな顔真っ赤の上目遣いで訊かれたら断れないでしょうよ。

断る気サラサラないけど。

「ん、いいよ。」

…悪用しないでね？」

「し、しませんよう。今度、御礼をさせてほしいので、その時に使うんです。」
メッセージアプリでお互いを登録しあう。

そういえば上京してきてから初めてだな、こういうの。

有咲とも交換してねえや。

「御礼ね…。別に無理してそんなことしなくていいんだよ？」

また会えるってんなら、楽しみにはしとくけどね。」

「無理してないです！あと、メッセージとか、送っても迷惑じゃないですか??」

「全然いいよ。作業中とかは返せないかもしれないけど、そこは勘弁してね。」

「…やったあ。」

そんなに嬉しそうにするもんかね。

何だろう、香澄とはまた違った感じだけど、可愛らしさってのが溢れ出てる気がする。

守ってあげたくなる的な。

と、癒されているうちにタクシーが到着した。

「今日はゆっくり休むんだよ」

帰り分の運賃と自販で買ったお茶を渡し、見送る。

最後まで顔真っ赤だったけど、熱とか出てないといいな。
熱中症とか、怖いしね。

かのちゃん先輩も可愛いので好きです。

今作中だと主人公より後輩って感じですけどね。

1.3.. M I D N I G H T 迷子通信

諸事情により再投稿しました。

ピコン。

「？」

迷子と仲良くなった日の夜。

程よく満たされた腹を自室で横たえていると、

普段は大人しいスマホから通知音が。

「：おっ」

画面ではメッセージアプリがチャットの受信をアピールしていた。

基本的にぼっちな俺だ。

相手も大方予想は付くが、

「やっぱ花音ちゃんか。」

『こんばんは。今日はありがとうございました。』

律儀な子やな。

『無事に帰ったかい??』

『はい！おかげさまで。』

（お辞儀をするクマ？のスタンプ）

『そりゃあよかった。』

『足、疲れたでしょ？』

ゆっくり休むんだよ。』

『ありがとうございます。』

(笑顔のクマ？のスタンプ)

『今、何してましたか??』

『飯食ってゴロゴロしてたよ。』

夜ってすることも特になくてさー。』

実際に予定もないので、ただひたすらゴロゴロすることが多いのだ。

『そうなんです。』

私も、今課題が終わって一息ついてたところなんです。』

真面目え。

自慢じゃないが、学生だった頃は課題なんかまともに取り組んだ覚えがない。そりゃ高卒でブラブラする羽目になるわけだわな。

『一つ、訊いてもいいですか??』

ん。

『なに?』

『常盤さんは、市ヶ谷さんと

仲良しなんですか？』

『同じ家で暮らしてゐることだったので…』

どうなんだろう。

仲良しなのかな。

特に仲が悪いってわけではないけども…うーん。

＊
＊

直接訊いてみることにした。

有咲の部屋の前まで来たが、中は無音。早寝なのか？

すうー。

「コンコン！有咲！コンコン有咲！」

呼びかけてみると。

「うるせえ！」

キレ気味の有咲が出てきた。

ぷちぷん有咲。

「なんで怒ってんの。」

「夜遅くにいきなり大声出されたら誰だってびっくりするでしょーが！」

「あーそれはすまん。」

「で、コンコン！て何。」

「障子だしノックするのもなんだかなと思って。」

「だからってコンコン言うことないでしょ。」

「ユニークだろ？」

「微妙。」

「あそ。」

よかった。

別に機嫌悪いわけじゃなかったんだな。

コンコンはお気に召さなかったみたいだが。

「で？何の用事？忙しいんだけど。」

「あーそうだったそうだった。」

あのさ、俺と有咲って仲良しかな？」

「あ？」

さっさと聞いて部屋に帰ろう。

返事待たせてるし。

「なんで急にそんなこと言いだしたわけ？」

「え？えーと…何か気になって？」

花音ちゃんのこととは特に言う必要ないだろうし言わなくていいか。

「ふーん…？」

…ずっと入り口で立ってる気？」

「え？まあ、用事とか特にないし。」

「あっそ。じゃあ早く帰れば。」

閉められそうになる障子を慌てて止める。

「ちよちよ、質問の答えは？」

「さあ。別に仲良くないんじゃない。

常盤さんはただの居候ですし。」

あれ。

何だ、纏う空気の温度が急に下がって…。

「ただの居候って、急に辛口過ぎない？」

「じゃあなんなんですか。私と仲良くなりたいたいんですか。」

「そりゃまあ、仲悪いよりは良い方が、なあ？」

「へー。私は別にどっちでもいいんですけどねー。」

常盤さんのこともなんとも思っていないしー。」

「苗字呼びやめ」

「ん」

ポケットから通知音が。

「まあいいや。」

俺は有咲と仲良くなりたいたいと思ってたんだけど、嫌だったんだな。ごめんな。」

「えっいや、その、嫌ではないというか…なんというか…。」

いやどっちゃねん。

「私だって、仲が良いに越したことはないって思ってるけど…

大体、大樹さんが急に」

『ピコン』

「……。」

待たせてる花音ちゃんかな。

もうちょっとしたら返信するから待ってくれ。

『ピコン、ピコン、ピコン…』

え、え、なにこれ。

めっちゃなってる。

「凄い鳴ってるけど、見なくていいの。」

「うん、今は気にしなくていいよ。」

『ピコン、ピコン、ピコン』

流石に何かあったかな？

うるさいし見てみるか。

「ごめんごめん、ちょっと一回見るわ。」

「お、おう…。ってか別に、もう用事無いなら戻っても」

『常盤さん？』

『答えにくいことだったらすみません。』

(アセアセしているクマ?のスタンプ)

(おーい!とメッセージ付きのクマ?のスタンプ)

『見てくれてないんですか?』

『忙しくなっちゃいましたか??』

『あ、いっぱい送っちゃってすみません…。』

『夜も遅いでもんね。』

『常盤さん?何中ですか?』

(首を傾げているクマ?のスタンプ)

『寝ちゃいました?』

『気づいてないんですか??』

『どうして既読もつけてくれないんですか?』

『嫌われるようなこと言っちゃいましたか…?』

『常盤さん』

『市ヶ谷さんと一緒に居るんですか?』

「怖っ……！」

思わず顔が引き攣る。

「なんだったの？……ッ！」

俺の顔を見てか、覗き込んだ有咲もビクッと固まる。

「……なにこれ、彼女？」

「んなわけあるか。」

やばいやばい。

この子はちょっとアレな感じの子だったのかもしれない。

有咲の部屋に来てからまだ10分も経ってないはずだ。

どうでもいいけど、このピンクのクマっぽいキャラクターはなんなんだ。
お気に入りか。

「……花音、ちゃん。て誰？」

「ま、まあ色々あってな……。」

「返信、してあげたら？」

「仲良しって返事していいかな。」

「……知らない。」

「知らないってことは無いだろ……」

「もう知らない！部屋戻って！」

「またも追い出されてしまった。」

「そんなに嫌われてんのか……」

「取り敢えずありのまま返信する。」

『いやーごめんごめん。』

『ちょっと有咲と話してて気づかなかったよー。』

『ピコン』

「早っ。」

『そうだったんですか。』

ごめんなさい、色々送っちゃって。』

『それで、仲の話だけど。

普通、かな？（笑）』

『友達っていうか妹みたいな感じ。』

『付き合ったりとかじゃないんですか？』

『それは…ないかなあ。』

.....。

ぴたりと返事が来なくなった。

まあ取り敢えず、さっきの怖い感じは気のせいだったのかもしれないし部屋に帰ろうか。

「あ。」

もう一度部屋に向き直る。

「有咲ー。」

「…なに。」

「有咲も登録していいか？」

「……入って。」

その後花音ちゃんについて触れてくることは無かった。

登録し終わった有咲は心なしか上機嫌で、

今度は追い出されることなく「おやすみ」で別れることができた。
あの子もぼっちだもんな。

部屋に戻っても花音ちゃんからの追撃は無く

さっきのやり取りは夢だったんじゃないかと思うほど暇だった。

有咲にメッセージを送ってみようかとも思ったが、特に話もないのでやめた。

「…何かやること見つけないと、ホンツツツツト暇だわ。夜とか。」

独り言ちてもキリがないので本日は就寝。

早寝早起きは体に良いゾ。

明日からは作業と並行して街の探索にでも繰り出してみようかと思いつつ
意識を沈めていった。

ヤンデレ気味なかのちゃんだと最高なんですけどね。

好
か
れ
た
い
で
す
ね。

2・1..市街 おさんぽ日和

なんということでしょう。

本筋も考えずに書いていると、もうゴールを見失いつつあります。

一つ新たに物事を学習したとして。

『ソレ』について覚え、慣れが出始める。要するに習慣化する。

すると、次第に飽きが来る。

悪い意味ではなく、つまりは『トキメキ』がなくなるのだ。

それにより幼少期より成人以降の人間の方が体感時間が短いなどとも言われてい

る。

何が言いたいかというと。

「新しいことを始めたい。」

任されている仕事にもやりがいはあるし、のんびりした時間も好きだ。
だが、あまりにもそれ以外が無さすぎる。

毎日関りがあるのは万実さんと有咲だけだし、
時間の使い道も作業・食事・睡眠くらいしかない。

「うーん、若いのに勿体ないぞ…」

爺さんみたいなことを言ってしまったが、新しい刺激が欲しい。

「相談してみるか…。」

交渉の結果。

万実さんに休みをもらい街の探索に来ている。

「たまに外歩くと新鮮だなあ」

取り敢えず、学校でも目指してみようと思う。

それまでの道のりで何かしら見つかるだろ。

目的地を有咲の通う花咲川女子学園高校周辺とし、ブラツキを兼ねて合流を目指す。

今日は一日歩いちゃうぞー。

流星堂から出て橋を渡り…直感を頼りに歩く。

「ほー、ライブハウスか。」

※CIRCLE※と看板にある、ライブハウスを通過し。

「すげえ、横溝さんが2件続いてる！」

住宅街でどうでもいい発見をしつつ。

都市開発の進んでいると思われる、高層ビルなどの立ち並ぶエリアに来た。

どうやらショッピングモールなんかもあるらしい。

ふむ、買い物やゲーセン目的にも使えそうだな。

ゲームといえば、地元に住んだ頃は一軒だけあった駄菓子屋のゲーム筐体に熱中したりしたものだが…

「いや、せっかくの散策日だ。ゲーセンでつぶすのは無いだろ…。」

頭の中で浮かびかけた案を却下し、そろそろここから離れようかとしたとき。

「なんだあの人だかりは…」

有名人でも来ているのだろうか。

そんなに大勢でもないが、まあ目に付く程度には集っている。

同時に聞こえる声・音に惹かれ、立ち寄^{野次馬}ってみることにした。

そこで見たものは少々異様な光景、というか

「…いじめ？」

エラく顔の整った少女が二人居た。

一人——日本人離れた綺麗な長い金髪を靡かせ、金色の瞳を輝かせる少女——
が

生き生きとした表情で歌い

その隣で、見覚えのある青髪の少女が泣きながらドラムを叩いている。

…どういう状況だこれ。

とりあえず面白そうなのでしばらく見ていると、青髪——花音ちゃんの真っ赤な
目と

視線が重なった。

…が、あのメッセージの事もあるので逸らし

隣で歌い続けている金髪の子を観察する。

花音ちゃんが冷たい目で見ているような気もするが無視だ。気にしない気にしない。

「綺麗な髪だな…。外国の子かな？」

よく手入れがされているのか、日の光を反射し眩しいほどだ。

香澄がいたら「キラキラ」とか言って突撃しかねないなこりゃ。

顔立ちの幼さから言って、中学生くらいだろうか。

何にせよ私服じゃわからん。

「ん」

いつの間にか歌は止み、金髪の子もじっとこちらを見つめていたことに気づいた。周囲の野次馬もぞろぞろと解散していく中、金色の目は瞬き一つせずにこちらに向いていて――

「大樹さん。」

「うお!？」

吸い込まれそうな瞳に見惚れて（？）いたせいで彼女の接近に気づかなかった。
「なんだ花音ちゃんか…。」

今日は何してんの？私服だけど学校は？」

「どうして目、逸らしたんです？」

「あー…いや、まあ色々あってね。」

君が怖いからさ。とは口が裂けても言えない。

…なに、怒ってんの？

これくらいの歳の女の子ってみんなそんなよくわからんところに沸点あるの？

「へえ。あの子がそんなに気になったんですか？」

「あの子？ああ、歌ってた子でしょ？」

髪とか目とかきれいだなーって思ってた…。」

「…。」

「ともだち？」

「いえ、別にそんなんじゃない。」

「フーン…。」

何か不機嫌そうだし、散策に戻ろうか。と歩き出そうとしたとき。

「ねえ！あたしの歌はどうだったかしら！」

結構な声量で声をかけられた。

声量というより、通る声なんだな。

店で注文とかしやすそう。

「ああ、いい声だったよ。よく知らない曲だったけどね。」

「そう！でも、不思議なの。」

楽しくなるように歌っていたのに、集まった人はみんな不思議な顔で見ているだけだったの。」

そりゃそうだろ。

こんな路上で、しかも歌とドラムだけの組み合わせって。

おまけにドラムは泣いてるし。

「うーん……。多分だけど……」

簡潔に思った点を述べてみる。

「なるほど！ いーっぱい人を集めて、みんな笑顔で演奏したら楽しんでもらえるってことね！」

いっぱい集めてみんな泣き顔にならなきゃいいね…。

「ところで、あなたお名前は？」

私は弦巻ころろ！ ころろって呼んでくれていいわ！」

「ころろか。わかったよ。」

俺は常盤大樹。呼び方は…まあ好きにやってくれ。」

「大樹ね！ どういう漢字を書くの??」

「大きいに、樹木の樹だ。」

「素敵な名前ね！ 生命力を感じるわ！」

そんな言い方されたことはないな…。

「…大樹さんって、そういう字書くんだ…。」

「そういえば花音ちゃん？」

「ふえ!? な、なんですか??」

「ああ、ごめん。考え事の最中だったかな。」

「さつきは、なんで泣きながらドラム叩いてたん？」

「あ、あはは……」

流れはこうだ。

朝から何だか気分が落ちていた為、学校は欠席。

前々から練習はしていたものの上達している気がしないドラムの存在を思い出し

折角一日暇になったので中古としてでも売りに行こうと楽器屋を目指す途中

この金髪の子に声をかけられたと。

名乗られたため自分を自己紹介を……と律儀に返していると

話の流れから抜け出せなくなり、ドラムの話になった。

上手くならないからやめようと思う、と伝えるとそんなの勿体ないからと

その場で叩くよう言われ、渋々演奏してみると当の金髪は歌いだしてしまい

人だからが——と。

いや災難すぎでしょ。

この子、こころと言ったか。そのうちデカイ事件とか起こしそうだな。

「そっか…なんというか、ご愁傷様。」

「はい…。」

「？2人とも、どうしてそんな苦い顔をしているのかしら？

そうだわ！大樹も一緒に歌って、3人でもう一度演奏したらもっと楽しく」

「あ、俺ちよつと用事あるからごめんねー。」

巻き込まれちゃたまらん、と逃げ出すことにする。

「あら、それは残念ね。

それじゃあ、また会いましょう！」

また、会うのか…。

「そうだねー。」

「ま、まってください！大樹さん！」

「ん」

呼び止め、駆け寄ってきた花音ちゃんに耳打ちされる。

あ、いい匂い。

「この状況から、できれば抜け出したいので、協力してもらってもいいですか??」

「…えー…。」

「私の事、置いていきますか…??」

ああ、この上目遣い。俺弱いんだよな。

「…わかったよ。」

こころ？花音ちゃんのドラムなんだけどさ。ここに置いとくわけにいかないし、一旦家に持ち帰ろうと思うんだ。

で、手伝おうにも花音ちゃんの家分らないし、花音ちゃん借りて行っているかな？」

話の脈絡もないのに多少強引だったか？

「それもそうね！楽器を外に置きっぱなしってのも可哀そうだし、手伝ってあげて！」

あたしも何か手伝えることはないかしら??」

「そこは俺に任せといていいよ。力仕事になるしね。」

「そう。：それじゃあ、今日は帰るわね！」

一瞬シュン：とした表情になったがすぐに持ち直し言った。

「また会いましょっ！」

手を振りながら駆けていく姿は、完全に子供のそれだった。

それを手を振り返しながら見送り、花音ちゃんに向き直る。

「：これでいいかな？」

「ありがとうございます。助かりましたあ。」

「凄い子だったな。」

「：可愛かったってことですか。」

「まあ見た目はかなり整ってたけれど、勢いというか思考がなあ：。」

流れや空気を読むっていうより、あの子が世界って感じだったな。

「ああそういう…。」

「うん。じゃ、さっきもああ言ったし、花音ちゃんの家まで案内してもらえる？

ドラム、運ばないとね。」

「あ、はい。売るのは今度にしますね。」

あの事件の後で売りに行くのも嫌だよな。

その後家までの道を教えてもらい、ドラムを運搬。

自分の家には迷わず行けるんだなと、変なところで感心しつつ
全てが終わったところには結構な時間がたっていた。

「…よし！これで完了だなー。」

「ほんとありがとうございましたあ。すごく助かりました。」

「ん、ならよかったよ。」

じゃあ、俺はそろそろ行くねー。」

「え？え？上がっていかないんですか??」

「え。なぜそうなった。」

そんないきなり女の子の家に上がり込むような男じゃあないぜ俺は。
てか実家だし。何か色々ハードル高いしいやだわ。

「この前のと、今日のと、御礼とかできてないので、その」

「大丈夫大丈夫、御礼なんて気にしなくていいからさー」

「ふええ、そんなわけには…」

おどおどしているように見えて意外と強情だ。

御礼をしたいの一点張りで退いてくれない。

「うーん…それなら、今日はもう遅いからアレだけど。」

今度どこかに出かけるってのはどうかな。

俺もこっちに出てきたばっかで色々歩いて回りたいし、花音ちゃんみたいな子と

なら一緒にいるだけで褒美みたいなものだ。」

「ふええ、そんなことはないですけど…。」

でも、私も大樹さんとお出かけしたいです。」

「おっけ、じゃあそうしよう。」

日程とかはまたおいおい決めよか。」

「はい！」

まさに満面の笑みといった感じで頷く。

まあ、普段迷っちゃってお出かけどころじゃないだろうしな。

ところで…

「ところでさ、俺の事下の名前で呼んでたっけ？」

「あ…その、嫌、でしたか…？」

「全然嫌じゃないけど、ちょっと気になっただけ。」

「そうですか…。」

…その、市ヶ谷さんには、どっちで呼ばれてるんですか？」

「なぜ急に有咲が出てくるんだ。」

えーっと…大樹さんって呼ばれてる気がする。あんま気にしたことないけど。」

「へえ…。」

お気に召さなかったのだろうか。

呼び方で個性出したいとかそういう年頃かな？

「市ヶ谷さんのことは呼び捨てなんですね。」

「まあね。年齢的にも雰囲気的にも妹みたいな感じなんだよな。やんちゃな。」

「そうですか。」

「花音ちゃんも呼び捨ての方が良い？」

「ふえ!? あ、いやそのそれは…あう、どっちでも、呼びやすいほうで構いませんので…」

「そ？花音ちゃんは『花音ちゃん』って感じするんだよなあ。可愛い感じ。」

「かわいい!? 私がですか??」

「うん。ふわふわした感じ? 可愛いと思うよ。」

「…えへへ。」

喜んでるようで何よりだ。

でもほんと、雰囲気からしてまさに可愛いって子なんだよな。

こういう妹ほしかったよ…。

「じゃあ、またね？」

今日もあちこち探検して帰りたいんだ。」

「あ、はい、また…メッセージ、送りますね?」

「おっけー。まってるね。」

街の探索は、その後もちよつとだけ続いた。

——久々の運動により、膝が笑い出すまで。

こころちゃんも何とか取り上げたかったんですが
メインヒロインになってしまうほど濃すぎる子なので
追々分岐かifストーリーで書いてみたいです。

2・2..市街 対極の姉妹

不思議と休みの日には執筆欲が高まりませんね。

いくつか評価もありがとうございます！

すごく嬉しい半面、これから下がっていくんだろなあ…と恐怖でございます。

家を出てから数時間。

もうすぐ日が落ち始めようとするころ。

花音ちゃん宅からまた都市部へ向かった後、時間的にもよさげだったために高校を目指して歩いていた。

「ちょうど帰る有咲に会えたら一緒に帰れるしラッキーやな…と、ここか。」

校門と思わしきコンクリートの壁が始まったので、沿って歩く。

角を一度左折すると、門と下校し始める生徒たちが見えた。

「おお、ナイスタイミング。」

待っていれば有咲が出てくるかと思い、校門の少し横、邪魔にならないあたりで待機する。

道に突っ立っているのもどうかと、壁に背中を預ける形で生徒の流れをぼんやり見る。

「……そっか、女子校だっけ。」

当然、出てくるのは女性ばかり。

……俺、不審者っぽくね。

誰かに話しかけられでもしたらどうしよう。

俺、こう見えてあんまり女性得意じゃないんだ。

「……?」

そういえば、何か違和感があるな。

見た感じ学校だし、女子ばかりだから女子校ってのもあってるんだろうけど……どこだ、どこに違和感感じてるんだ。

「ねーねー。この学校に用事？それとも、誰かと待ち合わせー？」

ふと感じた違和感の正体を探ろうと、道行く女生徒をガン見していると不意に明るい声が飛び込んできた。

「えっ？俺？」

「そだよー。男の人なんて珍しいなーって思ってた。」

「あー：そうだよな、女子校だもんな。」

振り向くと、何が楽しいんだかニコニコ顔の少女がいた。

恐らくこの学校の生徒だろう。

にしても初対面の不審者とも取れるような異性にこうも気軽に話しかけられるとは。

恐ろしいコミユ力・若しくは勇敢さといったところか。

「誰か待ってるなら連れてきたげようか??」

「いや、初対面でそんな面倒掛けるわけにもいかないし、大丈夫だよ。」

「そう? 丁度暇だったし、面倒とか気にしなくていいのになー。」

「そうかい。ところで君は…」

「あたし? あたしはねー日菜っていうんだー。」

氷川日菜。」

「自己紹介どうも。日菜はこれから帰るところ?」

「まあねー。色々寄る所はあるけど、学校からは離れるかなあ。」

「そか。」

「……。」

「…………え、帰らないの?」

「えー? まだ名前も聞いてないし、何か面白そうだからもうちょっと居たいなーって思っ。」

何ということだ。

知らない男の人にこれだけ距離を詰めて、挙句自ら一緒の時間を作るなんて。

危ないからはよ帰んなさい。

「確かに、名乗らないのは失礼だよな。

俺は常盤大樹。待ってても面白いことなんかないから早く帰んな？」

「ヒロキ、ヒロキ…。

うん！ロキって呼んでいい?？」

「は?…ああ、あだ名ってことか。」

一瞬意味が分からなかったのだが、どうやらそういうノリの子らしい。

にしてもあだ名のセンスよ。

「もうちょっと何かないかね。

それだと最悪呼ばれても気づかんよ。」

「えーっ? うーんとねー…

じゃあ、ヒロくん? ヒロさん?」

何とかしてあだ名をつけたいらしい。

「もうなんでもいいや。

くんでも、さんでも、好きなほうにしてくれ。」

「わかったー。」

ヒロくんヒロくん……とブツブツ繰り返しながら、俺と同じように壁にもたれる。

「……。で、まだ帰らないのか？」

「……そんなにあたしと居たくないの？」

「居たいか居たくないかの前に、さっき会ったばかりか？」

逆に何故ここに居ることに拘るんだ？」

「んー。直感？て言うのかな。面白そうだなーって感じ？」

なーんにも答えになってません。

「……はあ。」

じゃあ俺そろそろ行くから。またね。」

絶対厄介なことになる。直感がそう告げたので、取り敢えずこの不気味なぐらい距離が近い少女——氷川日菜から距離をとることにした。

「えー、まってよー。」

…が、取れなかった。

この子すげえついてくる。

「……ついてきても面白いことなんかホントないぞ。」

「面白いがどうかはあたしが決めるんだもーん。」

「じゃあ、せめてそのぴったりくつつくのはやめてくれ。」

「えー？別に普通の距離だと思っただけだなー。」

そう、歩いていても思うが近いんだこの子。

すげえいい匂いしてくるよ…。

もう有咲と帰るとかどころじゃなくなったため、適当に歩く。

本当に面白いことなんかなくて、飽きてどこかに行ってくれたらいいのにと心から願っていたはずなのに。

「——日菜？」

途中すれ違った人が後ろから声をかけてきた。

日菜に。

「？あ、おねーちゃん!!」

おねーちゃん？

振り返ってみると、酷く訝しげな眼でこちらを伺う女性がいた。

なるほど。日菜をキツく・鋭くしたような顔立ちだ。

可愛いというより美人に属するタイプだな。

「日菜。こっちに来るなんて、一体どうしたの？

それに、そちらの方は一体…。」

「帰ろうとしたら校門のところで会ったんだよー。

ヒロくんっていうんだ。」

「ヒロくん…?」

「あー…えっと、常盤大樹といいます。日菜とはさっき会ったばかりなんです。」

「そうでしたか。妹がご迷惑をお掛けしたようです。」

私は、氷川紗夜といいます。日菜の双子の姉です。」

「双子かあ。道理で似てるわけですね。」

「なんでヒロくんも敬語なの？」

「初対面なんだからマナー大事だろ。」

「え！あたしには最初からため口だったじゃない！」

「日菜も最初からそんなだったろ……。」

この子、疲れる。

ただお姉さんの方は話ができそうなタイプだな。

「えと、紗夜さん、でしたっけ。」

「ええ、何でしよう常盤さん。」

「紗夜さんは、花咲川の生徒さんですよね？」

「ええ、制服でわかると思いますけど。」

これだ、違和感の正体。

制服が違ったんだなあ。

そりゃ人混みが違和感まみれなわけだ。

てことは

「姉妹で別の学校に通ってるんですね。」

「そだよー。」

「ええ、おかしいですか？」

「あ、いや別にそんなことは」

姉っえーな。

圧が実体化しそうな勢いだ。

話を変えよう。

「花咲川ももう学校終わってますよね??」

「ええ、終わってなきゃ私がここに居るのはおかしいでしょう？」

「はい、まあ…」

じゃあこの辺に居れば有咲にもワンチャン…

「あ！大樹さん！」

「お」

この声は…！

「大樹さーん！こんなところで、どうしたんですかー？」

香澄ちゃんだ！

「ちよつと色々あつて気づいたらここに居たんだ。」

「えー？大樹さん、迷子ですかー??」

「ちがわい。」

「えへへー、ですよねー。」

どうも可愛がつてしまう。

懐いた犬みたいなんだもん。

「…戸山さん、もお知り合いなの？」

「え？…あ、氷川さん…。」

サツと俺の陰に隠れる香澄。

「えっと…その…お、お知り合いです。」

「なんで隠れてんの。」

「香澄ー！急に走り出すと追いつけないだろうが…って、大樹さん？」

有咲も来たか。

「おうお疲れ有咲。」

「市ヶ谷さんまで……。一体どういう関係なのかしら？」

「げっ、氷川……さん……」

早々に顔を顰める。

有咲も、隠れこしなかったがこのお堅いお姉さんが苦手なようだ。
わかるよ。俺もなんか苦手だ。美人だし。

「おねーちゃん、怖がられてるよ？」

「うるさいわね。私が何かしているわけじゃないわ。」

「えー？また怖いこと言っただんじゃないのー??」

「私は、風紀委員として当たり前前の事をしているだけです。

さっき戸山さんを注意したのも当たり前前の事だったでしょう。」

「……香澄、何かやらかしたの？」

「そんな、何も、私は、全然、別に」

「あー、さっきな。部活とかの体験で周ってた香澄がちょっと無茶なこと言っ
た。」

「無茶にも程があります。全部に入りたいだなんて。」

「あー…。」

香澄だしな。わかる気がするわ。

視線を背中側で震えている香澄に向けると、今にも泣き出しそうな子犬がそこにはいた。

なんかあうあう言ってるし。

「全部入るのー？面白そうだね!!」

あたしもできるなら全部やってみたいかなー。」

「日菜は黙ってなさい。今あなたが喋るとややこしくなるのよ。」

「ぶー。」

頬を膨らます妹の方。

不思議なもんだな。

妹はあれだけ表情も豊かで、割と無茶苦茶そうなのに姉はまるで鉄のようだ。

表情はほぼ変わらないし、声のトーンなんかもほぼ一定だ。

こんなに似ないこともあるんだろうか。

「…とりあえず、さ。こんな往来で話すのもアレだし

今日のことはもう良くないか??」

「香澄も、理解はしたんだろ？」

「はい…無茶だってちゃんとわかりましたあ…」

「…：そうね。元より、ここで話し込む予定もなかったのだし。」

「うん、まあお姉さんみたいな風紀委員がいるとこの学校も安定だよな。」

「どういう意味？」

「…そのままの意味です。」

「あ！ねーねー。ヒロくん？」

言った通り、面白いことになったでしょー??」

にしし、と笑う日菜。

「俺は疲れたけどな。」

「へへー。でも、あたしはこの場に居合わせられてすっごい楽しかったよ！
るんっ♪てきたって感じ〜。」

「るん…?」

「また今度遊ぼうよ！連絡先教えてー??」

「あ、ああ…」

よくわからんが俺は一体何人と連絡先を交換するんだ。

そのまま自然に消滅するような関係じゃなきゃいいけど。

「ちよっと日菜。今日会ったばかりの人に失礼でしょう。」

「えー。でもヒロくんはいいって言ったもーん。」

「…あなたも、私は信用しているわけじゃないので。」

あまり日菜に変なことしないように。」

誰がするか。

「じゃ、おねーちゃん帰ろー。」

ばいばいー。」

「あ、こら日菜、引っ張らないで。」

騒がしく帰っていった姉妹だった。

騒がしいのは片割れだけだが。

「…俺たちも帰るか。」

「そうだな。」

心なしか有咲が静かで怖い。

またどこかで機嫌損ねたか??

ほんと沸点がどこにあるか謎すぎるせいで、一国の姫でも相手にしている気分だぜ。

「香澄も、帰ろうな？」

「うう……。」

もうすっかりしがみついている。

程よい高さの頭に手を載せてみる。

「!!」

そのまま撫でつつ、

「そんな怖かったか??」

もう大丈夫だから、取り敢えず離れて帰ろうな？」

「えっ……はい。」

しぶしぶといった様子で離れ、自然な様子で有咲と手をつなぐ。
めっちゃ仲良しになっとるやん。

俺だったら即行振り払われてるわ。

「大樹さん、香澄の事甘やかしすぎじゃない？」

「そんなことねえよ。普通だ。」

「私とは全然対応違うじゃん。」

「それは…まあ…。」

あ、そうだ。もういい時間だし何処か寄って帰ろうか？」

「はあ。」

「何。」

「露骨に話逸らすなって思ってた。」

えー。

俺このまま家に帰りたくないなあ。

絶対気まづくなるか機嫌悪くなるよこの子。

「あ、私いつも行くファミレスがあるんですよ！」

いつの間にか復活していた香澄が言う。

うん、元気なほうがかわいいぞ。

「大樹さん、おなかすきました??」

「まあね。昼も食わずに歩き通しだったし。」

「よかった！いきましよう！」

「ん。有咲も行くだろ??」

「……………」

いくよ。二人きりで行かせたら、何しでかすかわからないし。大樹さんが。」

俺かよ。

その後は有咲の言うようなことも当然なく。

それなりに賑やかに過ごし、それぞれ帰路に就いた。

今日、盛沢山すぎだね。

流石に少し疲れちまったぜ。

でも、やっぱり新鮮さって大事だ。

明日からの仕事に向けて、活力を充電できた一日だった。

今回は氷川さんちの姉妹が出ましたが、これからより一層キャラや関係性が崩壊していきますので

ご注意くださいませ。

3-1..XXX 市ヶ谷有咲

キャラ崩壊・設定崩壊注意です。

好きなキャラの見たいたい部分を出そうとした結果本筋がブレるってありますよね。
ないか。

最近、有咲の様子が変わだ。

素っ気ないし、話しかけても冷たいというか無視されることまである。

何かで怒らせたかとも思ったが怒らせるほどの絡みもない。

まるで皆目見当が付かないので、万実さんに訊いてみたが

「あらあら、喧嘩でもしたの??

私に対してはいつも通りなんだけど…。」

と特に情報は得られなかった。

流石に学校の事はわからないので香澄に訊いたりもするが

学校でも普通だという。

うーん。

タイミング的には香澄と出会って、学校に行き始めたあたりから徐々に素っ気なくなっていく感じがするし

学校絡みなんだろうか…。

直接聞くとしても夕方から夜にかけてしか話す時間がないし

難しいな。

因みに、メッセージは送ってない。

話しかけてもダメなんだし、どうせ無視されるだろうなと思ってのことだが。

※

「なあ、有咲。入っていいか？」

夕食後、俺は有咲の部屋の前に居た。

理由はもちろん。

「なあって。いるんだろ??」

少しの間があり。

「…なに。」

気だるげな返事だった。

「入っていいか？」

「好きにしたら。」

好きにしていとの事だったので入ってみる。

てつきり寝る体制にでも入ってるのかと思ったが、座椅子で胡坐をかいた有咲が目に入った。

「あのさ、最近俺にだけ冷たくしてるだろ。」

「…なんでそう思うの？」

「みんなに聞いたから、かな？」

「ふーん。みんなっていうのは、連絡先とか交換した女の子たちってこと？」

「とか、万実さんとか。」

「へえ。」

「…俺、何かしたかな。」

「別に。」

「そか。」

「……。」

「……………」

「質問終わり？終わったなら出てって。」

「……………」

何か空しくなって来た。

どうせおかしいと感じてるのも、何とかしたいと思ってるのも俺だけなんだ。
そう考えると、もうどうでもよくなるというか、無理に近づいても逆効果な気も
してくる。

「なんで黙ってるの。」

近づく。

「…なに。」

「ごめんな。」

自分でもどうしてこんなことをしてるんだかわからない。

ただ、何となく。最後に頭でも撫でてやろうと考えてたんだ。

「えっ、ちょちょ！ちょっと…！」

でも実際近づいてみて、目の前に怒ったような悲しんだような、変な顔の有咲がいて。

ミルクみたいな甘い匂いがして、近づいたのにまだ遠くにいるような、そんな有咲の小ささに気づいて。

そんな気もなかったのに抱きしめてしまったんだ。

「え…ちょっと…どういう…」

まで。俺何してんだ。

これやばくない？

いきなり抱き着くおっさんて怖くない？

いや誰がおっさんだよ。

違う違うそういう話じゃなくて。

ただ居候させてもらってるだけでこういう関係じゃないよな俺たち。

あれ？通報案件か？

つか有咲静じゃない？

「あ、と、その。すまん……」

離れてはみたが後の祭り。

寧ろ頭が冷静になれたからこそ、この状況のヤバさもわかる。

「……あり、さ……？」

俯いているため表情や感情は読み取れないが確実にこの状況が

シヤってしまった結果だというのはわかる。

「ご、ごめん有咲。」

変なことするつもりはなかったんだけど、俺としては仲良くやりたかったのを伝えたかっただけで……

より嫌いになったよな。ヤバイやつだよな。通報するとかそういう」

「今、どういう気持ちでしたの？」

「えっ」

その表情は見えないがさぞかし怒っていることだろう。

「だから、どうして急に抱いたりしたの？」

「——ッ！」

それは、その……」

上げた顔のなんとも言えない表情に思わず息を呑んでしまった。

なんだその、恥ずかしい？とは違うし怒っているわけでもない……。

ほんのり上気した、色気すら感じる幸福そうな表情は。

「もっと普通に、仲良くしたくて……。

少し前の、有咲が学校に通い始める前みたいな、軽口交わすような関係に戻りたかったんだ。

でも、最近口もきいてくれないし。嫌われたんだなと思ってさ。」

「……え？」

「結局、俺がいることで有咲が嫌な思いをするなら

俺さえいなくなれば手っ取り早いだろ？」

だからもう出て行っちゃおうかなとかいろいろ考えてさ。

でも、出て行くとしたらその前に引っかかっていた部分もあった。

そこはまあ俺の中で完結するようなもやもやだったんだけど、頭でも撫でながら有咲にぶつけて出て行こうと思って。いや何言ってるんだよって話だよな。ごめん」

「あーもう！いいよ。ごちゃごちゃしてきたからやっぱ答えなくていい！

長いし、言いたいこと伝わらないし。」

…ほんとすまん。

俺でも何言ってるのかわからないし、なんであんなことしたのか・何がしたかったのか

もうわからないんだ。テンパってるってやつだな。

今も、そんな表情見せるせいですげえドキドキしてるし。

「…私は。」

「私はさ、…今から凄く恥ずかしい事素直に言うけど、大樹さんも恥ずかしいことしたんだからおあいこね。」

「…笑わないできいて。」

「あ、ああ…。」

「急に素っ気なく・冷たく映ったって言ってたけど、嫌いになったとかじゃなくて、
どうしていいかわからなくなっちゃったんだ。」

香澄とか氷川さんの妹さんとか見ててさ、大樹さんに気持ちちゃんを見せられてるなああって。

そのうえで…香澄なんかは特にそうだけど、…懐いてます…って態度に出せてるの
凄くなって。

私も本当は、仲良くしたくて、その…あ、甘え、たり、とかしたくて

でも私そんなキャラじゃないしって色々考えてるうちに普通に接するのがわから
なくなってる。」

意外だった。

てつきり嫌われてるもんだと思ってたし、最初の頃から変態だのなんだの言われ

たのもあって

きつと俺が無意識のうちに何か嫌な思いをさせたんだろうと思ってた。

それに、

今日の前で喋っている有咲は、表情も話し方も声色も

俺が知っている有咲とは違うんだ。

気の強さや気難しさなんかは微塵も感じられないし、すごく柔らかく

気持ちやすっと伝わってくるような、そんな有咲。

これが、彼女が出したかった素なのかもしれない。

これを出すに出せなくてあのような態度になってしまっていたのだとしたら…。

「それでさっき、大樹さんに、その…だ、だだ抱きしめられたときに、

もしかしたら私にもそういう接し方してくれる人なのかなって。

私が素直にさえなれたら、甘えたりしても受け入れてもらえるのかもって思っ

て…。

だから、その…。」

そこまで言って言葉が続かないのかフラフラと視線をあちこち彷徨わせ。

やがて目は逸らしたまま小声で

「嬉しかった…の。」

胸が痛くなるほどドキドキした。

心臓病かな。

「有咲…。」

「だ、だから！私は、大樹さんが嫌いになったとかじゃなくて、ずっとずっと、好きだったってこと！」

「」

声も出なかった。

驚いたのもあるけど、素直な有咲がこんなに魅力的だと思わなかったからだ。

「その、付き合ってほしいとかそういうのかどうかは私でもまだわからないんだけど…

もっと、仲良くして、ほしいな。」

「有咲。」

「え?…ひゃっ!」

もう一度抱きしめる。

これでもかってくらいに頭を撫で繰り返す。

「有咲。」

甘えたいんなら、仲良くしたいんならもっとその気持ち出してくれ。

俺、女の子の気持ちとか全然汲み取れないから、今日有咲の言葉が聞けて嬉しかったよ。

すげえ可愛いって思った。…だから、その、もっと仲良くしよう。

あ、有咲が嫌じゃないなら、べったりってぐらい可愛がっちゃうぞ。」

「大樹さん…なんか言葉遣い若干気持ち悪いよ??」

…でもありがとう。大樹さんには、…大樹さんにだけは、もうちょっと素直になる、ね。」

自室にて。

「なんだったんだ一体……」

どうしてああなった。

なんだあの甘い空間は。

ついやっちゃった俺もどうかと思うが、一歩間違えりゃ通報案件からあの好転は予想できないだろ。

俺はこれからどう接していけばいいんだ。

甘やかす・べったり・仲良くする……

今までの人生で女の子と絡んだ経験がほぼ皆無の俺にそんなことがわかるはずもなく。

一つ解決してすぐにまた有咲絡みで頭を痛めることになりそうだ。

……尤も、それは今までにない、幸せな悩みなのだが。

——
その眠れない夜は、不思議と苦痛ではなかった。

3・2.. 周辺 有名人?たち

対バンライブイベント楽しいです。

スタンプ押しまくるのが楽しいですね。

「一睡もできなかった…。」

結局あれこれ考えてしまい、日が昇ってしまった。

正確に時計を見ているわけではないが、午前4時から5時ごろといったところか。

「…近所の散歩にでも行くか。」

眠気はほぼなく、体力もいやに有り余っているので

近くの自販機を目指しつつ少し体を動かす。

熱暴走寸前まで悶々とした頭にも長閑な雰囲気と早朝の独特な爽やかさが届く。
やはり散歩はいい。

「…ん？」

こんな時間だが、空耳でなければ歌が聞こえた気がした。
いやいくら何でもこんな時間に歌ってる奴なんか…



確かに聞こえる。

恐らくアカペラだ。

「うま…くはないな。」

声の聞こえるほうへ行ってみる。

流星堂から十数分歩いたほどの場所にある公園。

遊具やベンチの錆び具合を見る限りあまり利用者もいなさそうだ。

太鼓梯子の横で、ジャージ姿の女の子が一生懸命歌っているのを確認した。
あの子が発生源か。

繰り返し一部分を歌っているところを見るに、趣味や遊びというより練習として歌っているのだと推測した。

あまりに一生懸命なので、ベンチで休憩がてら眺めてみることにした。

ピンクの髪を揺らし、体でリズムを取り、結構な声量で歌う。

確かに、早朝の公園でなければ注目を集めてしまうだろう。

どれほど経っただろうか。

疲れたのか、しゃがみ込み息を整えるピンクの子。

目的の自販機に行ってきた俺は無難にと買ってきた天然水を持って近づいてみた。

「お嬢さん。いい歌だったね。」

「…へ？」

後ろからいきなり不審者に声かけられたであろう彼女は怪しんだ目でこちらを…

…見てはいなかった。

寧ろ嬉しそうだった。

「…あ！あ、っと…聞かれちゃってましたー??

ちよっと最近振付の方に集中しすぎちゃって、歌が疎かになってた気がしたので練習してたんです。

自主練ってやつですかね。」

めっちゃ喋るじゃん。

俺この子と知り合いか何かだったっけ？と錯覚しそうになるほどだ。

「ふーん、そっかー。」

で、お嬢さんは歌い手さんか何か？」

なんだっけ。インターネットカラオケマン？だったっけ。

流行ってるんでしょそういうの。

「え」

固まるピンク。

「わ、私のこと知ってて声かけたんじゃないんですか…？」

「え？あー…俺少し前に引っ越してきたばっかだからあんまりこの辺の事詳しくなくて…」

ごめんね。地域の名物少女とかそういう感じ？」

「ちがいますー！」

お兄さん、テレビとか見ます…？」

「テレビは昔からあんまり見る習慣無いかなあ。

今住んでるところでも見ないし…。」

「あー…。」

「あ、わかった。カラオケの大会とかで有名になった人??」

「…お兄さん、わざとやってます?」

「んー…ごめん。ほんとにわかんないや…。」

ほんとにすまん。ピンクちゃん。

「…じゃあ、お兄さんにだけ特別に教えますけど…」

私、アイドルやってるんですよ。」

真剣な顔を近づけて小声で教えてくれる。

嘘は言っていないのだろうが…。

「へえ。」

「…え、それだけですか?」

えー!?とかうおー!とかないますか。」

「あ、そうか。」

…えええええ!!?アイドルう!!」

「やめてください!なんか恥ずかしいんで…。」

リアクションもお気に召さなかったようで、ピンクちゃんは膨れてしまった。
ほんとに「ぶー」って言ってるよ。

「ごめんごめん。」

で、君は何子ちゃん??名前聞いたらわかるかもしれないし。」

「そうですか…?」

口上があるとの事なので、やって頂くことにした。

「いきますっ!」

——みなさんこんにちはー!

まんまるお山に彩りを。Pastel*Palettes、ふわふわピンク担当
のまりゅゑ…!」

思いつきり噛んだ。

恐らく肝心の名前の部分だろう。

「まりゆ…まりゆさん？」

「ちぎやいまひゅ…」

「あーあー。舌、ちよっと切れてるよ…。

見せてごらん。」

んべっ。と舌を出させる。

深く噛み込んだわけではなさそうだが、暫くは熱いものが敵になりそうだ。

「もういいよ。」

「いひゃいでふ。」

「だろうね。」

「まりゆやまあひゃれふ」

「なんだって？」

はふはふ言っているが正直全く聞き取れないのでほっとくことにした。
そういえば、と思いメッセーシアプリを起動する。

「久しぶり、今面白い人を見つけたよ。と…」

こういう類の人間をいじるのが心底好きそうな知り合いの存在を思い出しチャットを入力する。

まだ朝も早いし迷惑かな、と逡巡したのは一瞬のことで、
ほぼ躊躇いもなく送信ボタンを押した。

『ピコン』

いや反応早すぎじゃないですかね…。

画面を見ると『白菜ちゃん』の文字。

俺が設定したわけではなく最初からこういうアカウント名だった。
因みに初めて見たときは真面目に『白菜ちゃん』だと思った。

ゆるキャラの公式アカウントでもコンタクトしたっけ？と困惑したもんだ。

『おはよう！ヒロくん！』

『面白い人って？ヒロくんより面白い？？
るんっ♪てする？？』

まあ俺なんかよりは確実に面白い子だな。

『もちろん。面白くてかわいくて、弄り甲斐のある子だぞ。』

『えー!!会いたーい!!』

(ギーと文字入りのキャラクタースタンプ)

「もう、お兄さん。なんで無視するんですか!!」

「…え。あ、ごめん、何か言ってた?」

「ずっと!名前!言っていました!」

「あーごめんごめん。知り合いからメッセージ来ててさ…。」

「もー。」

「ごめんね。もう一回だけ、名前言ってもらっていい?」

「丸山、彩です。これだけ言ったんだから、ちゃんと覚えてくださいね。」

「彩ね。口上から察するに、彩りって書いてあや?」

「そうです。いい名前でしょう。」

「ん、綺麗な名前だ。」

「ふふん。そうですね。」

改めてみるとなるほど、整った顔立ちだ。

「アイドルなのも納得だ。」

「え？名前がですか？」

「いや、可愛い顔してるなって。」

「え？え!? ナンパですか!？」

「違うけど？」

アイドルって言われても驚かないくらい可愛い顔してるってことだよ。」

ステージに立つ姿も想像に難くない。

きっと映えることだろう。

「え、かわいいですか。そう、ですか…。」

…よくそんな、面と向かって言えますね。」

「？変なことだったか？ごめんな？」

おっ? 着信だ。

画面には『日菜ちゃん』。

…すっかり忘れてた。

「ちょっとごめんな?

…もしもし。」

『ちょっとー! 面白い人がいるっていう話はどうなったのー!』

「あぁごめんごめん。

ちようどその面白い人と喋っててさ…」

「面白い人ってなんですか!!」

『ふーん…? じゃあ今もそこに居るの??』

「いるよ。てかよくこの時間起きてたな。」

『まあねー。おねーちゃんに寝起きドッキリしかけようとしてた！』
なにやってんだ…。

「そか、じゃあ紗夜さんにも宜しく。
切るぞー。」

『ちよちよっとまってよ！』

その人、紹介してくれないの!？」

「んー、今度なー。」

『えー!?今度って言ってまた忘れるん』『ピッ』

「あれ!?切ってよかったんですか？」

「え!?ダメだった？」

「お友達じゃ…なかったんです??」

お友達…お友達か…。

「いや、ただのちよっと頭おかしい知り合っているか。

…うん、苦手な子。」

「ふーん…。ヒロくんそんなふうに思ってたんだ。」

「え」

「あっ」

「…どうして、ここが…?」

急に背後より聞こえてきた声に振り返ると、まさに電話を切った相手が立っていた。

笑顔で。

「んー。なんかね。こっちかなー?こっちかなー?って歩いてたらヒロくんと彩ちゃんの声が聞こえたからさー。」

見つけたーって思ってたのに、そんなこと言われてるなんてさー。」

む、無茶苦茶すぎる。

そんな直感だけで人を探せるのかこの子は。

怪物か何か…？

「…白菜、ちゃん？」

「うん！おはよー彩ちゃん！」

「う、うん…おはよ…。」

なんということだ。

知り合い同士を紹介しようとしていたのか。若干disり気味で。

「…えっと…。俺は、そろそろ帰るかなあ…。」

「え？お兄さんもう帰っちゃうんですか??」

「うーん、色々忙しいからねえ…。」

目を逸らしつつ上手い言い訳を探すが、生憎焦りでそれどころじゃない。当然、全く忙しくもない。

あ、多分今シャツの背中色変わるくらいべっちゃだわ。

「ヒロくん？さっきまで彩ちゃんと楽しそうにしてたでしょ？？」

どうして急に忙しくなっちゃうのかな？？」

あたしがいると何かまずいこともあるの？

あ、そーか！苦手なんだっけー？頭おかしいもんねーあははー。」

「ごめんで…。」

ずっと楽しそうに笑っているがめっちゃ早口だ。

怒ってんだろうな。本音だったし。

「全然気にしてないからいーよーだ。

それより彩ちゃん、練習着なんか着て、こんな時間に何してるの??」

「あ、自主練…かな？あはは。」

「ふーん。自主練してたらヒロくんにナンパされたとかそんな感じかな??」

「おい。」

「うーん……まあ、だいたいそんな感じかも。」

おい！

ナンパ……してないよな??

「だってね。」

口に手を添え日菜の耳元に近づいていく彩。

俗に言う耳打ちだ。

「んー?…うん。……えっ！ヒロくんが、そんなこと言ったの??」

「///」

キッとこっちを睨みつける氷川妹。

「な、なんだよ…。」

「彩ちゃんに可愛いつて言っただんだ！」

あたしは言われなかったのに!! いーなーいーなー!!」

「か、可愛いつて言っただって、アレだぞ? 顔の話だぞ??」

初対面で見た目以外に何があるというのか。

言い訳になっていないが続けて

「それに、日菜はなんか可愛いつて感じじゃなかったから言わなかっただけで…」

「えー! 彩ちゃんばっかりずるいよー!!」

あたしにも言っただけ!!」

「…それで言われて満足なのか?」

「言っただけ! 言っただけ! はーやくー!」

ばたばた手を振り回し、まるで駄々をこねる子供のように繰り返す。

果たして依頼の挙句言われる言葉に意味があるのか甚だ疑問だが

視覚的にも聴覚的にもかなり煩いのでしぶしぶ

「…日菜、かわいい」

えらく棒読みになっちゃったがいいだろう。

日菜はというと。

「……。」

急に静かになり、俯いてモジモジしている。
え、これでマジでいいの？

「あ、ありがと……。」

照れてらっしゃる！

「え？え？」

ほら見ろ、ちよろすぎてピンクも困惑だ。

「えと…ヒロ、くんは…あたしのこと、どう思っ…」

「日菜ちゃん?? 日菜ちゃんってそんな感じだった!? ねえ?」

「…彩、そっとしといてあげよう。」

彼女は今深刻な状態なんだ。」

「え…このまま放つとくんですか!?!」

「だって、俺も居ない方向に向かってなんかぶつぶつ言ってるぞ。」

絶対今ヤバい状態だろ。」

2人で彼女を見ると。

「その、あたしが頼んだとは言え、そんなこと言われたら、やっぱり真に受けちゃうというか

か、かわいいって、よく言われるけどヒロくんと言われるとまたちがうっていうか…」

こわいこわいこわい。

ベンチの右側、屑籠との空間に向かって凄い速さで何かつぶやいている。まるで呪詛でも唱えているかのようだ。

※

「あー…あんな日菜ちゃん初めて見たな…。」

日菜は結局戻ってこなかったなので放置している。
今は彩を自宅まで送っている最中だ。

「そもそも、君ら知り合いだったんだね。」

「あ、そうなんです。」

さっき私アイドルやってるって言いましたけど、同じグループなんです。日菜

ちゃんと。」

「は？あれもアイドルなの？」

「あれって…」

見た目は整っているとは思うが、何しろ破天荒すぎだし

グループの活動とか真っ先に破綻させそうなイメージがあるんだが。

深く知っていけばそのイメージも変わるのだろうか…？

「いつもはあんな壊れちゃうような子じゃないんですけど、本当に嬉しかったんじゃないですかね。」

そんなに嬉しいもんかね。

あまり理解ができないなと思いき彩を見ると、苦笑し

「あんなに懐くのだってお姉さんくらいだと思ってました。」と付け足した。

「…なんだったわけ？グループの名前。」

「私たちですか?? pastel*Palettesです。」

「ばすてるぱれっと…」

ちよつと今後見てみようかな。

「ん、覚えたよ。」

応援するから、頑張つてな。歌とか。」

「う、歌は…：うう。：はい、ありがとうございます！」

「上手とか下手とかよくわからんけど、声は好きだぞ。ちよつと特徴的だし。」

「もー。すぐ揶揄おうとする…」

「いやいや、好きってのは本当だ。」

定期的に聞きたくなるなー。」

そのまま他愛もない話をしつつ歩くこと数分。

あとはここを曲がるだけですぐ家だというので解散することに。

「送っていただいてありがとうございます。」

「いやいいさ。丁度散歩しようと思って出てきてたしな。」

「それじゃ…」

「ん、頑張つてな。」

ぺこりとお辞儀をして角を曲がる。

姿も見えなくなつたので俺も帰ろう。

有咲がいる家に。

3・3..質屋 関係性

「おかえり。どこいったの。」

「た、ただいま。ちょっと散歩にな。」

気まずい。

帰ってくるなりこれだもの。

なんで朝からそんな顔真っ赤なんだ。

「あのさ、今日、なんだけど。」

「…ん。」

「学校、行かないからさ。」

「いや行けよ。」

「…？」

「何でそんな不思議そうな顔ができるんだ。」

学校行かないのが当たり前になっちゃいけません。」

「あっ。：今日、日曜日だよ？」

「あっ。」

学生じゃなくなって働くなり何なりすると曜日の感覚ってなくなるよね。

うん、あるあるだ。

俺だけじゃないはずだ。だよな？

「それは悪いことをした。」

考えてみれば、あの二人だって学校がないからこそあんな時間からアグレッシブだったのだ。

そうだよな。休みならきつとそうだ。

：てことは。

「だから、一日一緒に居られるなーって：思ったんだけど。」

「お、おう：。」

そんな見んなよ！

君そんな子だったっけ！

「…………。」

「…………。」

ほら気まずいだろ。

「…嫌？」

「全然？ただやっぱり、照れるなーって。」

「そう、だよね…。」

「あらあら、二人とも玄関で何してるの??

入ってきてお話したらいいのに」

万実さんナイス。

「そうだな。

取り敢えず中入ろうぜ。俺靴脱ぎたい。」

「う、うん。」

その後も妙にそわそわしつつ時間は流れ。

有咲に「聞いてほしいことがある」と言われたのは日も高くなった昼前の事だっ

た。

居間で向かい合って座る。

対局でも始まるかのようだ。

何やら、昨日あの後真面目に考えてみたらしいのだ。

昔から素直に甘えるのが苦手、というより経験のない有咲が俺とより仲良くなるためにどうしたらいいのか。

考えた末たどり着いた答えが――

「え、マジで言ってるの？」

「マジ、です……」

真っ赤になりプルプルしながら頷く。

彼女の提案は、「お兄ちゃんになってほしい」だった。

続けて言うには、兄が欲しいのではなくそういった関係性のように振舞えば

仲良くしやすい状況ができるんじゃないかとのこと。

一見冗談かとも思える提案だが、この有咲の照れっぷりを見るに真剣なのだろう。

「そういう願望があんの？ 兄妹プレイがしたいとか？」

「ぶ、プレイっていうなあ！

一人っ子だし友達もないしで、特に異性なんてどうしていいかわかんないんだもん…。」

「俺は構わないけど…」

最終的にどこに向かいたいのか。

関係性の着地点が謎すぎるがこの提案を呑むことにより有咲の可愛い面をもっと見られるなら

俺は喜んで兄になろう。

「じゃ、じゃあ…ヒロにいつて呼んでもいい？」

「お、おう。」

恥ずかしい呼び方だとは思うが、悪い気分ではない。

あまり外で呼ばれるとアレだが。

「ありがと。私、頑張るね。」

「おう。がんばれ。」

「うん。」

？

話は終わったんじゃないだろうか？

まだもしもじしつ、時折こちらを伺うようにちらちら見てくる。

どうでもいいが、俺の心の声擬音多すぎね？香澄かよ。

「えっと…ヒロ、にい？」

「んー？」

「これから、頑張ることにしたから、その…

頭、撫でてほしいな…。」

「……………」

い、いかんいかん。

思わず真顔で固まってしまった。

ホントに誰なんだろうかこの子は。これが素だとしたら今までの殻固すぎやしませんか。

「あ、嫌だったら別に…いいんだけどさ。」

前に香澄が撫でられてるの見て、ちょっと羨ましかったっていうか…。」

「あ、ああ…」

「……おいで。」

「——！……うん。」

そばに擦り寄ってきたので目線の高さにある頭に手を載せる。

一瞬ビクツとしたが、されてみると心地よかったのか

手のひらに頭を押し付けてくる。

もともと小柄なのもあって、小動物でも愛でている気分だ。

暫し時間も忘れ撫で続ける。

そのうちだんだんと有咲の体から強張りが解けていき

最終的には胡坐をかいている俺に背中から体重を預けるようになった。

今じゃすっぽりと抱きかかえているような形になっている。

…落ち着くなあこれ。

——すう。すう。

どれくらい時間がたったか。

目の前の少女からは寢息が聞こえ始めた。

俺と同じで、昨日寝てないんだろうな。

寝ずに考えて「お兄ちゃんになって」は可笑しかったが、結果としては良い。
毎日でもこうしたい気分だ。

※

「……ん。」

有咲が目を覚ましたのは、すっかり日が落ち、休日の終わりを実感してしまう頃だった。

「よく眠れたかい。」

撫でる手を止めずに聞く。

「うん：おはよう、ヒロにい。」

「ん、おはよ。」

人生でトップクラスの有意義な日曜日となった。

何もしてないけど、贅沢な一日。

俺に、妹ができた日。

どんどんキャラが崩壊していきます…。

4・1..市街 Human defects

俺はなぜこんなところに居るんだ…。

とある日の夕方。

この町に来て知り合った一人の自宅に俺はいた。

一見普通のマンションの一室なのだが、住んでいる人間が問題だ。

丸山彩。

アイドルバンドグループ、Pastel*Palettesのボーカル担当であり

俺とは言うほど接点が見つからない人間のはずなんだが…。

「…で？」

「えっと…だから、その、お願いがありました…。」

「そこまでは聞いたよ。日菜からだけど。」

いつもと同じように検品作業をしていたところ、急に着信が入り

お願いがあるからここにきて、と位置情報を送られたのだ。

いつも急だなと思いつつ断ろうとは試みたのだが、「二大事なの！」と押し切られてしまった。

で、結局来てみれば待ち受けていたのはこのふわふわピンク。

言われるがままに部屋へとお邪魔した次第だ。

「日菜ちゃん、何も言ってなかったんですか？」

「ああ、一大事だからとにかくここに来いってだけ。」

「うう…。」

伝達がうまくいかなかったのだろうか。

悲しげな顔だ。

「…その、肝心のお願いって何だね？」

俺も頑張らなきゃいけない類のやつ…？」

「あ、いえ、その、ヒロさんには居てもらうだけでいいんです！」

ついてきてもらうだけ、というか…。」

「ってことはお出かけ系なんだな…。」

そうか。俺は通行人に扮したカメラマンとしてついていけばいいってことか。」

「初めてのお使いに行くわけじゃないです！」

「なんだよ…。」

あれ、ちょっと憧れなんだよな。

「実は、カラオケ…なんですけど。」

「からおけ…？」

「はい、前に歌の練習見られたじゃないですか。」

その時に私の歌が好きって言ってくれたの覚えてて…。」

…ん？

声が好きとは言った気がするが歌も好きなんて言ったかな？

「それで、今歌のレッスンとかも特に頑張っではいるんですけど自主的にも練習したくて…。」

カラオケなら、その、いっぱい歌えるかなって。」

「…俺、必要なそれ。」

「……いんです。」

「あんだって?」

「…からおけ、いったことないんです。」

「……。」

それはなに、有名人だからアピールなの?世間知らずなの?

「そんな嫌味なこと言わないで下さいよ…。」

純粹に、行く機会がなかったというか…。友達もいないですし…。」

「あ…。」

で、俺にはその初回の付添人になってほしいと?」

「んーまあそんな感じです。いやですか？」

「それこそ、日菜とかじゃダメだったのか？」

「ヒロさんと行きたいんです！」

あ、そうだ、一般の方に聞いてもらって、感想とか聞けたほうが練習になると思うし、

日菜ちゃんが懐いてる方なら安心できそうだし…。」

思いつきで喋っているのか何か裏があるのか…

日菜が絡んでる可能性も怖いし、理由や俺に拘る根拠がふわふわしすぎだ。

あつ。もしかしてそれでふわふわピンク!?

「…聞いてます？というか今失礼なこと考えたでしょう。」

「聞いているよ。俺が気になって気になって仕方ないからカラオケデートしたいんだろ。」

「はい。」

「」

あれ、予想してた反応のと違う。

「えっ？ ちょ」

「それじゃあ時間も勿体ないし、行きましょう！」

話聞いてないのはどっちだよ…。

「何してるんですかー。早く行きましょー！」

ああもう玄関で待機してやがる。

※

こうしてピンクに流されるままに市街地へ。

カラオケボックスに入るころには夕食時ともいえる時間になっていた。

「ここが…カラオケ…。」

喉の動きが見てわかるほど唾を飲み込む彩。

ゴクリ、と清涼飲料水なんかのCMで鳴りそうなSEが聞こえてきそうだ。

「…入るぞ。」

何時間くらいの予定だ？」

「え、あ！先に時間決めるんですか？」

「そりゃそうだろ。待ってる人困るだろうが。」

「あー…そういう感じなんですネ。」

「~~ハジヤイマツキ~~。オヲタキヤデスカ—

？？」

「はい。一般と学生で。」

「~~オダカニム、オキミデ~~ショ—カ

？」

「えーと…彩、どうしたい？」

「へっ、あ、そそそ、そうれすね…。」

5、6時間くらい？でS…すかね？」

落ち着け。

「あ、その段階から知識外だったのか。

てつきりわかつて誘ってんだと思ってたよ…。」

全くイメージできていなかったみたいだな。

後で聞いたんだが、広めの板間のような部屋に何組かが場所を取り
各々周りに聞かせながら歌うような店だと思っていたらしい。

いやそれもうただのレッスン室やん。

そんなガチな連中はカラオケ行かんだろう。

こんな調子で歌まで行けるのだろうか。

不安だが、取り敢えず一通り説明する。

「マイクはわかるとして、この機械なんだけども…。

ほれ、持ってみ。」

「えっえっ、これ、どこ持ったらいいんですかっ。」

「どこでもいいよ持ちやすいところで、置いてもいいし…

って、よりもよって何で画面ガッツリ掴むんだよ。」

「わかんないですよ…。」

「はい、これペン持つ。」

で画面触る。ここで曲探せるから…そう、そこで曲名入れて…。」

「ここ?…あ、これですね…。」

「で、この赤いの押したら…」

「えい」

p i p i p i p i p i p i p i p i :

「え、なんか鳴ってますよ?

うわぁ曲が!」

「ほら、歌詞出てるから。歌って歌って。」

「え！あつ、え!!しゅ、しゅわあ」

「何故最初から歌う！」

遅れたんだから途中から歌わなきゃでしょうが！」

俺の手には負えない…。

元がどれだけ要領の悪い子かはわからんが、これじゃあカラオケの練習だけで終わりがねない。

機械の扱いこそ飲み込みは早いものの、ハウリングで驚いて泣き出したり歌の最中で囁んだ結果恥ずかしくなって演奏中止したり。

本当に、俺来ないほうがよかったんじゃ…？と何度も思った。

「はあ…。」

あまりにも居た堪れなくなったため、ドリンクバーに逃げてきたが…。
どうしたもんかなあ。

結局聞いたところで歌が上手いかどうか、技量やら技術に関しては尚更だが全くわからん。

楽器なら多少はわかるが歌となると難しい。

せめてよくカラオケに行くような人間若しくは普段から歌を歌う人間が居れば少しは練習にも活かせるのではないだろうか。

現状機械についてしか意見言えてないし。

「頭痛くなってきたぞ…。」

「あれ!? 大樹さん??」

いつの間にかコップを満たし終えたことに気づかず長い事考えに耽っていたのだろう。

後ろには数名の待機列ができかけており、その先頭は見知った水色だった。

「あ、す、すみません。ご迷惑おかけしました…。」

花音ちゃんも来てたのか。」

ほかのお客さんに謝罪はきちんとしなければいけない。

マナーである。

「はいー。大樹さんもカラオケとか来るんですねー。あはっ…意外かも。」

「意外性で言ったら君の方が意外だよ。」

「そう、かもしれないですね…。」

それはそうと、さっきすごく考え事してましたよね??

何かあったんですか?」

言うべきか言うまいか。

「まあ色々だね。」

花音ちゃんは今日は誰と来てるの?」

「…どうして誰かと来てる前提で訊くんですか?」

「迷子になってないからかな。」

「…………。」

「で、誰かと来てるんでしょ？」

「確かに人と、きてますけど。」

紹介しませんよ??」

「…別にしてもらわなくてもいいけどさ。」

「…私じゃない人にばかり興味持つんだから…」

「なんか言った？」

「いいえー。」

それより、大樹さんは？多分ですけど、一人で来てはいないですよね？」

「あぁうん、知り合いとね…。」

「ふーん。市ヶ谷さんじゃない女の子と来たって感じですね。」

怖。

この子超能力とか持ってるんじゃないの。

「超能力なんかなくても雰囲気でわかりますよーだ。」

「」

「いつも大樹さんのこと見てるんですから、それくらいわかります。」

「そんな長い付き合いじゃな…え、ストーカー？」

「ふええ!? ち、ちがいますよう。今のは忘れてください! なしです、なし!」
途中物凄くガチ目な顔をしていたと思うが無しだというので流すことにした。
恐らく深層心理に刻み込まれるタイプのトラウマってやつだ。

この子、会うたびにそういう闇が滲み出ている気がする。

隠しきれなくなったのか隠さなくなったのか。

何にせよ底知れない恐ろしさを感じてしまう子だ。

そのくせ外見は天使のようなのがもう…。

「それで、誰と」

「ヒロさんー。機械、壊しちゃったかもしれないんで見てくださいー。」

色々な意味で恐ろしい今日の同行者が半泣きで寄ってくる。

設備を…壊したのか…？

「彩…ちゃん？」

「あれー？花音ちゃん？？」

珍しいね！カラオケなんてー！」

「え…じゃあ大樹さんが一緒に来てるのって…。」

「花音ちゃんも知り合いなの!？」

ヒロさんって女の子ばかり知り合いが多いんですねえ。」

「ふふ…ふふふ…。」

「花音…ちゃん、さん…？」

「あ！よかったら花音ちゃんもこっちの部屋で歌う??

あでもそっかきつとお友達と来てるよね…。」

やめてやめて。

絶対今弄り出したらずいやつだから…。

「——ねえ、大樹さん？」

ゾクリ、と。

背中を蛇が這うような。

ただ名前を呼ばただけなのに、絶対このあと碌な事にならないと本能？直感？よくわからんが、俺の中の大事な部分が叫んでいた。

※

足が痺れ始めている。

もうこの混沌とした状況に置かれてどれだけ経ったろう。

俺と彩で入っていた部屋、カラオケボックスの一室だが

今この部屋には3人入っている。

気分が乗ってきたのか、フリフリと踊りながら歌っている彩。

テーブルを退かし作られたスペースで床に正座する俺。

小上がりの部屋だったため下がカーペットなのがまだ救いだ。

その前に仁王立ちし、冷たい目で見降ろしてくる花音ちゃん。

彩の歌練習はそっちのけで絶賛説教中なのであった。

理由は、「俺が女性に対してだらしなさすぎる」ということ。

全く自覚もない事なんだが花音ちゃんが怒っているならそれなりに思うところがあるのだろう。

「だいたい、大樹さんは女の子ばかり手を出しすぎなんですよ。」

「出してないよ。」

「出してるのと一緒です！」

市ヶ谷さんと一緒に住んでいながら、会う子会う子に連絡先を訊いて回るじゃな

いですか。

どうしたいんですか？」

「いやそれは誤解だよ。」

殆ど俺が訊かれる側だもん。」

「えっ」

ホント俺のことなんだと思ってんのこの子。

「それで、教えちゃってるんですか？」

「拒む理由もないしね。それに、みんながみんな交換してるとかじゃないし…

あ、そういうえは最初に交換したのは花音ちゃんだったね。」

「ふえ!? わ、私が…はじめて…。」

何が言いたいのかは正直分からない。

ただ、俺に対して女好きとか節操無しとかそういった類の印象を持っているのだからと推測できる。

もしかして不機嫌なんじゃなくて風紀的な意味で怒ってるだけなんじゃ？

≪風紀≫という単語に例の氷川姉が過ぎるがまあ置いといて。

「ま、まあ別にいいんですけど。最近どんどん増えていくじゃないですか。

そんなにチャット相手が欲しいなら私が相手しますからあ。…ね？」

「…そういうわけでもないんだけど。何と説明したもんかな…。」

答えに困り彩を見ると物凄い勢いでジュースを流し込んでいた。

そら一人で延々歌ってりゃ疲れもするよね。喉哽らすんじゃないぞ。

「もう！またよそ見して！」

今度は彩ちゃんを狙ってるんですか…？」

「そうじゃあないけどね。一応歌練習に付き合うって名目でついてきてたからあんまり放つとくのも可哀そうかなって。」

「それは…そうですね…。」

「花音ちゃんも誰かと来てるんでしょう？」

あんまり放つとくのも悪くない??」

「いいんです！弟ですから。」

あ、弟居るんだ。

お姉ちゃんだったのか…。妹っぽい感じしてたけどな。

「戻ってあげなよ…。せっかく一緒に来てるんだから。」

「そんなこといって、彩ちゃんを落としたいだけなんでしょう。」

「えっ。そ、そうなんですか…。？ヒロさん…。」

「いやないわ。」

「えっ。…えー。」

「大丈夫だから戻んって。」

あ、そうだ。じゃあ今度！今度二人でカラオケ来ようぜ。な？」

「ふええ!?わ、私とですか??」

「嫌ならやめるけど、…要は二人で遊びたいってことなんじゃないの？

別に彩とも遊んでるわけじゃないし、花音ちゃんの誤解も解かなきゃいけないし…。」

「え、えっと…それって、デートしてくれるってことですか…??」
??

態々言い換える必要があるか？

拘りなのかもしれないし、デートと言えなくもないしそれでいいか。

「んー……。まあそんなとこかな。」

「ふ、ふええ…！ふえ、ホントですか？本当ですか??」

いつにします??」

「お、おう。追々決めて行こうぜそこは…。

あ、取り敢えずほら弟君待ってるから！戻ったほうがいい！うん、そうだ！」
もうココロ態度変わるの怖すぎるし絶対おっかない子だものこの子。

一刻も早く離れて戴かなくては。

彩も困惑した顔で見てるし。付いてきたのに放置とか本気で申し訳ないし。

「わ、わかりました!!」

また連絡しますからね！ふええええ…」

独特な鳴き声が遠ざかっていくのを確認し、最初からこう言っとけば良かったん

じゃないかと

若干反省した。

次からはこれで対処したらいいや。

「えっと…」

彩が遠慮がちに口を開く。

「私とは、遊んでくれてたわけじゃ無かったですもんね…？」

「すいません、何か…一人で勝手に張り切って楽しんじゃってました…。えへへ…。」

「…そういう意味じゃなかったんだがな。」

一応歌の練習というところで真剣に手伝いたかった、と伝えたいのだが
果たして今伝えるべきかどうか。

目の前で年下の少女が落ち込んでいるのだ。それも目に見えて。

まずはフォローなのか？それとも思ってることをどんどん並べ立てていくべきなのか？

色々案やら考えが頭の中をぐるぐる回るが、この類の経験は俺の人生ではほぼ皆無。

初見では無理にも程があるというもの。

などと、また一人の世界に浸って考えを巡らせてしまったせいで続けて出た言葉もしょーもない言い訳のようなものだった。

「ほら、花音…ちゃんがいると、さ？

彩と二人で過ごす時間減っちゃうじゃん??だからその、遠ざけるために出た出任せていうか詭弁っていうかさ…」

「ほ、ほんとですか…？」

最悪。

これじゃ本当に花音ちゃんの言ってた通りじゃないか。

女に手を出しまくる危ない奴、というかチャライ糞軟派野郎だ。

「あー…なんか自己嫌悪。」

※

そんな筈ではなかったのだが、今後の生き方について考えさせられる一日となつてしまった。

お陰でその後の燥ぐ彩の声も頭に入ってこず、ただただ生返事を返すのみとなつてしまうし。

その点もまた重ねて申し訳なく、気持ちはどうより、下り坂宜しく落ちていくのだった。

カラオケから出て、彩を自宅まで送り、毎度のことながら連絡先も交換したというのだが

後日メッセージで本人から聞かされるまで記憶にも残っていなかった。

ほぼ意識を向けていなかったというのが正解か。

このままではいけない。

徒らに少女たちを傷つけてしまわないためにも、もう一度自分を省みなくては。

後日ではありますが、分岐としてifルートを各キャラ分書こうと計画中です。

4・2..質屋 進展？

「ヒロにい？どしたの？」

「んー……？ちょっとなあ……。」

「そっかあ……。」

カラオケ事件から数日。

色々課題を見つけてしまったあの日以降。

あまりに人生の中で出会うことのなかった問題な事もあって、向き合わずに過ごしていたツケが回ってきていた。

正直なところ、任された仕事に熱中していれば誰とも関わらずに済む。

たまに来るメッセージに返信するくらいだし、面と向かって話しているわけでもないの

文章を送信前に一旦考える時間もある。

そんな環境に甘んじてか、

起床↓朝食↓香澄と有咲と戯れる↓見送る↓蔵の整理・検品・管理に熱中する
↓有咲帰ってくる↓可愛がる↓夕食やら何やら↓有咲可愛がる↓眠る

と、完全に敷地内だけで完結する毎日をルーティンの様に繰り返していたのだ。
が。

そのルーティンが今日、崩れてしまった。

蔵が片付いてしまったのだ。

大凡片付くこともないと高を括っていたあの煩雑とした蔵だったが
べったりになった有咲が片付けを手伝ってくれるという素敵ハプニングにより
綺麗サッパリ、どんどん収納できるぜ！といった具合に片付いて…。

案内されて当初見たあの㍻工房㍻のような蔵も居心地がよくて好きだったのだが…。

お陰で夕方からずっとこんな感じだ。

有咲の部屋に入り浸り、胡坐をかいた上に有咲を乗せ、後ろから抱き抱えるようにして撫で練り回す。

和室独特の雰囲気とも相まって、これが非常に落ち着くのだ。

程よい重さと柔らかさと良い匂いがささくれだった気持ちを落ち着かせ
新しい世界へと…。

「ねえ、ヒロにいい？髪ぐっちゃぐちゃなんだけど。」

「んー…もう少し…。」

「もう…。別に、いいけど。」

「…あのさあ、有咲。」

「なに？」

「俺ってモテそうかな。」

「…頭でも打ったの？」

「…どう思う？」

「モテそうとは思わないけど…好きな人でもできたの…?」

「それはないけど。」

…ほら、トラブルって防げるなら未然に防ぐべきじゃん?」

下から意味がわからないといった視線を向けられる。

いきなり言われても何のこっちゃだよな。

「…まあ、女の人絡みではトラブルになりそうだね。」

「そう思う?」

「うん。みんなが勘違いしちゃいそうなこと、言ったりやったりするじゃん?

あっ、…私にしたみたいに、急に抱きしめたりとかしてないよね?」

「それは有咲にしかしてないよ。」

「そ。ならいいんだけど。」

抱きしめはしてないが…。

確かに、振り返ってみればナンパ扱いされたりするってことはそう映るってことだよな…。

「俺、どうするべきかな。」

ポロっと。

特に有咲に向けて吐いた言葉ではないのだが、無のトーンと言えるような平坦な声で出てしまった。

「…さあ、わかんないよ。」

よいしょっと。」

急に撫でていた手を退け立ち上がる。

「えっ、…有咲？」

「お風呂入ってくるね。…ずっとくっついてたから汗かいちゃって。」

「お、おう。」

「私にはよくわからないけど、急に変な方向に走ったりしないでね。」

ヒロに、突然変なことしたり言ったりするから、迷ったら私に言ってみて。行き詰まってどうしようもなくなっても…気が済むまでくっついてあげたり、話相手になってあげるくらいはしたいからさ。」

ぱたん、と静かに襖を占めて風呂場の方に歩いていく。

「そっ…かあ…。」

年下、いや、妹に気使わせてちゃだめだよなあ…。

甘えさせてやらなきゃだつてのに…。

「もっとしっかりせんとな。」

問題にも彼女らにも、そして自分の弱点となっている部分にも

立ち向かう時なのかもしれない。

スマホを握り、自室へと向かった。

※

「さて、まずは誤解されてそうな人から見つけていこう。」

現状連絡先を交換した中でそういう風に俺を見ている子を探す。

取り敢えず話すだけでなんとなく伝わってくる花音ちゃんは置いておこう。

香澄、彩、日菜……あれ、ほぼ該当しねえ？

順に整理してみよう。

まず香澄。

すごく良い子だし懐いてくれるなってのは感じる。

でもあれが異性に対しての好きなのかそうでないのか、

それこそ有咲のように、年上のお兄さんの印象として懐いていてだけではないのか。

これはもう少し関わってみる必要があると思われる。

で日菜。

どういう意図かはわからないがやたらと連絡が来たり会いに来たりする。

会いに行こうと思つて場所も知らないところから会いに行けるのもどうかと思うが

何かしら見えざる物に引合されるように頻繁に遭遇する。

本人からは特に感情やら想いといった部分は見られないが、この前の「かわいい」の一件

を考えるにまあそういうことなのだろうか。

これも勘違いだと相当恥ずかしい、というかイタい事になり兼ねないので探る必要がある。

そして彩。

恐らく何も無いと思われる。

あってカラオケ友達？くらいか。

ただ日菜や花音と繋がりががあるため、今後もし繋がりは続きそう。

…と、整理はしてみたものの。

結局何もわかってないんだよな。

当たり前だけど、人の気持ちなんか読めっこない。

結局は直に触れあって、言葉を交わして探らなければいけない。

勿論、もう勘違いさせてしまうような言動は控えたうえで、なるべく傷つけないようにだ。

怖い。

自分で意識していなかった自分の行動に注意して接するという状態。

一体何が正解なのか学ばないまま、答え合わせも正解発表もない試験を受けるようなものだ。

未知とは恐怖なんだな。

ほんの少ししか関わっていない、紗夜さんやこころに対してだって何かを間違えて接しているのかもしれない。

可能性はいくらでもある。

もしかしたら。

そういった勘違いだとか一方的な思いだとか、経験値が足りないからわからないだけなのでは？

そうだ、そうだよ。

今までその経験がないからこそ未知なんだ。ってことは――

――女性経験を積みばいいんじゃないか？

「ヒロにい。…おい、起きないの??」

翌日の朝。

体を揺すられる感覚で意識が浮上する。

「ヒロ…あ、おきた？」

「……おきた。」

「おはよ。」

「……。」

いつかとは逆のこの状況。

そんなに遅くまで寝ちゃったかな。

「…おきないの？もうお昼だよ。」

「君、学校は？」

「んーん。今日は香澄も居ないから休むことにした。」

「ふーん。」

そうか、だから部屋着のままなのか。

完全に寛ぎモードの時は割とそういうだらしない格好だよな。俺も人の事言えな
いけど。

ただなんだ、その、自分の体の発育具合は知っておきなさい。

暖かくなったからと言ってそんなタンクトップ一枚じゃ…

「…胸見てるでしょ。」

「…見られて困るなら襟の閉じたものを着なさい。」

「別にヒロにいしか見ないからいい。」

「あそ。……えい。」

「ちょ！」

布団に引きずり込む。

最初こそ驚いたように声を発したものの、すぐに抵抗せず倒れ込む。

「俺まだ眠いんだけど、有咲はどうする？」

「…起こしに来たって言ったでしょ？」

「ばあちゃんと呼んでたんだよ。仕事の話って。」

「…まじかあ…。」

「寝るの??」

「いや…仕事の話なら行かないとなあ…。」

言葉とは裏腹に体は起きそうにない。

有咲を乗せている感覚が心地よすぎて動きたくない。

「……………起きたくない気分だなあ。」

「…また後で寝たらいーじゃん。」

「……そうするかぁ……」

渋々天国から離れる。

有咲にこの後はどうする予定か聞くと「どうせすることないからヒロにいと一緒にいる」だそうだ。

一緒に居間へと向かう。

「万実さん……？」

あっ、すみません、寝坊しました……」

「いいのよ。よっぽど疲れてたのねえ。」

「はい、いえ、まあ。」

それであの、仕事の話って……」

「ああ、それなただけど。」

実はね、お願いするお仕事がなくなっちゃったでしょ？」

「はい、今は検品と管理だけお手伝いしている状態ですね…。」

「元からお給料をあげたりしているわけではないからあれなんだけど…。」

今後の事について、お話したいと思ったのよ。」

そう。

俺がここ流星堂の居候として置いてもらっていた条件が蔵周りの庶務を手伝うことだったのだから。

それが終わったということは、その条件が解除されたということ。つまり。

ここに居る理由が失くなってしまったことを意味する。

隣の有咲を見る。

顔こそ無表情だったがその右手は音が聞こえそうなほどの力で俺のシャツを握りしめていた。

「あら？…ふふ。どうしたの二人とも、そんな怖い顔して〜。」

万実さんはカラカラと笑う。

「別に、仕事が終わったから出て行ってっていう話じゃないのよ？」

「えっ」「へ？」

予想していた答えとは真逆の言葉に間拔けな声が出た。

恐らく有咲も同じ気持ちだったのだろう。

今、二人とも面白い顔してるところだよ。

「うちからお願いできる仕事がちょっと変わるってだけよ。」

「…お店の方、出てみない??」

「…まじか。」

ついに店員になっちゃったよ。

「もしよかったら、なんだけどねえ。

お店そっの方も手伝って頂けるなら、今度こそお給料もお渡しするわ。

そうねえ…。シフト制にして、たまに手伝ってもらえたらいいかしらねえ。」

なんと、お給金迄発生すると。

遂に職に就けそうな予感…。

「是非！働かせてください！」

断る理由も何一つ見つからないので全力で頭を下げる。

給料に関しては完全に想定外だったが、これで色々自由が増えそうだ。

交流し関係を深め経験を積むという目標にも大いに影響するに違いない。

「それじゃ、明日くらいからお願ひするわね」

万実さんは終始にこにこと柔らかに笑っていた。

アットホームな職場ってこういうのが正しいんだよな、などともいいことを考えつつ

有咲に耳打ちする。

「これから一緒に居られるな。」

急に真っ赤になった有咲は「そういうこと言うから勘違いされるんだよ」と小声で言ったのちに

はにかんだ笑顔を見せてくれた。

うん、かわいい。

これからの行動指針・目標も定まり、新たな仕事も与えられ

ここから俺の生活はどう変わっていくのだろうか。

全く見通しの利かない未来ではあるが、隣にこの少女が居てくれるおかげか何となくどうにかなりそうな気がしていた。

ちよつと仕事^が忙しめなので、投稿ペース落ちるかもです。
有咲の可愛^さだけを頼りに頑張^ってはいます。

5・1..市街 妹増殖中につき

流星堂の店舗運営に携わるようになって早一ヶ月。

店内での対応や万実さんの補佐にも慣れを実感しだした頃。
初めての給料日を迎えた。

「大樹さあん。はい、これ。」

何やらご機嫌そうな万実さん、手には茶封筒。

「え？ あ！ はい、有難く頂戴いたします。」

「うふふ、今回は初めてってことでちよっつとだけ多めに入れておいたから
身の回りで足りない物にでも充ててくださいな。」

「あ…そんな、すいません、ありがとうございます！」

どうせ住み込みなんだし、と手渡しで受け取ることになっていたのだが働いた実績が実感できる気がして個人的に好きだ。

「いえいえ、それじゃあ明日からもよろしくお願いしますね。」

今日は昼までの営業の為午後からはフリーだ。

さて、軍資金も潤ったことだし早速何処かへ行こうか。

「：貰ってすぐ使っちゃうのもなあ。」

使い道について考えてみるが、食費や日用品に困らない居候状態じゃ

身の回りの物が不足することもない。

特に金のかかる趣味があるわけでもないし、こうなると外で使うくらいしかないのだが…。

知り合いは全員学生だし、こういう時に有咲はいないし。

結局何も思いつかなかったのでまた市街へと出向くのだった。

※

「ほほお、これもなかなか…。」

ショーウィンドウに飾ってあるマネキンを見やる。

特に買う気がなくとも懐が温かい状態というのは変に落ち着かない。

普段見ないようなものも目に飛び込んでくるし、柄にもなくプレゼントなんかも考えてしまう。

手を額に翳し、日光を嫌うようなポーズのマネキンには

真っ白なワンピース、麦わら帽子、小さな花をあしらったサンダルがセットされている。

…そろそろ夏だもんな。

正直、流行りだとかトレンド？ だかには全く関心がないのでわからないが有咲に似合いそうだと思って観察していたのだ。

…買わないけどな。

「写真撮っところ。」

スマホのメモリーに残し。

またふらふらと歩いては何気なく眺める。

どれを見ても有咲に似合いそうだとか、欲しがらないだろうなとか有咲のことばかり浮かんでしまう。

女の子の事ばかり考えるような自分ではなかったはずなのだが……いや、女性物ばかり見ているからそうなんだろう、うんきつとそうだ。

頭の中の有咲を振り払うように、全く別ジャンルの場所に向かった。

以前探索の際に行かなかったゲームセンター。

無駄遣いする気は更々無いが、ちらっと覗いておくくらいは良いだろう。

さすがのゲームセンターとあっても、平日の昼過ぎはさほど混んではない。
そこそこの広さがある上に、筐体のラインナップもよさそうだ。

ブリクラやクレイゲーム、胡散臭い占いのゲームもあるのでデートなんかにもいいだろう。

相手居ねえけど。

「……おっ。」

俗にいう音ゲー、リズムゲームの筐体の前で、一人の女の子がプレイ中だったのだが。

何ともシュールで目に留まってしまった。

外ハネ気味の桃色の髪を腿の辺りまで伸ばし、猫耳のようなヘッドホンを装着したその子は

軽く横揺れでノリつつ目で追えない速さで手を動かしている。

身長は俺の顎くらい……あれ？

足元を見るとプラスチック製の……踏み台。

サイケデリックな色合いで視覚をこれでもかと言わんばかりに刺激してやまない

それは

可愛らしい犬のキャラクターデザイン入りだ。

洗脳でもされそうな不気味な背景に突然ファンシーな色使いの犬。

ミスマッチなことこの上ない。

そもそも踏み台込みでこの身長。

「…子供か。にしては粹なプレイをしやがる。」

やがて。

ズズズズズと腹に響くような低音と共に、画面には

≡congrat

ulation!≡の文字。

パーフェクトをやってのけたらしい。

吊り上がった口角のまま振り返った少女と目が合う。

「すっげえな！なかなか熱い捌きだったぜ!!」

少女が満足そうな顔をしていたのもあってつい声をかけてしまう。

「…何？ずっと見てたってワケ？」

瞬間。

スツと真顔になった少女から、何とも生意気そうな声が出る。

「知ってるわ。貴方みたいなのを、HENTAIっていうんでしょ？」

「初対面でいきなりHENTAIは無いだろ…。」

ふつーに、随分と慣れた様子でかましてたからな。つい見ちゃってたっていうか。」

「ふーん？まあ、私のBrilliantなプレイに惹かれるなんて、結構イイ目持ってるんじゃない。」

恰好つけてるだけなのか、ハーフか何かか。

言葉の端々に表われる独特なイントネーションと横文字交じりの話方にふと思う。

しかし…

「近くで見るとさらに小さいな…。お嬢さん、小学生か中学生くらいか？」

「なっ…！Ladyに向かって失礼じゃない？」

これでもInternational schoolの10th gradeよ。貴方達生粋の日本人にわかりやすく言うなら…高校1年ってところかしら？」

ふーん。

何言っただかわかんねえや。

わかんねえけど、癪に障ったのか早口で捲し立てる様子はとても微笑ましく可愛らしい。

最後の急に視線を見降ろしに変えた瞬間なんか、ついニヤけてしまったよ。

「…ちょっと、何ニヤニヤしてんの？」

馬鹿にしてる？」

「んーん。してないよ。」

高1か…。そりゃあ確かにレディーとして扱わないと失礼だな。」

「…そうよ。わかればいいのよ。」

「で、そこなレディーのお名前は？」

「私は…チュチュよ。覚えておきなさい。」

「チュチュ？」

…ニックネームかペンネームか。

まあ、なんでもいいか。

「貴方は？人に名前を訊くことは、自分も名乗るのがMannerよね？」

「俺は大樹。常盤大樹ってんだ。」

「ヒロキ、ね…。まあ覚えといてあげるわ。」

覚えておいてくれるらしい。

「なあ、チュチュたん。」

「…なによ。」

「今日、学校は？」

制服着てるけど、ゲーセンなんかに来てていいのか？」

「い、いいのよ別に。私はその、セイセキユウシュウ？だから。」

「お、マジか。」

うちの妹もそうなんだよー。一緒だなぁ。」

「…妹が、いるの？」

「ああ。まあ、血の繋がりはないし、妹みたいなやつって感じかな…。」

「ふーん…お兄ちゃん、なんだ。」

そう呟くと目の前の少女は急にもじもじと、崩れていたシャツの襟などを直し始める。

わかるわかる、音ゲーって熱中すると服乱れているのに気づかなかつたりするよな。

「?…チュチュたんは、兄弟とかいないの?」

「…いないわ、一人っ子よ。」

だからその…その妹みたいなやつてのが少し羨ましいわ…。

あつ、えつと、少しよ!? ちょっとだけだから!」

「へえ…。まあ、弟や妹と違って親にねだる訳にもいかないもんなあ…。」

ねだるって言い方もどうかとは思うが。

俺も上の兄弟姉妹は居ないので、少し気持ちはわかる。

甘えてみたい感じというか、可愛がられてみたいといった願望。

小さな頃は少なからず抱いていたもんだ。

「その…妹みたいな子の話、聞かせなさいよ…」

「ええ?別にいいけど、面白い話じゃないぜ?」

近くの休憩コーナーで自動販売機のアイスを買って、取り敢えず座れるからいいん

じゃね感が伝わってくる年季の入った金属製のベンチに腰掛ける。

有咲について、日頃の様子や日常のやり取りなんかをざっと話す。

何が楽しいんだかわからないが、ニコニコして聞いているところを見るにそれでいいんだろう。

「やっぱりアイスと言えばCookie creamよね！」

アイスが旨いだけだったらしい。

それでも、話すのを止めると催促が飛んでくるので続ける。

——そろそろネタ切れ感が出てきたころ。

「なるほどね。……いいじゃない、あなた。」

「はあ？」

「私のお兄ちゃんになりなさい！」

「」

急にギャグでもぶっ込んで来たのかと思ったが、その目は真剣だ。

恐らく音ゲー中にノーツを追う目もこんな感じだろう。

「…いいか？他人は、兄妹には、なれないぞ？」

「それ、Boomerangだから。」

うっ。

「いやいや、だとしてもほら、いくら何でも君と俺じゃマズいだらほら年齢的にとか…」

「アリスはマズくないの？同じ高1よ？」

うゝっ。

「有咲はほら……家に居候させてもらうっていう前提があったから、どうせ一緒に居るんだしいいかな的な」

「じゃあ私もイソウロウ？するわ。それでいいでしょ？」

「ダメダメ！ってか、居候の俺が許可出せるわけないだろう…」

「なら、お兄ちゃんになってくれる位いいじゃない。妹として接するだけでいいんだから。」

おい。

何故こんなちっちゃい子に論破されそうになってんだ。

…でも言い返す点が見当たらないんだよね…。

「…まあ、いいか。因みに、チュチュのメリットってなんだ？」

あ、いや、俺自身嫌とかではないんだけど、目的がわからないっていうか…。

「Merit?…そんなの、貴方と一緒にいられて事以外に何かあるの?…お兄ちゃん?」

うっ。

「……わーったよ。」

「ふふっ。決まりね。……さて、と。」

頭を抱える俺を尻目に立ち上がるチュチュ。
す、と手を差し出し。

「帰るわよ？ お兄ちゃん？」

人を傷つけないようにと決めた拳句これだ。

望んでもいない妹？がまた増えてしまったし、宛もなく彷徨くもんじゃないな…。

今回、好きな子を出したいが為に少し話の流れをおかしくした気がします。
可愛いんですね。

5・2..市街 妹 VS.

手を繋いで街を歩く。

この方向は……はあ。知り合いに会わなきゃいいけど……。

「…ヒロ、にい？」

…これだよ。

振り返ると、香澄と有咲…と見たことのない女の子がこちらに歩いてくるところだった。

学校帰り、か。

「お、おう…。今帰りか？」

「うん…。」

戸惑いつつ視線は俺の顔よりもずっと下、左手のあたりへ向いている。

チュチュが握っている手へ。

「その…。」

「あの、大樹さん？

そちらは誰ですか??」

モゴモゴと言葉を探している有咲より先に、香澄から純粋な質問が飛んでくる。

「ああ、この子は」

「初めまして、ね。私はチュチュ。

お兄ちゃん…ヒロキの妹よ!」

うわちゃー。

思わず空いている右手で顔を覆う。

「へー!? 大樹さん、妹がいたんですか!!」

「いや、あの」

「うちにも可愛い妹がいるんですよ。」

「しっかりした子でー」

「だめだ、この子聞いちゃいない。」

「うひゃー! ちっちゃあい! 可愛い!!」

「私、戸山香澄っていいですよ! よろしくね! チュチュちゃん!!」

「カスミね、覚えてたわ。」

「わあ! 手もちっちゃい!!」

「まあ、あつちで盛り上がってるなら放つところか。」

「それよりもフォローすべきは…」

「有咲。」

「…妹、いたの？」

髪の色とか、全然似てないけど。」

「えーっと…色々あってだな…。」

有咲みたいな、その、妹的な関係？ ってのになって…」

「…はあ？ 本気で言ってるの？」

「は、はは、だよな、やっぱ変だよな。」

「…帰ったらゆっくり説明すんよ。」

「ふーん…？」

い、いかん。

久々に怒ってらっしゃる。

それも全く隠そうとせず、察しろ察しろとばかりにオーラを放ってくる。

皮膚がピリつく錯覚すら覚えるほどだ。

「と、ところで、そちらのお嬢さんは？」

有咲の友達かい??」

「…チッ」

有咲…

「は、はい！」

えとえと、私、牛込りみつていいます…。」

「牛込…また随分と嚴つい苗字だな。」

俺は、大樹っていうんだ。有咲の…兄貴みたいなもんだと思ってくれりゃいいや。」

「あ、はい…。その、有咲ちゃんから、何となく聞いてますから…。
すごく、べったりだって…。」

有咲あ…！

あんまり家でのこと言わないほうがいいぞ。

俺、相当恥ずかしいことしてるからね。

有咲の方を見るが、すげえ冷たい目で睨みつけられただけで言葉一つ発してくれなかった。

「有咲…」

「……………」

「あーりさー！なんでそんな怖い顔してるのー？

…あ、気づいたんだけど、有咲って大樹さんと喋る時だけ態度違うよね！言葉遣いとか！」

「え？」

君、普段どんな態度で喋ってんの。

「うるせえ！そんなに違わねーだろー!!

香澄もりみも、ヒロに…大樹さんも、一緒だ一緒！」

!?

そんなやさぐれちゃってまあ…。

外だとそういうキャラなのか、俺に対しての態度が猫をかぶった状態なのか…。

「でも、有咲ちゃん。さっきヒロに…いって呼んでたよね？

普段はそういう呼び方なの??」

「ち、ちげーし！聞き間違いだろ!?

ほら、もういいだろ！早く、早く帰ろ！」

「あのねりみりん、有咲はね、大樹さんのこと大好きなんだよ。」

「あゝあ!?!何言ってるんだかs」

「だって、迎えに行った時とか大体大樹さんの部屋にいるし

大樹さんに会った時とかもすごく…えっと、でれでれ?してる。」

「あ……う……。」

すっかり顔を赤くした有咲が震えながらゆっくりこっちを向く。

「……………」

「……………」

暫し無言で見つめ合う。

「か、香澄ちゃんっ。それ、多分あんまり言っちゃいけないやつ…。」

「えー？だってほんとなんだよー。」

あ、りみりんも今度有咲の家行く??有咲の部屋着、すごいの！あとおばあちゃんのご飯も美味しくて…。」

ウチの良さを熱弁しているようだが、俺と有咲の耳にはあまり入っていなかった。

「ヒロ、に、い…。さささ、さっきの…全部、その…。」

「あ、いや、うん、香澄が言ってるだけだもんな!?別に実際にそういうの、うん、

まあなんだ、えっと」

「そ、そうだよ！あんまり、きき、きにしないで」

「ねえ、さっきから何なの？

見てられないんだけど。」

「…ち、チュチュ？」

「アリス。貴女ね、別に好きだってこと隠す必要ないじゃない？

…兄妹、なんでしょう？好きで当たり前じゃない？」

「ッ！……。」

「チュチュ……。」

「私は好きよ？お兄ちゃん、面白いしね。

…そうよ、とっても面白いもの。」

なんだろう。言葉の表面とは裏腹に何か別の意味があるのか、含みのある言い方を
をする。

表情こそ変わっていないし、付き合いが短すぎて何を考えているか全く読み取れ

ないが

この子は何か普通の子供ではない所まで思考が到達している気がする。

恐らく有咲を深く関わらせるのは、まずい。

確実に面倒なことになる。

「…悪い。取り乱した。

香澄、りみ、帰ろう。」

先程とは打って変わって落ち着いたトーンで言うや否や歩き出す有咲。

その項垂れたような、寂しさを感じさせる背中を二人が追って駆け出す。

「待ってよ！有咲あー。

大樹さんおいていくの??ねえってばー。」

「あ！まって香澄ちゃん。有咲ちゃんもー。

…あ、す、すいません、失礼しますっ。」

駆け出す直前に振り返り挨拶をしていくみちゃん。
礼儀正しい子だ。

「ヒロキ？ いいの？ 貴方の妹、帰っちゃったわよ？」

「…お前、何か狙ってんのか？」

「狙う？ さあね、私はお兄ちゃんが欲しいだけ。ただそれだけよ？」

「……まあそういうことにしといてやる。」

「ええ。それじゃあお兄ちゃん？ 私の家まで E s c o r t して頂けるかしら？」

「…家、どこだよ。」

その後、明らかに場違いとも思える高級マンションの建ち並ぶ一帯まで連れてこられた俺だが、無事何事もなくチュチュを送り届けた。

その辺に住んでいるだけでも引くレベルなのだが、着いたマンションが一つ丸々自宅だというのだから驚きだ。

絶対部屋余ってるだろ。

帰り際も「またね」と、不吉な言葉を残されたが、極力アレには関わりたくない。なんというか、第六感が告げるのだ。形容できない不気味さがあるぞと。

すっかり暗くなってしまった道を引き返し流星堂へと向かう。

有咲とも話さなきゃいけないし、のんびりしている場合じゃないな。

※

玄関前に辿り着く。

普段であれば夕食も終えている頃だろうか。

気が重い…。

そつと戸をスライドさせ、隙間から中を覗く。

…よし、玄関には誰もいないな。

サツと音を立てないよう靴を脱ぎ、素早く自室へのルートを辿る。

一先ず誰にも会わなかった事に安心しつつ、自室の障子を開ける——と。

「あ！」

バン！

香澄の姿が見えた気がして勢いよく戸を閉じてしまった。

ごめんつい反射で…。

中からは「え!? ひどいい!!」と香澄の反応が聞こえてくる。
どうやら幻覚の類では無いらしい。

「…香澄…ひとり？」

今度は静かに開ける。

「もー！びっくりしましたよー…

…ひとりですけど、勝手に入っちゃって怒ってますか??」

「いや、こっちも驚いたただけだよ。

ごめんね？」

ぺたんと畳に女の子座りしている香澄の頭をぐりぐりと撫でてやる。
えへへ、と可愛らしい笑みが漏れる。かわいい。

「別にいいですよ。」

それで…用事があって待ってたんですけど…有咲には会いました？」

「用事？…帰ってきてからここまで、会わなかったけども。」

「あれえ??」

「ところで、結構遅い時間だけど帰らなくて平気かい？」

「はい！今日お泊り会なんです!!」

「……お泊り会？」

「あ、ちゃんとおばあちゃんに許可も貰いましたし、ウチもOK出たので！」

待て待て。

すると何か？今晚は同じ屋根の下に美少女が二人も居るってのか？

……楽しい夜になりそうね。

「そっか。まあ、楽しんでいくといい。

……ところで用事って？」

「えっとー……それは、有咲から言ったほうがいいのかなあ。」

「有咲から？」

「はい……ちょっと大事なこと？　だと思うので。」

なんだろう。嫌いになったとか出て行けってことかな。

でもその内容なら香澄には言わないか。

……香澄も関係している？　有咲と香澄の関係性の話か……？

あっ。……二人は付き合っ

「ヒロにいい。」

「は、はい！」

急に後ろから声かけんなよ……。

「？　そんなに驚くことないでしょ……。」

「いや、まあ、ははは…。」

今日、お泊り会するんだって？」

「あー…。香澄から聞いたの？」

「ん。」

「なんか、急遽ね。そういう流れになった。

…嫌だった？」

「いやじゃないよ？友達いっぱい楽しんでそうじゃなか。」

「うん…。」

心なしか元気が無いように見える。

いつもはもう少し齒切れの良い返事をする子なのだが。

「……………」

「…有咲？」

何かを言いだそうとしかけてやめる。

あつ、と口を開いてはまた結ぶを繰り返している。

「香澄、これはどういう」

「ヒロにい、晩御飯食べた？」

「えっ？…ああ、まあ食べてないけど、そんなに腹減ってな」

「お風呂は？お風呂入ってきたら??」

「…？うん、じゃあ入ってこようかな…？」

何だろう、なかなか喋りださないと思ったら今度は急に捲し立てだしたぞ。
すげえ風呂勧められてるし、俺そんな臭うかな…。
袖の辺りを嗅ぎつつ風呂へと向かうことにする。

ガラ、と脱衣所の扉を開ける。——と。

「…？」

「は？」

そっと閉じる。

俺が極度に疲労していいのであれば、見間違えや幻覚でないのなら、見知らぬ美女がそこにいた。

気のせいだろうか。いやあんなにリアルな気のせいがあるか。

と悶々していると扉の向こうからは「入ってまあす」と気の抜けた声が聞こえる。

……誰？

次辺りから少しずつバンド要素が入ってきそうです。

音楽に関わるまで長かった…。

5・3.. 質屋 天使と魔物

沢山のお気に入りに・評価ありがとうございます！

まだまだ続きそうなので、よろしくお願いします！

待て待て。一旦落ち着いて整理しよう。

さつき有咲に促されて風呂に入るために脱衣所^コに来た。

で、有咲と香澄があつちの部屋にいたのだからこの家に居る残りの人間は俺と万実さん。

この時間帯だと万実さんは大体台所で何かやっているはずだから、誰にも会うはずがない…。

その前提条件の元、脱衣所の扉を開けた、筈だったのだが。

中には女性が、それもかなりのの、ㄹ美ㄹの文字を飾るに相応しい容姿の女性が居た

んだ。

慌てて閉めたが為にチラ、としか見えなかったが多分そうだった。

因みに、脱衣所という場所を考えればおかしい所は無いのだが、その女性は生まれたままの姿

つまり裸だった。

これから入浴なのか終えたところなのか…。

色々疑問点を含めた上で取り敢えず

「えっと…どちらさん？」

扉越しに問いかける。

「あ、はいつてまあす。」

「知ってる。で、あなたは…お客さん？」

「お客さん？いらっしやいませ」

妙に噛み合っていない会話と共に、扉が開いた。

「!?…ッ！」

咄嗟に目を覆い、色々と露わになった目の前の肢体を見ないようにする。

「??はっ…！今の私…そんなに眩しい？」

「うん!? いや！そうじゃなくて！服着て！服！」

「…？着てるよ？」

「…なんだ着てんのか。」

ゆっくり目を開く。

…：何というか、うん、確かに服を着ろとは言ったし着てるっちゃ着てるね。

でもその、胸の辺りとか見るに…

「服しか着てないな？」

「??? でも、服着てるよ？」

「…これからお風呂？」

「これから？もうお風呂はそこにあるけど…？」

「えーっと…これから入る所かい？」

「一緒に入ります？」

「お断りします。」

話していると頭痛がしてくる。

全く通じていないって訳じゃないんだけど、会話が成り立っていない気がするの
は俺だけか？

何にせよ、これから風呂に入るっていうんだから俺は邪魔だよな。

部屋に帰ろう。

「邪魔したね。

どうぞ、ごゆっくり。」

「いえいえ、お客さんもごゆっくり。」

お客さんは君だ！…と言うとまた話が長引きそうだったので適当に流して帰る。
何なんだあの子。

結局手持無沙汰になっちまったし、もっかい有咲のところ行ってみよ。

ついでに俺臭うかも訊こう。

部屋の前まで来たが…。

何だろう、声が多い気がする。

聞き耳を立ててみると…。

「あーりさー。」

「な、なんだよ。」

「ありさってやっぱり…おっきいねえ。」

「ば、馬鹿！着替えぐらいさっさとしろよ！

そんな余計なとこばっか見るなって！」

「もー香澄燥ぎ過ぎじゃない??…まあ、こういうお泊り会とかってテンション上がっちゃうのはわかるけどさ…」

「えー？だってえー。」

あ!!あれ!?さーや着替え早い!!パジャマ可愛い!!」

「香澄も早く着替えしちゃったら?…あと、有咲にブラ返してあげな?」

「ほんとだよ!早く返せ馬鹿!!」

…うん、3人いるね。

とても聞き捨てならない会話をしているようだけど、恐らく着替え中だし入るわけにはいかないな。

にしても…。

「さーや…？また新しい友達か…？」

なんだか何処にいても居場所がない日だなあ…。

ただまさかこの部屋に突入するわけにもいかないし、風呂の方も確実にまずい状況になるし…

とうんうん唸っているうちに部屋の中に動きがあったようだ。

「…それで？有咲は結局言えなかったんでしょ？そのお兄さんに。」

「うっ…まあな。」

さっさと言っちゃえばーとか思ってたんだけどさ、いざ目の前になると…なか無

理だったってゆーか。」

「私が代わりに言う??」

「香澄が言っても仕方ねーだろうが。」

さっきの話か。

やっぱり何かしら伝えたかったのにダメだったって流れがあつてあの対応なのか。
…しかし、この態度の有咲は慣れねえな。絶対普段の方が可愛いのに。

「なあ、沙綾。」

「なに?」

「いっそ言わないってのは…どうかな。」

「……内緒で活動するってこと?」

でも、有咲にとって大切な人なんじゃないの?」

「だって…何か面と向かって話すの、恥ずかしーじゃん…」

揉めてる？揉めてんのか？

…これ、要は俺が話を聞けば済むって話だよな？

「有咲ー？いるか??」

そう思ったら声に出てたよ。

治らんない頭より先に行動しちまう癖。

「えっ!? あっ！ちょ、ちょっとまって！」

「忙しい??」

「えっとっ…その…」

「あーりさー！ファイトだよー！」

「う、うるせえ！えっと…あ、か、香澄が！香澄が今裸だから駄目だ！開けないで！」

「なにっ!?」

がらっ。

……だってもう我慢できなかった。

裸だぜ？あの香澄の、裸だぜ？

「…服着てんじゃん。」

「もー大樹さんえっちいー。」

「お前…まじか…。」

香澄はしっかりとパジャマを着ていた。

星が散りばめられたデザインの可愛らしいワンピースタイプだ。

かわいい。

ただ。

有・咲・が・着・て・い・な・か・っ・た・。

服どころではなく、下着も。

要するに、有咲のお持ちの立派なあれが投げ出されている状態で。その状況で妹もへったくれも無いわけで。

「あ……あ………！」

「わりい！有咲！素敵だ！ごめん！」

訳のわからない中でも伝えたいことは叫んだつもりだ。

慌てて部屋の外に出る。

このパターンも慣れたものだ…。

流石に素肌の状態で見たのは初めてだ。

今まで無防備な姿は見ていたが全部下着はつけていたし、二人きりだったし。やれやれ、また謝ることが増えてしまった…。

「有咲、大丈夫？早くブラ返してあげたらよかった…」

「う……ほんとだよ………」

「さっきのがお兄さん？……ガッツリ見ていったね。」

「大樹さんっていうんだよ！すごい優しいの！」

「優しいとしてもあのガン見は引くわ。」

「引く？引いてるの？」

「えー…だってさ、関係性も正直よくわからないけど、男子と女子だよ？
そんなに年も離れてないし。…それでガン見ってやばくない？」

あ、俺あの沙綾ちゃんって子に最悪な印象与えた気がする。

有咲の友達なら今後関わりもあるかもしれないのに…頭が痛いな。

「やばいのかなあ…でも、有咲ちょっと嬉しそうだよ？」

「へ？」

「ほら、口がニヤニヤしてるもん。」

「はあ？そんなことあるわけ……有咲？」

「ち、ちげえし！ばっかじゃねえの!!」

「ちょ、ちょっと暑くなったから涼んでくるわ!!…お前も早くそれ返せ!」
「あつ。」

がらつ。

今度はちゃんと寝巻きを着た、真っ赤になった有咲が出てきた。

「ッ…! ひ、ヒロにい、行くよっ。」

「お、おう?」

むんずと右腕を掴まれ、そのまま引つ張られるようにして歩き出す。
この方向は居間か。

居間には幸い誰もいなく、真剣に話をするにちょうど良さそうだ。

「有咲? なんだってこんなところに急に?」

「ヒロにい。聞いて欲しいことがあるの。」

「ん。」

「えと…ここ、座って。」

「お？おう。」

これはどうもご丁寧に。

座布団を出してくれるのかMy Sweet Sister。

正座は苦手だが、折角だから座らせてもらおう。

座布団に座り、膝をぽんぽんと二度叩く。

いつものように有咲が上に座り俺に体重を預け――

「ちがう！私はこっちに座るの！」

ああ、それで座布団ずっと持ってたのか。

「すまん、いつもの癖でつい。」

「もう…後でして！」

「おう。…それで、聞いて欲しいことって？」

「うん……。すーっ、はああああ……。」

こんな深呼吸するだけで可愛い子って他にいないよな。

…あれ、俺着実にシスコンの道歩んでね？

「ん。ん。えとね。」

「ん。」

どきどきする。

とんでもないこと言われそうで。

「私…私ね。」

「……………ば、」

「…ば？」

「バンドっ…始めるからあー!!」

「……………」。

なんつった？バンド？

「うん……………ん？」

「はあっ、はあっ…！」

「そんなおっきい声出すから…。お水飲むか？ん？」

背中をさすってやる。

普段そんな大声出すようなキャラじゃないのにいきなり無理するから…。

「…ありがと、だいじょぶ、落ちついた。」

「おう。…それで？バンドするって？」

「う、うん！…香澄と、沙綾と、りみと、おたえと、私。

5人でやるって、なったから。」

「おお、楽しそうでいいじゃんか。

そっかバンドかあ…。如何にも青春ってやつやんな？」

知らない名前もあったがそんなことより、あの有咲が。

学校に行くのすら意味がないだの必要がないだの言ってたあの有咲が友達とバンドだと？

…あ、視界ぼやけてきた。

「え、え？…な、なんでヒロに、泣いてんの。」

「…はあああ。おいで、有咲。」

正面から膝でどこそこ寄ってきた有咲を思いつきり抱きしめる。

有咲はあわあわ言っているが、それくらい感激なのだ。

「成長したなあ有咲あ…。

…がんばって、無理はしない程度に頑張って、楽しい思い出作ろうなあ…。」

「う、うん…？ 思い出とかはわかんないけど、頑張るよ？ やったことないことだし…。」

「そうかそうか… いい子だなあ…。」

これでもかってくらいに抱きしめ髪を掻き回す。

今日もいい手触り・香りだ。

やがて涙も止まったので、

「それで…それが大事な話か？」

「…うん。後それに合わせてもう一個。」

「…なんだ？」

「あのね、みんなとバンドやるとね、練習とかあるでしょ？」

だから…ヒロにいいという時間減っちゃうけど、ごめんね…って、いいなかったの…。」

「ほお…なるほど。」

ん俺の妹が世界一かわいい!!

「大丈夫だ。俺のことはいいから、みんなと今しかできないこと、頑張っといで。俺にもできることがあったら手伝うから、遠慮なく言うんだぞ？」

「うん。ありがと…ヒロにい。」

……………だいすき。」

…何て幸せな空間なんだ。

妹には大好きなんて言われちゃうし、その妹は相変わらず最高の抱き心地だし。妹が大いなる一步を踏み出す訳だし、なにかご褒美でも…と
有咲の柔らかさを感じつつ幸せを噛み締めていたのだが。

がらっ。

「ご主人様!!」

突如入ってきたタオル一枚の美女によって、幸せな空間のその最高に満ち足りた沈黙は破られた。

ポピパはみんな可愛いです。

5・4・・外出 水色逃避行

嫌いなキャラクターは一人としていません。

「ご主人様!!」

刹那。

まさに一瞬の出来事で思考が追いつかない。

「!?だ、誰だ!?…あ、やわらか」

「おたえ!」

「……有咲?…私のご主人様と抱き合ってる…はっ!?修羅場…??」

あ、この子。

さっき脱衣所で会った子だ。髪も濡れてるし肌もほんのり上気していることから察するに

———とか感触からしても、恐らくタオルを体に巻いただけの状態と思われる

入浴は済ませたみたいだな。

んでこの子がバンドの話に出てきたゞおたえゞか。

で俺がご主人様と。…ご主人？

「ねえまっておたえさん。俺全然ついて行けてないんだけど、ご主人様って何？誰かと勘違いしてる？」

「そ、そうだぞおたえ！いきなり抱きつくとか…それはお前、どうなんだ…。」

「???」

だって、結婚したら旦那さんのこと主人っていうでしょ？」

ケッコン？ケッコンってあの結婚？

「俺が結婚？…君と？まっさかあ…」

「ヒロにいい!?ヒロにいい！結婚したの？ねえ、結婚したの??」

「落ち着け有咲。」

「……？2人とも楽しそう。」

「君のせいでてんやわんやなんやで。」

説明求む。あと君は服を着てくれ。

そんな俺の視線に込めた気持ちを汲み取ってくれたのか否かはわからないが説明を始めてくれるおたえ氏。

「あのね、ご主人様はね。」

さっき私の体を見て、眩しい程綺麗って言ってくれたの。

…だから、お嫁さんに貰ってもらうしかないなって思ってた。」

突っ込みどころが多すぎるよおたえ氏。

そもそも俺は眩しがったわけじゃないし、綺麗とも言っていない。

そりゃ、肌すげえ綺麗だったけど。

「…!!」

「そんな目で見んなよ。」

有咲が物凄い顔で睨みつけてくる。

いや俺悪くないよねこの状況。

「取り敢えずさ、二人とも一回離れてくれないか？」

…今どういう状態かわかるだろ？」

「おたえが離れたら私も離れる。」

「やだ！責任取ってもらうまで離れない！」

座っている俺の正面には向き合う形で抱きついている有咲。

背中からはタオル一枚のおたえが覆いかぶさるように抱きついている。

乱れに乱れているよな。特に背中がヤバイ。何の責任だよ。

「お前ら…こんなとこ誰かに見られたら…」

と居間の入り口を見やると、氷のような眼でこちらを見降ろしてくるやつがいた。

「…なにやってんの。」

「…誰？」

「はっ！沙綾…！」

「沙綾…。」

背中側から振動が伝わってくる。

この奔放な子が震えているってことか。え、そんな怖い子なのこの沙綾ちゃんは。……俺、詰んでる？

「二人とも、離れよっか？」

「は、はい……」

「わ、わかったよ……」

「おお！めっちゃ素直に離れるじゃん。

助かったぜ沙あ」

「話しかけないで。あとこっち見ないで気持ち悪い。」

んー。

有咲、本当に君のバンドにこの子もいるの？

兄は恐らく嫌われてしまったぞ……

あまりにマジなトーンで罵倒されたが為に、少々傷ついたナイーブな俺だったが

流石に今回の件は弁明させてもらおう。

「違うんだ沙綾ちゃん。」

「名前呼ばないで。」

「……聞けそこのお前。」

「変態の癖に何その態度？」

「……………」

「な、なあ沙綾……」

「ごめんね、有咲。……私この人無理かも。」

「有咲。……本当にコイツとバンドやんのか？」

「うん……ドラム担当なの。」

「やめとけ。話も聞かん奴はだめだ。」

「うええ？だって、決めるのは香澄だし……」

「そうやって有咲に圧かけるのやめたら？」

私の事が気に入らないのはあなたの勝手、我儘でしょ？」

「圧かけてんじゃねえよ、お前が人の話に聞く気持たねえからだろ。」

「はぁ？ 私が悪いって訳？」

はいはいすいませんでした。それでも変態行為を働く危ない輩が居たら話も何もないと思うんですが？」

何だこの子。

「…そうかよ。」

じゃ、後は女同士仲良くやってくれ。変態は消えるよ。」

「えっ…ヒロにいい…。」

「ご主人様…。」

「……………さっ、みんな有咲の部屋にいいこ？」

胸糞悪い。

他で会ったことでもあったか？ あいつ。

何でここまで言われなきゃならねえんだ。クソッ。

心の中で悪態をつきつつ、この後は一体どうしようかと冷静な自分も居て。

ひとまず、あの連中がお泊り会をするなら一晩は外で過ごさなくてはならない。いや義務とかじゃないけどね。居心地悪いし、有咲あたりが気を遣うのも忍びねえ。

外でも適当にぶらつくか、知り合いでもあたってみるか…。

※

「ここで…いいんだよな…？」

あの後直ぐに家を出て20分くらいか。

数少ない知り合いの中から何故あの子をチョイスしたのかは自分でも謎だが、あの少女と待ち合わせのために近くの公園に来ていた。

あのピンクのアイドルに出会った場所でもあるここは、もうすっかり暗いという

のに遊ぶ子供の姿が見て取れる。

カラスが鳴いたら帰ると習わなかったのかね…などと考えていると、

「大樹！こんなところで会うなんて奇遇ね！！

大樹も遊びに来たのかしら？」

子供のうち一人が駆け寄ってきたかと思えば馴れ馴れしく話しかけてきたではないか。

…あ。

「なんだ、こころか。

てつきり小学生とか、それくらいの子供の集まりだと思って見てたぞ。」

「もー！あたしもう高校生なのよ??

それに、あたしが遊んでいた皆だって、小学生なんかじゃないわ!!」

「……へ？」

こころの指差す先を見てみる。

オレンジ髪の活発そうなちびっ子と少しお姉さんっぽい黒髪の子。

…どうみても楽しそうに遊ぶ子供と保護者のお姉ちゃん（ワンちゃんお母さん）にしか見えない。

「あの二人？」

「ええ！同級生なの!!」

「…あのオレンジの子も？」

「そうよ。はぐみも美咲も、あたしのお友達よ。」

本当はミッシェルも誘ったのだけれど、今日は忙しかったみたい。」

「ミッシェル…？」

うむ。

どうしてこう俺の周りには頭痛誘発剤みたいな子が度々現れるんだろう。知らん

名前がポンポン出てくるよ…。

神様は俺を殺そうとしてるのか、はたまた鎮痛剤を売りつけるための製薬会社のキャンペーンか。

軽い目眩を覚え、眉間を揉みほぐしていると後ろから救いの声がかかる。

「あ、大樹さん！…ま、待たせちゃいました??」

「…おう、花音ちゃん。

久しぶりだな。」

「お久しぶり、です…。どうしたんですか？急に会いたくなっただって…?」

「実はだな」

「花音！花音も来たのね。…あら？でも今日の集まりには来られないって言ってなかったかしら??」

「うん、ちょっとね…これから大樹さんと用事があるから、それで集まれないってことだったの…。」

まだ関係が切れていなかったのか。

あの時、無理やり路上ライブさせられて以来、まだ絡まれてるとかかな？
※集まり※とか言ってたし、また無茶言われてるんじゃない？。

「場所移す？」

「ふえ？…はい、静かなところ、行きましようか。」

「あ、いや、別に静かじゃなくていいんだけどさ。」

「ここじゃ流石に賑やかすぎるでしょ？」

流石にあの元気な金髪の前で迂闊なことは言えないし。

聞かれてまずいわけではないが、今のこのメンタルで相手したくないだけだ。

「それじゃあ、行きましようか？」

「あ、ああ。」

「あれ？花音さん。…彼氏ですか？」

くそう！折角この場を離れられそうな流れだったのに、いつの間にか近づいていた保護者のお姉さんが話しかけてきた。

しかも花音ちゃんと知り合いなのか。何この集団。

「あ、美咲ちゃん。

…ふふっ、そうだよ、彼氏さんなの。」

「へえ。花音さんも、隅に置けませんね。

あ、じゃあこころは私に任せて、行ってください。上手くやりますんで。」

「うん、ありがとう。」

彼氏と言い切った時にはどうなることかと思っただが、この水色髪ふわふわ少女は彼の集団の操り方を心得ているらしかった。

少し心強く見えた瞬間だったのだが、感心している間にも腕を組まれてしまった。なるほど、徹底してんな。

保護者のお姉さん——美咲ちゃんといったか——に手を振りその場を後にする。個人的には、こちらの騒ぎに目もくれず一心不乱に砂場を掘り続けているあのオレンジ髪が恐怖だったのはまた別のおはなし。

※

その後腕を離してくれない花音ちゃんとともに商店街へ。

一先ず話をするならと、花音ちゃんの案内でカフェに入ることになった。

「羽沢珈琲店……？」

「はい、よく来るお店なんですよ。」

…カップルで入るなら、ファミレスよりもいいかと思ひまして…」

「ん、なるほどね。」

カランコロン…と軽快な音と共に扉が開き、空調の効いた店内に入る。

入店した時の香りが切り替わる瞬間って結構好きなんだよな。

案内されるまま、窓際の席に向かい合わせて

「何故隣に座るんだ花音ちゃん。」

「ふええ？だって、カップルですよ？隣にいた方がいちゃいちゃできるじゃないですかあ。」

「しないよ？」

「ふえ？」

何を勘違いしているのか知らないが、そんなつもりは毛頭ない。

ふえふえ言っている花音ちゃんはそのままに、俺が向かい側の席へ移動する。

不満そうにこちらを睨んでくるが、顔は可愛らしいのでこれもアリかもしれない。

オーダーを伺いに来た女性の店員さんにアイスコーヒーを二つ注文し、改めて先程の体験について話し始める。

何があったのか、どういう気分なのか、をざっと話せたつもりだ。

途中何度も隣に座っていいかと訊いてきた花音ちゃんだが、基本的には話を聞いてくれていたはずだ。

「なるほど…。

やっぱり大樹さん、モテモテです。」

「や、そういう話じゃないんだけどさ…。」

「最後に出てきた…沙綾ちゃん？でしたっけ。」

「うん。」

「ぐっじょぶです。」

「は？」

「だって大樹さん、女の子なら見境なく手を出すところあるから…
そうやって怒ってくれて、私はすごくうれしいです。」

あ、人選ミスったかも。

後半やけににこにこしてると思ったらそっち派か君も。

「あのなあ…。

花音ちゃん、…いや、花音ならちゃんと話を聞いてくれると思ったから連絡したんだよ？」

「ふえ!？」

「さっきの話の中で俺が誰かに手を出したかね？」

「呼び捨てで……大樹さんに呼び捨て……。」

そんなに呼び捨てが響いたかね。

大した意味があったわけじゃなく、元から敬称をつけるのがあんまり好きじゃないだけなんだけど。

「聞ってる？」

「ふええ…す、すみません…。

で、でも、そのおたえさんって人の裸、見ちゃったんですよね??」

「見たよ。不可抗力だけど。」

「それで、ご主人様責任っていうワード…。

…何となく、分かった気がします。」

「ほう？」

「多分、裸を見られたからにはお嫁に貰ってもらうしか…ってやつです。」

そんなやつは知らんが。

「え、何その無茶苦茶な理論。そんな奴いる？」

「私はちよつとわかります。」

「怖」

「ふえ!? 怖くないですよ！ちよつとわかるっただけです！ちよつと！」

「…ふーん？…女の子ってみんなそんな感じなの？」

有咲はそういうこと言わないんだけど…。」

「有咲ちゃんの裸…見たんですか？」

「……そこは今どうでもいいだろう。」

しっかり脳内に焼き付いてるよ。

でもほら、妹だし。

「そうですか。」

……何にせよ、もう一度ちゃんと話したほうがいいかもしれませんね。」

「俺は話したいけどさ？ 弁解もしなくちゃだし。」

……でも、問題はあの沙綾って子だ。」

「そうですね……。大樹さんが女の子にだらしなさすぎるとはいえ、

そこまで嫌なこと言いますかね……？」

「ほかに何かあるとでも？」

「そこはまあ……聞いてみないと、ですけど。」

その可能性については、先程から頭の片隅にはある。

冷静になって見えてきた可能性ではあるんだが。

※男※という存在に偏見かトラウマかでも抱えてんのかなあ…なんてさ。

「うん。さんきゅー花音。

ちよつとばかり冷静になれたお陰で考えも纏まりそうだわ。」

「ふえっ？私、何の力にもなれてない気がしますけど…。」

「そんなことないよ。

俺が落ち着くまで一緒に居てくれたじゃんかよ。何だかんだで話も聞いてくれるしさ。

…ありがとな。」

「えっあっそんな…。私は…好きでやってることですから…。」

「そうかい。

…隣、座るか？」

「……いいんですか？」

「お礼に、な。…今日はカップルとして来てるんだろ？」

「ふええ…。し、失礼します…。」

先程のような勢いはなく、おどおどした様子で隣の席に座る。

ふわっと甘い香りが近づき、鼻腔を擦ると同時に、不安そうな上目遣いが視界に入る。

「えと……私…。」

「ん。」

「…やっぱり、何でもないです。」

「そうか？言いたいことは我慢せず言っちゃったほうがいいぞ。」

「…じゃあ、腕。」

「腕？」

「組んでいいですか。」

「さっきも組んでたじゃん。別にいいけど。」

「さっきはその…フリだったので。」

「…ああ、今度は、素直に組みたいと。」

こくり、と恥ずかしそうに頷く花音。この可愛さよ。断れる筈がなからう。

…まあ、沙綾とかいう敵に立ち向かう前に、こういう安らぎに身を委ねるのもいいだろう。

そつと回された腕は、やっぱり女の子なんだと再確認させるには充分な程華奢で弱さを感じるものだったが、彼女の横顔は幸せに満ちていた。

——win·winってことで、まあいいか。

5-5..松原宅 告白

皆様、お久しぶりです。

たまに見てみると増えている評価やお気に入り登録、誠にありがとうございます。とても嬉しく、次の創作意欲に繋がっております。

まだ暫く終わりそうにないので、どうぞ宜しくお願い致します。

「今日は、ありがとう。」

喫茶店を出て、花音を送る。

結局動くに動けず閉店時間まで居座ってしまった。

他にも常連っぽい客が居たのが幸いか。

「い、いえいえ！私こそ、腕組ませてもらった上に奢ってもらっちゃって…
なんかすみません…。」

「いいんだ、俺が好きでやってることだから、さ。」

「ふええ…でも…。」

「また、デートしてくれるかな？花音。」

「は、はい。私なんかで…よければ…。」

「ん。じゃあ、また気が向いたら連絡するよ。」

「もう…毎日くれたっていいんですよ？」

「あ…有咲の相手しなきゃいけないしな…

暇だったら連絡するさ。」

「はあ…そーゆーとこですよ…。」

「ん？」

「なんでもないです。」

花音の家までは前も歩いているので迷わず行ける。

この暗さだと、花音本人は迷って帰れなさそうな予感もあり送ることにしたのだが。

「…これ、帰るまで続くの？」

「おうちに帰るまでがデートなんですよ？」

「そういうもんかなあ…。」

依然腕は組まれたままだった。

腕を組むことに対しては何とも思わないのだが、その、強く組み過ぎているのか当たるのだ。

決してデカいわけじゃないが小さくもない、といった…いや、言うまい。

「当ててるんですよ？」

「もっと自分を大事にしなさい女の子。」

「相手が大樹さんだからいーんですよー。」

「さいですか…。」

自分に彼女が出来たら、こんな感じなんだろうか。

過去に一人として出来た試しがないので全く以てわからんけど。
隣で今にも鼻歌でも歌いだしそうなほどご機嫌な少女を見る。

「…？なんですか？」

「花音ってさ、彼氏とか居たことあんの…？」

「えっと…過去には、まあ…。」

モテそうだな。んな。

「そっかそっか。そこに関しては俺より先輩なわけだ。」

「ふえ？…じゃ、じゃあ今大樹さんって」

「お、そろそろつくぞ。」

「……………あ、はい…。」

角を曲がり、以前ドラムを運んだあの家の前につく。

が、ついても腕を解こうとしない花音は、ずっと俯いたままだ。何か考え中だろうか。

「…花音？」

「……………今日、泊まっていきませんか？」

「はあ？　なんで？」

「ッ……………！」

き、今日、うちに誰も居ないんです。寂しくって。」

「いや…せめて同性の子に頼もうよ…。」

流石にそれはまずいだろ…倫理的？　に。

誰も居ないご実家に泊まるってことは…つまり、あれだ。何も起きないはずないわけで…ってやつ。

いやいや、男の俺がそんなこと考えてちや、そういう気満々のやつみたいじゃないか。

ここは、断固として断らねば。

「大樹さんが…いいんです…。」

きゅっ。

腕に組みつく手に力が入る。

あ、俺だめかも。墮とされるかも。

「だ、だめだって！ほら、そういうのはフリじゃなくてちゃんとカップルになった人と…」

「私じゃだめですか。」

「へ？」

「カップル…私じゃ…：…だめ、ですか。」

え？え？ちょちょ、ちょっと待って俺泣かせるようなことした？

見間違えても何でもなく、花音の目には確かに光る滴が…そしてこの上目遣い。さながら即死コンボである。女の子に対して免疫がない俺なら尚更。

「…カップル、かあ…。」

取り敢えず、中にはお邪魔しようかな。泊まってくかどうかはこの後話すとして。ずっと家の前で立ち話つてのもあれでしょ？」

「は、はい！あつ、こ、こちらどうぞ！」

招かれるままに玄関へ。

ドラムを運んだときはこのドア前までだったから、ここからは初めましてになるな。

意を決して、魔窟へと踏み入れる。

——その姿をじっと観察している視線に気付かないまま。

※

無言のままお邪魔した彼女の部屋は如何にも女の子の部屋といったような様相で、有咲の部屋とも違いまた新鮮なものだった。

まあ、あっちは和室ということもありあまりふわっとさせること自体が難しい状態ではあるのだが。

うん、置いてあるぬいぐるみとか、きちんと整理整頓された落ち着きのある感じとか、人柄が表れている気がする。

全体の色調もパステルカラーで統一されており、目にも優しい。

…あ、このぬいぐるみ。

「花音？このクマ、何かのキャラクター？」

メッセージくれるときもスタンプでよく使ってるよな。」

「ふえっ？あ、はい。」

ミッシェルって言うんですよ。この町の商店街のマスコットキャラクターなんです。」

「：町のマスコットがこんな商品化されてんの？すげえ推すじゃん。」

「あはは：。こころちゃんのお家が権利を買い取ったとかで、今全国区で広めようとしているらしいんです。」

どんな家だ。

金持ちか。

「ふーん：。そりゃまたデカイ話だ：おっ」

部屋の隅にある、丸くぼんやり光る物体が目に残まる。

「すっげえ……クラゲだ。」

「あ？ 見つけちゃいました？

それ、水流のこととかちゃんと勉強してポリプから育ててるんです。

家でも育てられるなんてびっくりですよ？ 私も最初はびっくりでした。あ、そのポリプなんですけど、冷蔵庫にもいっぱい入ってますし、準備は万端！ っ感じです。

それにそれに、6色に色が変わる水槽なんか買ってみたりしちゃいまして、そういう備品周りとかも凄く面白いです。

見てるだけでも癒されますし、ぷにぷにしておともかわいいんです。

あ、でもでも、餌とかもやっぱり多少お金はかかったっちゃうのでそこはバイトとかで賄ってるんですけど。」

「花音、クラゲ好きなの？」

「好きです!!」

「…ミッシェルとクラゲならどっちが」

「クラゲです。」

「……俺とクラゲなら」

「クラゲです！あっ」

帰るか。

「じゃあね。そろそろ帰らないと。」

「ふえっ、ふえっ、ちがうんです、ちがうんです。」

「…クラゲが好きなんでしょ？」

「大樹さんが大好きなんですっ。あっ…」

「おっ…。」

こうもストレートに言葉にされるとなんだろ…照れる。

有咲には言われなれてるせいかな、「幸せだなあ」って思う以外は特にないしね。照れる、なんてリアクションの時期はとうに過ぎ去った。

「…そ、それで、さっきの話なんだけど。」

「は、はい。」

「どうしていきなりカップルとか言い出したわけ？」

「ここから逃げるためのフリじゃなかったの？」

「そ、それは…あの時は確かにそういう名目で、≪彼氏さん≫って言っちゃいましたけど…」

でも、でもっ、大樹さんが大好きで、お付き合いたいのには…ずっと前から、本当で…」

「そっかあ…。」

「嫌、でしょうか…。」

嫌ではない。

これだけ可愛い子だぞ？告白されるなんて、一緒に一度あるかないかって程のビッグイベントだろう。

だが、それだけ素晴らしい状況だけに、何か裏がありそうで。今までモテなさ

過ぎて卑屈になってしまっているのかもしれないが、あまりに甘い話過ぎる。

「ちょっと…考えさせてもらってもいいかな。」

「ッ……………」

「うおっ!？」

飛びつくように抱きついてくる。

胸元に顔を埋められ…泣いてる？

「お願いしますっ…………私、私…ほんとに大樹さんとずっと一緒に居たいと思っ
ますっ…!」

「……………」

花音、君が本気で俺の事を好きって言うてくれてるのは伝わったよ。

…凄く嬉しいし、そこなら感じられるだろうけどすげえドキドキしてる。

だからこそ、な？軽い気持ちで「付き合おう！」なんて言えないなって思っ
さ。

しっかり考えて、ちゃんと返事したい。…それじゃ、駄目かな？」

おお、我ながら良い事言えたんじゃないか。

考えさせてもらって初戦がこんな超絶可愛い子ってのがアレだが、まあ贅沢な
体験として糧にさせてもらおう。

何せ今は対女性経験を積むのが大事だからな。

ググッ

「…ん。」

ポケットに入っているスマホが震える。
誰かからメッセージでも入ったかな？

「ふええ…大樹さん……。…」

「ちよ、ちよっとごめんな。連絡来ちゃって……。…」

鼻をぐすぐすやっている花音を一旦引きはがし、メッセージを確認する。

「有咲……。…」

『ヒロにい、今どこ。』

…そっか、流石に心配かけちゃったかな。

『今友達の家にいるよ。どした？』

『かのんって人の家？』

…は？

『なんで知ってんの。』

『じゃあ』

『もう帰ってこなくていいよ。』

???

そんな急に怒ること？人と遊ぶことなんかよくあったやん？流石にこっちに住む気はねえよ？

…??？ 待て待て待て。

訊きたいことが山ほど浮かぶぞ。

「花音すまん、ちょっと電話かけてきていいか？」

「ふええ…すぐ戻ってきてくれますか…？」

「善処する。」

そう言い残し玄関へ。

有咲に嫌われる……？その不安感から震える手で電話をかける。

1コール……2コール……3コール……

呼び出しの音と自分の心臓の音がやけに大きく聞こえる気がする。

……6コール……7コール……出た！

「なに。」

「あ、有咲!?……じゃないな、誰だお前。」

「いきなり随分な挨拶だね。」

有咲なら、電話出たくないってさ。」

嫌な予感がした。

俺のせい、ということもあるのだろうが、恐らくこの電話口の奴が関与しているだろうと俺の直感は主張している。

「…沙綾。何があつた。いや、何を…した？」

「私は何も。何かしたんだとしたら貴方じゃない？
おにーさん。」

なんだこいつ。

挑発するような口ぶりに、普段は決して顔を見せることのない感情が静かに浮上

する。

「……………。お前の過去に何があったんだか知らないがな。」

「んー？」

「態々俺の大事な妹を傷つけるような真似したことだけは許せねえ。」

「だから、傷つけたのは私じゃなくて」

「今から帰る。精々煽り文句の一つでも考えておけよ。」

「はあ？ 帰ってこなくていいって。」

「黙れ。今から帰るつつつてんだ。今度こそ、喧嘩しようぜ。」

通話を終了する。

自分で言うのもアレだが、普段_レ怒り_レの感情が欠如しているんじゃないかと不安になるほど温厚な俺だ。

これだけ敵意を剥き出しにした上、明確に_レ敵_レと定義付けた相手と真っ向から対峙するのは初めてかもしれない。

すぐにでも帰らなければいけない。

伝えるためにも花音の部屋へと向かう。

「花音。」

「大樹…さん??」

「実はな」

「何か、いいお知らせでも…あつたんですか？」

「あ？」

「とても…笑ってるように見えるので…。」

笑ってる？

口元、頬と触れてみる。

俺の表情筋は緊張こそしているものの、確かに口角は上がっている。
あ、これあれだ。キレると笑顔になるタイプ。

「まあ、俺の顔は良いとして。

すまん、やっぱ帰らなきゃいけないや。」

「え……。」

「さっき相談した件でやっぱり揉めそうでな。」

有咲が：妹が泣いてる以上、兄貴としては傍に行ってやらんとならんしさ。」

「：また有咲ちゃん、なんですね。」

私が泣いていても、有咲ちゃんが泣いてるほうが大変ですもんね。」

「あいや、そういうわけじゃn」

「いいんです！……わかってました、から。」

「花音……。」

「行って……ください……。」

「ッ……！ごめん……ちゃんと返事、するから。」

辛そうな声と同時に上げた顔は、迷子の時とはまた違った涙で濡れた、直視できないほど哀しい表情だった。

胸の痛みของあまり目を逸らしてしまったが、けじめはつける。

返事は必ずすると頭に刻み、部屋を出る。

「ごめんな、花音。」

玄関で振り返るも彼女の姿はない。

また一人の女の子を傷つけてしまった俺は、せめてもの言葉だけをその場に残し、早足気味で松原家を後にした。

シリアスは苦手です。

5・6..質屋 衝突、それから

「ただいま。」

機嫌がよくないとしても返ってきたときはただいま。挨拶は大事である。

水色の少女の涙に見送られ駆けてきた俺は数十分ほどで流星堂に辿り着いた。

…できれば揉め事は避けたかったが、可愛い妹の為にやらなきゃいけない事なんだ。

冷静に冷静に、と自分に言い聞かせるように靴を綺麗に揃え有咲の部屋へ向かう。

「あ…大樹さん……。ッ……。！」

途中、不安げにうろうろする香澄とすれ違ったが、何も言わず頭を撫でておくに留めた。

何髪下してんだ。可愛いだよ。

ちよっと和んだ。

「……沙綾。入るからな。」

「どうぞ。」

いざ部屋の中へ。

弾んだ声で返事をされるのも腹立たしいが、ぐっと堪える。

まだだ、まだ怒らんぞ。

「……有咲は？」

部屋を見渡すも、そこにいるのは床に女の子座りのおたえ氏（服は着ている）と
仁王立ちの沙綾のみ。

「帰ってきていきなりそれ？…ほんとに大好きなんだね。」

「悪いかよ。大事な妹だぞ。」

「はっ。気色悪いね。」

「ああ？」

「なに？凶星突かれたら威圧って訳？男ってみんなそうだよねえ。」

「…………。」

「え？黙っちゃうんだ。何も言えなくなっちゃったの??喧嘩しないの??」

なんだこいつ。

なんだこいつなんだこいつ。

足元ではおたえ氏がテニスのラリーでも見るように俺と沙綾の顔に交互に視線をやりあわあわしてる。

悪いなおたえ氏。こいつに会話をする気がない以上こうなるのは仕方ないんだ。

「どうしたの？大事な妹の為に彼女の家から慌てて帰ってきたんじゃないの??」

そうだ。

コイツは何で花音の家に居たことを知っている？

「お前さ、どうして俺が花音の家に居るってわかったんだ？」

「そりゃ、家に入っていくのを見たからだよ。」

「は？」

「急に機嫌損ねて出て行ったでしょ？あの後、有咲と香澄がずっとうるさくてさ。」

喧嘩はするとか、良い人なんだからとか：そんなに言うならもう一度ちゃんと話してみようと思って。」

「：尾けてたのか。」

「嫌な言い方しないでよ。」

公園でぼーっとしてるところに追いついたんだけど、そこに花音さんが来たじゃない？

そのまま見てたら腕まで組んじゃってさ。ああ、やっぱりコイツも男かって思ったよ。」

「そんな時間からずっと…お前、暇人かよ。」

「は？大事な妹が心配して待つてるのに外で彼女とイチャイチャしてる人には言われたくないかな。」

ま、本当に大事だって言うならの話だけでも。」

「…それを、有咲に伝えたのか。」

「そりゃね？」

…『あなたのお兄さん、外で可愛い彼女とラブラブしてたよ？』

腕まで組んで、さっきまでとは違って幸せそうだったな』って伝えてあげたの。

そしたら、急に苦しそうな顔しちゃってさ。…どうすんの？おにい、ッ…!？」

もう冷静じゃいられなかった。相手が女だとか、話に突っ込みどころがありすぎるとかどうでもよかった。

頭で考える前に、感情だけに任せて目の前の女の襟首を掴んでいた。

そいつにしてみても嘸かし恐ろしかったろう。さっきまでの煽るような余裕はなく、ただ引き攣った顔で目を見開いていた。

「いい加減にしろよ。」

自分の物とは思えない低い声が聞こえる。

こんなにも腸が煮え繰り返る思いだというのに、口から出る音は酷く冷たく静かだ。

「俺が変態だとか屑だとかゴミだとか、そんなのはどうだっていい。

ただ、お前が見たのは飽く迄お前のフイルター越しの俺とその行動だ。

現実を知ろうとも見ようともしない癖に、思い込みや決め付けで他人を傷つけるのはいけねえ。

いいか？お前は軽い気持ちで言っていたのかもしれない。

本当に何か根拠……そうだな、過去の経験とか体験から言っているのかもしれない。

だとしても、それが俺や有咲に何の関係がある？

それが有咲を泣かせていい理由になるのか？

俺の大事な妹を傷つけるに足る根拠になるのか？

お前がどういう考えからその煽るような態度を取っているかわからん。

けどな、目に映る男を一緒にして罵倒して、気色悪いものだと思ひ込む前にもっとよく見てみる。

聞いてみる。話してみる。

何なら、俺じゃなくても当事者は他にも居ただろ？

有咲とおたえ、2人の話は聞いてやれたんじゃないのか？

そうしたら、徒にあいつを傷つけることもなかったんじゃないのか？

お前、本当に何がしたいんだよ。

：有咲がバンドやるって聞いて、すげえ嬉しかったんだぞ。

初めて出逢った頃なんか、「必要ないから友達なんて要らない」って言ってたあの子がなあ…って、柄にもなく感動したもんだ。

でもな、それでも、お前みたいな奴が居るバンドなら俺は反対だ。

俺は、有咲の傷つく姿を見たくないだけなんだよ。俺はあいつの……兄貴だからな。」

言っている内容は文法だとか日本語がぐちゃぐちゃだったかもしれない。

それでも言いたいことは言ったはずだ。

全部言い終わった後、気持ちも少し落ち着きを取り戻し、握っていた手からも自然と力が抜けた。

呆然とした様子でへたり込む沙綾の目からは止め処なく涙が溢れている。

「……怖い思いさせてすまん。でも許せなかった。

俺もお前が、……いや、今のお前が大嫌いだ。」

「……………」

返事もできないか。まあ今は仕方ないか。

「おたえ氏。」

「は、はいご主人さ」

「大樹でいい。」

「：ヒロさん。」

「ん、まあいいか。有咲は？」

「ごしゅ：ヒロさんの部屋に居ます。」

「さんきゅ。」

素直な美人を置いて自室へと向かう。

出る寸前にチラと沙綾を見やる。：先程とはまるで違い、縋るような目つきでこちらを見ているのが少し印象に残ったが、今は気にしていられない。

有咲の元へ向かおう。

※

「有咲。」

自室では、おたえ氏の教えてくれた通り苦い顔をした有咲が待っていた。

布団の上で体育座りをし、枕の端を弄っている手を止め、こちらを見上げる。

「…帰ってきたんだね。」

「おう、ただいま。」

「……………」

「……………」

少し気まずい沈黙。

「あんなに大きな声出すんだね、ヒロにい。」

「そんなに大きかったかな…。俺もちょっとカッとなつて、気付かなかったかも…。」

ごめん。」

「ううん、ちょっと新鮮だった。」

「そか。」

いつもより口数少なめの有咲。

さっきまで泣いていたんだ、それも当たり前っちゃ当たり前だけど。

また枕の端をいじいじする作業に戻ったのを見ていると、ちらちらとこちらを伺うように視線を超越す。

有咲がこれをする時は、決まって何か言いたいけど切り出し方に困っている、そんなサインだ。

こういうときは、

「：よいしょっと。後ろから失礼するぞ。」

「うあっ。」

いつものスタイル。

後ろに回り、抱えるように腕を回してやる。

「遠慮すんなよ。妹の言いたいことくらい、何でも聞くぞ？」

「うん……。」

さっき、帰ってこなくていいって言っちゃったから……。」

「ああ、あれはショックだったなあ。」

「ご、ごめん、なさい……。」

「……その。」

「ん？」

「嫌いに……なった？」

「うーん……。有咲は？」

「えっ？」

「なんというか、沙綾から聞いたんだろ？」

「俺が、花音の家に行ったこと。」

さっきあいつから聞いたように、敢えて傷つけるように選ばれた言葉で聞いているんだろう。

今こうやってスキンシップを取る資格さえ、とうに無くなっている可能性すら十分にある。

「あ…うん。

悲しくなって、寂しくなって…。どうしていいかわからなくてちょっと泣いちゃったけど…。

それでも、ヒロにいを嫌いにはなれなかったよ。

花音さんって人の家に行ったって聞いて凄く凄く苦しくなっちゃったけど、それでもヒロにいが好き。」

「…そっか。」

「うん。…ヒロにい、は？」

体を振らせ、こちらに体を向ける。

その姿勢から、必然的に吐息がかかる程の距離に有咲の整った顔が来る。

「有咲を嫌いになるなんてことは、絶対ないから安心しろ。

あ、でもあんまり酷いこと言われると普通に凹むから、そこは勘弁な？」

目をまっすぐ見て、ちゃんと本心を伝えた。

後半恥ずかしくて、ちよつと冗談めいて流しちゃったけど、それでも。大事なことは、声に出さないと伝わらないから。

「ふふっ……酷い事言うかどうかは、ヒロに次第だから、頑張ってね。」

「う…努力はしよう。ただちよつとは甘く見てくれ…。」

「どうしよっかなあ…。」

「くそう、可愛いなあおい。」

「でしょ。…ずっとずーっと、好きでいて。」

「有咲…。」

この距離で有咲の可愛さMAXな部分を見せられ続け、あまりの甘さにクラクラする。

やがて二人は見つめあった目を閉じ、ただでさえ近い距離を更に縮ませ――

コックリ。

その接近は、小さな音によって阻まれた。

この状況からして聞こえるはずのない方向から聞こえたその主は…。

「k、香澄ィ!？」

「わぁあ!？」

ゴッソ。

その存在に気付いた有咲と有咲の声に驚いた香澄がお互いに仰け反る様にして倒れる。

有咲は俺が支えられたが、可哀そうなことに香澄はしこたま頭を床に打ち付けていた。まあ畳だけど。

「うううう」と唸りながら頭を摩りつつ起き上がる香澄。
涙目だ。

「お、おま、おままま」

「落ち着け有咲。」

「なんだってこんなところに……」

「こんなところで…お兄ちゃんの部屋だぞ。」

「ううう、何でっていうか、最初からずつといたよう…。」

「…嘘やろ？」

香澄が言うには、廊下で俺とすれ違った後着いていこうとも考えたらしいのだが、部屋に入った俺と沙綾が早速バチバチ始まってしまったせいでびっくりして逃げてしまったらしい。小動物か何かか。

逃げるといっても家の外は暗く、家の間取りを把握しているわけでもないの俺の部屋に逃げ込み、隅の方で息を潜めてほとぼりが冷めるのを待っていたんだと。そして香澄が逃げ込んだ後すぐに有咲が泣きながら入ってきて、俺の布団に潜り込んでいったが泣き様があまりにガチで出るに出不れなかったと。

そこに俺が入ってきて…あとは先の通りで、香澄はたった一人の観客として見ていたらしい。

「香澄い…お前…」

「ご、ごめん有咲！もっと早く、声かけたらよかったよね…」

「ちげえよ！もうちょっとと我慢してられなかったのかよ!!」

「…がまん？」

「今いいとこだっただろうが！もうちょっとでヒロにいと…ヒロにいと…」

ボンツと音が聞こえてきそうな勢いで一気に赤くなる有咲。状況をようやく自覚したらしい。

あわあわ言いながらもこちらを見上げ、目が合ったかと思えばすぐ逸らされた。かわいい。

「大樹さん、有咲、変になっちゃった？」

「うーん、今は放つとこうか。これはこれで可愛いし。」

「大樹さんも、有咲とちゅーしたかった？」

「きわどい質問だなあ…。俺、まともにキスしてたことないんだよね。」

「わっ！そうなんですか！私もです!!」

お揃いですね。」

えへへと笑う香澄。そんなお揃いは何か嫌だなあ…。

と有咲を見るも未だ百面相中だし、今のうちに香澄にも謝っとかないとな。

「ごめんな、香澄。」

「？あ、やっぱりしたことあったんですか？」

「違う違うキスの話じゃねえ。」

…お泊り会、嫌な雰囲気で邪魔しちゃってさ。」

「あ……。そうでした…。」

「俺が、ガキ過ぎたんだよな。」

そもそも、沙綾に色々言われたとしても笑って流せなかった俺が悪いんだ。ほんとごめん。」

「え、あ、謝らないでください。お泊り会はいつでもできますから！」

「ほんとすまん…。この後は邪魔しないように大人しくしてるから、女の子たちだ

けで存分にお泊ってくれ…。」

邪魔するわけには、というより女の子のお泊り会に男が干渉するのは普通にマズいだろ。

日頃有咲とお泊り会状態なのは今触れないでくれ。そのブーメランは自分でも気づいてる。

その常識がないのか、香澄は「大樹さんも一緒に寝たら楽しいと思うのに…」などと言っている。狼さんに食べられちゃいそうだなこの子は。

「と、いうわけで。」

「?はい。」

「君らは有咲の部屋へ戻りんさい。」

「えー?」

「えーじゃない。香澄、今日はお泊り会で来てるんだろう?」

なら、こんな邪魔虫のところに居ないで、友達と一緒に居なきゃ。」

「た、たしかに…!!」

早速立ち上がり走り出す。おい香澄、有咲忘れてんぞ。

「有咲？ 恥ずかしさ収まったか？」

「……………うん。」

「そかそか。…香澄、いっちゃったぞ？」

「……………うん。」

「どした、疲れちゃったか？」

「ううん。…ヒロにい、さっきの続き…。」

「あー…………。したいのか？」

まだ赤みの残る顔のまま、コクンと頷く。
したいのか。

「でも、妹…とそういうことって、してもいいのかな。」

「…じゃあ妹じゃ無くなっちゃえばいいんじゃないの。」

「それはそれで寂しいんだもんなあ。」

何だかんだでこの関係性、心地いいのだ。

「うー…でも、でも。」

「とりあえず、今日はお泊り会楽しんでおいで？」

…友達がないほうが、しやすいってのも…その、あるし。」

「…確かに、邪魔者は居ないほうがいいね。」

「だろ？ってことで。…いってらっしゃい。」

「…うん。ばいばい、ヒロにいい。」

さっきの件があったからだろうか。恐らく深い意味のないばいばいできえ、少し寂しくなる。

が、恐らく彼女らは彼女らで今日の会を楽しむことだろう。
ヒートアップした体を休めるため。今日は早めに眠ることにした。

有咲とほのぼのイチヤイチヤする話が書きたいっていうのが真のテーマなんです
…。

6・1..質屋 日常

朝。

そうか、もう朝か。

眠ったという感覚はなく、瞬きしたら目の前が朝になった、くらいの感覚を味わっていた。

ぐっすり眠れたと取るべきか、はたまた眠れた気がしないのでまだ眠り続ける必要があるとするべきか…。

振り返ってみると、最近はいつもこんな感じな気がする。

最初に感じたのは確か、あのお泊り会の日の翌朝だったか…。

あの時も、何だか怠さが抜けきっていないような、変な感覚に戸惑った。

まあ色々ありすぎた一日だったし、体もかなり疲弊していたのかもしれない。

とはいえ、それがひと月も長引いているのだから問題だ。別の要因を疑うべきだ

ろう。

「まずは原因を……と。ふああああ……。まだ寝るか……。」

確か今日は休みのはず。もう少し、休眠を取らせてもらおう。
起こしかけた体をもう一度布団に倒し、そこで異変に気が付いた。

「……おい、有咲^妹よ。」

同じ布団に潜り込み、むにやむにやと口を歪ませる妹。

学校は??今何時だ??いや、そもそも何してんの??色々聞きたいことはあるが俺も眠い。

「……まあいいか。」

起きてから聞くとして、取り敢えずもうひと眠り頂く事にした。

「おいで」と眠っている妹に声をかけると、もぞもぞと寄ってくる。

抱き枕にして、再度の眠りへと落ちていくのであった。

※

「で、だ。」

「…うん。」

起きた時にはもう夕暮れ時だった。

だが、二度寝の直前とは明らかに違う点があって、そこについて説教中だ。

「お前さんは、俺を罪人にでもしたいのかい。」

「んーん。」

「そうか。それなら、俺の上から降りなさい。」

「…はい。」

「そして服を着なさい。」

「…えー。」

「えーじゃない。」

流石に驚くだろう。

二度寝から覚めたら、隣で大人しく寝ていたはずの妹が自分の上に下着姿で寝ているんだもの。

何がしたいんだ。

「何がしたいんだ。」

おっと、口からもつい出てしまったぜ。

「なんかね、ぎゅってされて寝ているうちに変な気分になっちゃって…。」

暑くなってきたし、脱いだほうが布団気持ちいいからそうしたの。」

「上に乗った理由は。」

「…寝相？」

「そんなんで片付けるかね。」

寝起きでぼーとしつつも、ごそごと服を着ていく有咲。

まあ、部屋着だしそんなにしっかり着込む必要もないのだが。

「……ねえ、ヒロにい。」

「なんだい。」

「前できなかったちゅー、…今しちゃダメかな。」

「今？…でも、お互い寝起きだし…」

「じゃあおはようのちゅーも兼ねて。」

「なるほど、挨拶のキスなら外国じゃ当たり前だもんな。」

「うん。…しょ？」

ああやめろ。首を傾げるんじゃない。
それは俺から選択肢を奪う行為だぞ。

「…有咲。」

「ん…………。」

静かに、そっと。

決して生々しいものではなく、軽く触れるだけのキス。それでも唇同士、まうすとうまうすってやつだ。

あああ…やってしまった…。ついに、兄妹の一線を越えてしまったのだ俺は…。

「…………えへへ。」

ああだめだ。こんなの好きになっちまう。

「おはよう、だよ？ ヒロにい。」

「う…お、おはよう…。」

俺の人生初を捧げた相手は、世界一可愛い妹だった。

※

夕食の後、自室でぼーっと過ごす。

結局あの後には、何だかまともに有咲の顔も見れないまま、いそいそと食事だけして逃げるように自室に飛び込んでしまった。

まさか、あんなに恥ずかしく思うものだったとは。俺は女子か。

い、いかにいかに。思い出したらまた顔が熱く……………ん？

「あれ、俺スマホどこやったかな。」

いつも右のポケットに入れて持ち歩いているはずのスマホが無いことに気づいた。

道理で右腿が寂しいわけだ。

飯を食っているときは触らないし、その前に居た場所といえば…

「…部屋、いくか。」

そういえば飯の前に有咲の部屋に行ったんだった。確か、バンドの練習のために本格的なキーボードを買うから一緒に見てとかなんとか…。

…うん。恥ずかしいとはいえ連絡手段は必要だ。と、意を決して取りに向かおうと思ったその時だった。

「ヒロにい、電話だよ。」

「お？」

今まきに向かおうとしていた部屋の主から声をかけられる。

いつの間に部屋に入っていたのかね君。

「さんきゅ。…やっぱ有咲の部屋に置きっぱだったか。

…誰からだ？」

「えっと……………ん！」

質問には答えず、保留になったスマホを突き出してくる。

画面にも電話番号しか表示されていないので誰かわからないが…

「…はい、お電話代わりました、常盤ですが。」

「ッ……。もしもし、大樹さん？」

「そうですけど……。どちらさん??」

「……。山吹、です。山吹沙綾。」

「……は？あいつが、俺に電話？」

あの件以来、顔こそ合わせるものの挨拶一つ交わさなかったのに、ひと月も経って何だってんだ。

「……。あ？なんだよ、いきなり電話なんて。」

思わず低い声が出てしまったか。

視界の端の有咲がびくっと体を震わせる。

「その…あの時の一件を、謝りたくて。」

「……そうかよ。別に今更謝ってほしいとは思っちゃいないがな。」

「それでも！…それ、でも…。」

「わかったわかった。謝りたいって気持ちは今聞いたからもういいわ。

じゃ、切るから。」

「ま、待って！」

「……んだよ、うるせーな。いきなりデカイ声出すなよ。」

「それじゃ、私の気が済まない……ので、
会って直接、頭下げたいな……って。」

「……俺は別に会いたくない。以上。」

通話終了と。

初対面であれだもんな。公共の場で大声の喧嘩とかしたくねえし。

そもそも謂れの無い罵倒とかなら洒落になんねえし。

「……ヒロにい。」

「ああ、ごめんな。怖かったか？」

「……んーん。沙綾、何て？」

「別に……直接会って謝りたいんだと。断ったけど。」

「えっ……。」

「謝罪求めてるわけじゃねえし、ほら、ウマが合わない奴なんて居て当然だろ？」

「……どうして。」

「ん？」

「……どうして、聞いてあげないの。」

「聞いたところで謝ってもらう気ないし。」

「今ヒロにいがやってること、あの時の沙綾と同じだよ。言い分聞かないで突き放すような言い方で。」

……あの後、沙綾凄く落ち込んでさ。暫く、元気もなくなっちゃって。

本当に反省したから、本当に、謝りたいんだと思う。」

「……うっせえ。」

分かってるさ。つまるところ、これは俺の、子供のような我儘を通しただけだからな。

あの時、面と向かって怒りをぶつけてみてわかった。あいつはただの偏見や差別であの物言いをした訳じゃないって。

……そういえば花音も言ってたっけ。あんな態度を取らせるだけの、それに起因するだけの何かが、過去にあるんじゃないかって。

分かってんだよ。でも、それを聞いたらどうしていいかわからなくて。聞いてしまったら、あの時の俺の行動さえも間違いのような気がして、怖いんだ。

「ヒロにいい？会ってあげて？」

「……嫌だ。」

「沙綾の言葉、聞いてあげて？ね？」

「無理だよ。」

「……なんでわかってくれないの。」

「ちっ……。お前もあいつの肩持つのか。バンド仲間だもんな。」

「そうかよ、じゃあ精々慰めてやったらいいんじゃないかね？ 仲良しなんだからさ。」

「ああ……やっぱり子供だ俺。」

「……わかった。もう、そんなヒロにいなんか嫌い。」

「え」

「部屋にも入ってこないで。ちゃんと沙綾と和解するまで話しかけないで。」

「……もうちゅーもしないから。」

「ああ、有咲が行ってしまう……。」

「……クソッ、俺の妹に感謝しろよ沙綾。」

別に俺の意思で、会ってやるわけじゃないんだからな。妹に嫌われたくないから、仕方なくだからな。

そう心の中で言い訳しつつ、スマホを手を取った――

※

週末。

万実さんに休みをもらった俺は、市街の、とある店の前に居た。

雑貨屋…のような店だと思うそれは、ごちゃつとしたゴミ捨て場の様な場所であり居心地のいいものでは無かったが目印としてはそこそこいい。汚くて目立つ。

指定された時間までは…はあ、ちよつと早く来過ぎたか。

どう時間をつぶしたのかとキョロキョロしていると、面倒なものを見つけた。それはこちらに気づくと走り寄ってきて…

「ドーン!!」

「ぐっ…。」

止まるということを知らないかのように突っ込んできたのは、もう一人の妹、チュダ。

掛け声からするにわざとだな。

「こんなとこで何してんだチュチュたん。」

「ふふん。特に何もしてないわ。」

「なんだ、ぶらついてるだけか。」

「Play spotに行こうか迷っていたら、お兄ちゃんを見つけたのよ。」

「ふれい…ああ、ゲーセンか。」

俺もそんなに暇じゃないんだ、ほれ、行った行った。」

時間があるといっても前みたいに引っ張りまわされちゃ構わん。

今日ばかりは追い払うことにした。

「ま！失礼ね。Livestockか何かと勘違いしてるんじゃない？！」

Get irritatedよ！」

「何言ってるんだかわかんねえよ。…俺はこれから待ち合わせなの。だから遊んでやれないんだ。」

「待ち合わせ…？お兄ちゃんが??」

「そうだが？」

「…あのカスミって子？変な髪形の。」

「違う。」

「妹さん？」

「いや。」

「またChasing womenってわけ？オサカンね。」

「意味は分からんが悪口だな？それ。」

「…別に、どうこう言う気はないんだけど、一つ、Admonitionよ。」

スツと目を細めて真剣な表情になる妹その2。

「仲良くするのは良い事だわ。平和ってイイコトだもんね。

…でも、上っ面ばかり良い人ぶってると、最後に全員が傷つくことになるわ。これから何をする気なのか知らないけど、程々にしなさい。アナタの中の大事なものを、見失わないようにするのよ。」

「…お前、何を…」

「わかった？ お兄ちゃん。」

「あ…お、おう…」

「じゃ、これからGloriousなPerformanceを見せつけるために、いつものPlay spotへ行ってくるわね。

またね、お兄ちゃん。」

未だに掴み切れない妹だが、さっきまでの真剣な雰囲気はどこへやら、ゲーセンの入っている建物へと走って行ってしまった。

さっきのは忠告……いや警告、か。

何者なんだ……あいつ。

「あ……大樹、さん。」

「あ？」

振り返ると、奴の姿がそこにあった。

俯きがちで、とてもいい表情をしているとは言えない少女の姿。

……そうか、もう待ち合わせの時間になってたか。

「よう、沙綾。」

6・2..市街・山吹家 謝罪？

「よう、沙綾。」

「ええと…お久しぶり、です。」

お互い気まずいのは仕方ないか。今も目を合わせて挨拶はしたが、直ぐに逸らされてしまった。

どちらから何かを切り出すわけでもなく、立ち尽くす。

…暑い。

「なあ、取り敢えずどこか入らないか？

まさか往来で突っ立って話すってことも無いだろ？」

「え？あー…。はい、まあ…。」

齒切れが悪いな。

「…なんだ？何か言いたいことがあるなら言っとけよ？」

「はあ…。今日はその、来てもらってありがとうございます。」

無理言ったようで…。」

「ああ。それは別にいいけど。」

「それで、謝りたいっていう子がもう一人いて…。」

「もう一人？」

どんっ。

「おっ。」

背中に何かがぶつかってくる。…しがみついてきてる？

「ヒロくん!!」

「…なんだお前か…。」

氷川日菜。随分久しぶりな気がするが、このインパクトは間違えようがない。あの姉妹の妹の方だな。

「むーっ、何だとはなんだー！

ヒロくん、今暇なの??」

「沙綾、もう一人ってこれ?…沙綾?」

「……!」

目を見開いて凄い形相だ。それに、心なしか呼吸も荒いような。

「さ、沙綾?…具合悪いなら、本当にどこかに」

「何でお前がここに……お前さえ、お前さえ居なければ……!」

「ふえ？だ、だれ？…ヒロくん!?」

「沙綾、ストップだストップ。沙綾ッ!!」

「はっ…!…え?え?」

どうしたというのだろう。

日菜を見た瞬間から、まるで沙綾が沙綾じゃないみたいになってしまった。何かに移られたかのように、日菜に憎しみと、苦しそうな声をぶつける。

慌てて肩を揺すると我に返ったようだが、混乱っぷりを見るに今の出来事を覚えていない…のか？

「どうしたんだ沙綾。…俺の事はわかるか？」

「はあ…!はあ…!…うん、大樹さん。ありがとう…。」

「ね、ねえ、ヒロくん…?あたし、あたし何かしちゃったの…?」

「わからん。沙綾とは知り合いか？」

未だ荒い呼吸の沙綾を支え、背中をさすりながら日菜に訊くも彼女は首を横に振る。

「沙綾…。落ち着いたらでいい。落ち着いたら話を聞くから、まず力抜け。そんで深呼吸だ。な？」

「…はあっ！…はあっ！……あ、ありが、とう…」

腕に徐々に重さが掛かってくる。

うん、少しずつだが、ちゃんと力を抜けているな。体重を預けられている証拠だ。一先ずここは往来。行き交う人の目もあることだし、場所を移そう。

「日菜、ごめんな？」

今度ちゃんと説明するから、今日は…離れたほうがいいのかもしれない。」

「う、うん…。びっくりしたよ…。」

「すまん。ここは何とかするから。」

「ヒロくん…ヒロくんは大丈夫なの？」

日菜のこういう心配そうな顔も新鮮だな。いつもアホみたいにニコニコしてるし…。

ただ、そんな不安げな表情もまた映えるんだよな。まったく美人ってやつは…。

「そんな顔すんな。お前らより長く生きてる分、こういうことも何とかできるのよ。だから大丈夫。心配すんな。」

近づいている顔の距離話す名目もあり、頭をぐしゃぐしゃと掻き撫でてやる。少しホッとしたような表情になった日菜は「またね。」と、いつもより幾分か落ち着いたトーンで告げ去っていった。

「さて、と。」

…大丈夫か？ 沙綾。」

「うん……。ごめん、あとありがとう……。」

「落ち着いたんならいい。取り敢えずほら、ここ道路だし、どこか入れそうなところ入ろう？」

何なら沙綾の家でも送ってくぞ。」

「うん……ちょっと遠いけど、家の方が落ち着いて話せるかも。」

「そか、じゃあ、家まで行こう。」

教えてもらいながら街を歩く。

まだふら付くということなので肩を貸していたが、慎重さもあるので腕を貸している。

……あの時の夜を思い出すようだ……。いやいや、そのせいで拗れたんだ。余計なことを考えるのはやめよう。

※

「ここが…沙綾の…。」

着いたのは、ㄨ山吹ベーカーリーㄨと看板を掲げるパン屋。
何とも食欲をそそる香りが店の周りにまで漂っている。

「お前んち、パン屋だったのか…。」

「うん…パン、好き？」

「……………まあ、好きだな。」

品揃えも結構よさそうだし、何しろこう言った個人商店のパン屋には入ったことが無い。

通うためにも、できるだけ穏便に仲直りせねば。

勝手に気合を入れつつ戸を開けて店内へ。

「いらっしゃ————沙綾!?!どうしたの!?!」

戸の音を聞いて奥から出てきた女性の店員さんだったが、俺にもたれるように腕を組んでいる沙綾を見て駆けてくる。

「あ：おかあさ」

「何があったの？力入る？お母さんのことわかる？」

そうかこの人が沙綾の…。

「ええと、山吹、さん？」

「えっ？あ、あなたが沙綾を連れてきてくださった…ええと…」

「常盤と申します。沙綾さんの友達の…いえ、沙綾さんの友達です。」

「どうも御親切にして頂いて…とりあえず、沙綾を休ませるので、一緒に部屋まで来てもらえますか？」

お母さんもそりゃ心配だよな。テンパリ過ぎて、娘の部屋に男を招こうとしてゐるぞ。

勿論断ったが。

沙綾の部屋は二階にあるらしく、お母さんが付き添って上がっていった。

暇になった俺は、棒立ちもアレなので店内を見て回ることに。

ほほう、定番商品もきちんと押さえてあるし、オリジナルと思われるパンもある。甘いものから塩辛いもの、斤売りの食パンにバゲット、総菜パンの類も揃ってる。

このパン屋、つええ。

試しに何か買ってみようかとも思ったが……今はさすがに遠慮しておこう。

写真で納めるだけに留めておく。

そのうち、とん、とん、と階段を下りてくる足音が。

「……あ、よかった。待っていてくださったんですか？」

「あ、いえ……その、沙綾さん大丈夫ですか？」

「ええ、今大分落ち着いて……」

もし時間があるなら、上がってやってくれませんか？」

「…俺が、ですか。」

「あの子、何か話したいことがあるみたいで。」

はつきり連れてくるようには言われてないんですけど、行って頂けると、あの子も喜ぶと思います。」

このまま話したい事・謝りたいことを先送りにするのは引かかるってことかな。そこまで言われて行かない訳には行かないので、案内されるがままに部屋へ。入ると、ベッドで体を起こした状態の沙綾が何とも言えない顔で待っていた。お母さんは俺を残し、「ごゆっくり」と出て行ってしまった。ごゆっくりできるか！

「あ…えと…。体調どうだ？」

「うん…。謝りたかっただけなのに…こんなことになっちゃって、ごめんね。」

「それは別にいいけど、ってか終始謝り倒してるじゃねえか。」

「それとは別件。」

「わかってるよ。」

顔色もさつきよりよさそうだし、少しは体も楽になったかな。

そもそも体調を崩したというよりかは、過呼吸だとかそういう発作的な物なのだろうが…。

「沙綾。」

「うん。…どこから、話そうかな。」

「一つずつ、ぐちゃぐちゃになっちゃってもいいから、ゆっくり話そう。」

「じゃあ…まず、この前の事。」

「うん…。」

そして、ぽつりぽつりと話し出した。

「有咲と知り合った時から、大樹さんのことは聞いてて…。

歳の近い優しいお兄さんだって言ってたけど、私、昔色々あってさ。

大樹さんは『男』って一括りにーって言ってたけど、特に年上の男の人が…ちよつとね。」

「ああ。」

「だから、絶対危ないことを考えてる人だって、このままにしておく訳にはいかないうって思っただの。

あのお泊り会を提案したのは香澄だけど、いい機会だと思って付いてきたんだ。」

あれ、香澄が発案なのか。

…何か納得。

「有咲から写真とかは見せてもらってたから顔は知ってたけど、実際に会うまでは気も抜けないしさ。

…そうしたら、」

「ま、まって。写真って、何の写真見たんだ？」

写真なんか撮られた覚えもあげた覚えもないぞ。

「えっと……ツーショットだったんだけど……」

「っしょっと……」

「でも……うん、大樹さんは知らないと思う。」

写真の中の大樹さん……寝てたから。」

「……………は？」

俺が寝てるのにツーショット??

それはまさか、眠っている俺の横に来て自撮りをするっていう……カップルや新婚さんがやりがちなやつ。

「顔、真っ赤だけど？」

「つ、続けてくれ！さっきの話を！さあ！」

「う、うん…ふふっ。」

「あいつめ…。」

「えーっとどこまで…あ、そうだ。」

いざ大樹さんを見てみたら、さ。有咲の裸はガン見するし、ほぼ裸のおたえと抱き合うし。

…正直、「ああ、やっぱり年上の男はみんなこんなもんなんだ」って思っちゃって…。」

「おたえ氏と抱き合った覚えはないけどな。」

「うん…。だから、状況の説明とかおたえの考えとか、全然頭回んなくて…。」

つい、悪口みたいなこと言っちゃったんだ。

始まってみたら…止まらないし。」

口喧嘩ってな。最初の一言に返しちゃうともうどうしようもないらしいな。

止まれずに、行くとこまで行っちゃうってヤツ。

「だから……ごめんなさい。」

「ん……。」

「その後も……ね。本当のことを確認する前に、「大事な友達を悪い大人から引き離してあげなきゃ」ってさ。

妙な正義感……とか使命感？みたいなものが湧いちゃって……有咲には酷いこと言っちゃうし。」

「状況も状況だしな。友達を守りたいってんなら仕方ないさ。その気持ちは間違いないじゃない。」

「……怒らないの？」

「何に對してだ。」

「有咲を……傷つけちゃったこと。」

「……有咲には謝ったか？」

「うん、あの後すぐに。」

「そうか。仲悪くなったり、ギスギスしたりしてないか？」

「多分、大丈夫だと思う。」

「その他で何か関係性が変わったことは？」

「：前より大樹さんの話を聞かされるようになったかな。」

「それは別にいいか：。」

あいつつたらホントにまあ：。

「じゃあいいんじゃない？」

「どうして：」

「んー。前にほら、大きい声出しちゃったとき？俺の言いたいことって大体その時に伝えてるからさ。」

沙綾の気持ちとか考え聞けた以上、何も言うことないよ。寧ろ：」

「：？」

「有咲のこと、考えた上でのあの言動だったわけだろ？」

寧ろ礼を言いたいくらいだよ。俺の妹を「大事な友達」だと思ってくれてありが

とな、沙綾。」

「……なにそれ。ずるいよ。」

無性に恥ずかしいことを口走っている気がして沙綾の顔がまともに見れない。

どんな表情してるのか、何を考えているのか、全くわからない。くそう、そっちの沈黙もずるいよ。

「大樹さんみたいな男の人も居るんだね。」

「…居るよ。居るっつか、俺なんてありふれたタイプの人間だぞ？ 量産型だ量産型。」

「…うん。大樹さんは大樹さんだよ。」

よくわからん。が、疑いは晴れたか。

俺は脱変態を果たした…ってことでいいのかな？

「でも、色んな女の子に手を出すのはよくないと思うよ？

多分自覚ないだろうけど、色んな子を勘違いさせちゃうタイプの人だから。大樹さんは。」

「ははっ…それ、有咲にも言われた。」

「もう、笑い事じゃないんだからね？ 私だって、例外じゃないんだから。」

「えっ」

「ふふっ。気を付けてね？」

勘違いってあれだよな？ 余計な好意を持たせてしまうからっていう…

いや、それより、例外じゃないってのは??…それはつまり、沙綾も俺の事――

「どうしたの?…話聞いてばっかだから疲れちゃった？」

「あ、いや…。そ、そうだ！ 有咲に連絡しないと！」

「連絡?…ああ、結構話し込んだじゃったしね。」

そんなに早く帰るって伝えてあるの？」

「いや、明確に時間は伝えてないけど、それでも連絡はしないと心配かけちゃうだろ。」

「…ホントに好きなんだね。」

「へへっ、まあな。最高の妹だからな。」

最愛の妹へメッセージを手短に送る。

『ありさー』

『まだわかんないけど、もしかしたら遅くなるかもしれん』

『心配しないでいいからな?』

うん、既読は付いていないがまあよからう。

「あの、さ。」

「んー？」

「有咲のことは、妹として見てるんだよね？」

「そりゃまあ…有咲も、兄貴として接してくれてる筈だしな。」

「…そう。」

「??…あ！だ、大丈夫だぞ沙綾。お前の心配しているようなふしだらな行為は断じてないっ。」

「はあ……。」

??

その心配じゃなかったのか。

「あ、そうだ。まだ聞きたいことがあるんだよ。」

「何？」

「日菜…さっきの奴とは、何があったんだ？知り合いなのか？」

「くっ…。」

「さ、沙綾!?無理して話さなくていい!変なこと聞いてすまん!!」

「いや、大丈夫、夫…。」

ええと、知り合いだと思う。多分だけど。」

「多分とは…」

「あいつの、はずなんだけど…何か似ている別人って感じがするんだ。

…そっくりさん、みたいな。」

「そっくりさん…?じゃあ、名前に聞き覚えは?あいつ、日菜って名前なんだけど。」

「ひな…?違う、そんな名前じゃなかった。」

「そっか……。因みにその、日菜に似ている人とは、何が?」

「……聞きたい?」

「まあ…そりゃ気にはなるけども。」

「…嫌いに、ならない？」

何だっつんだ。何の話をしようとしているんだ。

それでも、冗談を言っているようには見えなくて…。

聞いてしまったら、もう後戻りできないような、そんな重大な秘密が含まれているかのような錯覚を覚えた。

それでも俺は――

間が空いてしまいすみません。

なかなかシリアス展開は大変ですね。

筆も気持ちも重いです。

6・3・・山吹家 目を逸らさずに

ゴクリ、と喉を鳴らしたのは果たしてどちらだったのだろうか。
それほどの緊張を纏った沈黙が二人の間を支配していた。

「…教えてくれ。沙綾。」

「そっか……。じゃあ、全部聞いたら…私を貰って？」

「…ん？」

※

「…中学の頃の話なんだけど。」

私、付き合ってる人が居たんだ。…年上の、大学生の人。」

「…や、やるじゃん。」

「茶化さないで真面目に聞いて。」

周りから色々言われてはいたけど、私は幸せでさ。

同級生の男子とは違って、包容力とか大人っぽさとか、凄くカッコよくて。」

それくらいの頃って、女の子の方が精神的にも大人びてるんだよね。

だから同じ年の男どもがお子ちゃまに見える…ってのをどっかで聞いたな。

にしても、大学生と中学生は色々アウトだろ。言わないけど。

「うちも手伝いとかあるし毎日会えたわけじゃなかったんだけど…会えるだけでも嬉しかったんだよね。」

向こうも私の事、ただの子供としてじゃなく一人の女の子として見てくれて。」

「ふーん…。デキたロリコンだな。」

「ふふっ、まあそういう見方もあるよね…。」

「見方どうこの前に、紛れもなくそうなんだが…。」

流石に中坊はマズいつて。

「それで、ゞもうすぐ高校生だからゞなんて話もしてた頃なんだけど、…急にフラれちゃって…。えへへ。」

「それで年上の男が苦手になったと？」

「…うん。まだ、これじゃ終わリじゃないんだ。」

今思えば、フラれた時に素直に諦めればよかったな…って思うんだけどね。」

「うん？」

「当時凄くショックだった私は理由を聞いたわけ。「どうして急にさよならなの？」って…。」

それでもあの人は教えてくれなくてね。「とにかく色々無理になった」としか教えてくれなかったんだ。」

「ふわっふわしてんな。」

理由の薄っぺらさが尋常じゃない。

一息で飛んでいきそうなくらいふわふわしてんぞ。

「はは……。結論から言うと、他に彼女ができたって事だったんだけどさ。

別に、そのままストレートに言ってくれたらいいじゃん？ そうしたら、まだ諦めも付くの……。

……納得できなかった私は、友達とか先輩とかに訊いて回ったの。」

「その時から行動力あったんだな。」

根源は置いとして、まるで俺と花音を尾けて来た時のようだと思った。

そうか、あの無駄な行動力はその頃からか……。

「だって、気になるじゃん。言えない理由があるのかって。

……ある時、一つ上の先輩の一人が言ったんだよ。「その人、確か氷川さんの彼氏だよな？」……ってさ。」

繋がった。

ここで出てくるのか。

「だから今度は、≡氷川さん≡について調べて回った。

といっても、殆どは尾け回して自分なりに調べただけだね。」

「：お前、ほんとに敵に回したくないタイプな。」

「ありがと。」

褒めてはいないんだからな。

真顔で礼言ってるけど。

「それで、何日か尾けてみて、名前とか住んでる場所が分かった頃、彼に会ったんだ。

後ろから声をかけられて、そのまま家に着いて行った。：すごい怒られちゃっ

たんだよね。

「俺の彼女に何しようとしてんだ？」って。…俺の、っていうのが、かなり効いたっけ。」

「直前まで沙綾と付き合ってたんだろ？…中々かましてくれる男だな、そいつ。」

「うん。裏切られたんだって、その時実感したね。それで……………」

「…辛いならここでやめても」

「ううん、全部話すって、決めたから。それが私のもあるし。」

…それで、どうやってその人と出会ったか聞いたの。」

「うん。…キツかったらホントに休めよ。絶対、無理はすんなよ？」

ここからが本題、といった具合に急にキツそうな表情をする。

呼吸もさっきより荒いし、またすぐにでも倒れてしまいそうだ。

もはや見ているだけでは辛く、沙綾の座っているベッドに移動し、隣に腰掛ける。背中を支える様に腕を回し続きを…っておい体温高いな。熱あるんじゃないか。

「…ありがと。役得だね。」

「そこは優しいねって言うところだぞ。」

…なあ本当に続けるのか？今度体調がいい時とかでいいんだぞ。」

「ううん、話させて。…支えてくれるんでしょ？」

「それは別に構わないけど…。」

「うん、ありがとうね。」

それで、その人との出会いなんだけど…。」

「ん。」

「掲示板、なんだって。」

「は…？？」

「その時の私はあまりそういうこと知らなかったんだけど…」

家出した女の子が援助を求める掲示板があるみたいで、そこで出会ったって…

言ってた。」

「出会い系みたいなもん？」

「多分そんな感じ…。知らないけど。」

そこで、書き込まれたのが近所だったからって会いに行っただって。」

おいおいおい、どのみちやばい流れになっちまうんじゃないかこれ？

「そのまま家に連れ込んで、2、3日一緒に過ごして付き合うことになった……って。」

「……………」

俺の中のアンパイアは完全にアウトを掲げているぞ。

そもそもこの話、人にしていい話なのだろうか。……まあ沙綾がやったって訳じゃないからいいのか。

「それってさ……つまり、そういうことがあったって訳じゃん？

いつの事なのかも聞いたんだけど、私と付き合ってる期間にしっかり重なってるんだよね。」

「ああ、浮気ってこと……」

「……まあ、そうなるよね。私も、流石に怒りを堪え切れなくて、そこまで聞いた後に手を出しちゃったんだ。」

「叩いたの？」

「……椅子だね。」

「……や、やるじゃん。」

「うん。それで、さようならって、終わるはずだった。」

私は確かにそのつもりで、彼の家を出た。」

ここまで盛り上がったのにまだ続きがあるのか？

「そこで、バツタリ会っちゃったの。」

「まさか……。」

「そう……氷川さん……にね。」

「すげえタイミングだ。」

「話しながら、彼が呼んだみたい。」

氷川さんと…それから大勢の年上の男達が、私を見てた。」

「その方達は一体？」

「まあ、簡単に言う…私が男を嫌いになる流れにトドメを刺した人達かな。」

その無感情な物言いと、全てを投げ出したような光の無い瞳を見て気づいてしまった。予想がついてしまったんだ。

…沙綾の体験した事に。

「まず氷川さんだけど、予想していなかっただけに足を止めて見つめてしまったのが悪かったんだね。」

いきなり平手打ちされちゃったよ。あはは…。」

「女ってこええ。」

「そうかもね。」「私の大切な人に一体何をしたの」って、胸倉掴みあげられて訊かれた時はもう…展開についていけなくて呆然としちゃってた。

でもあの人、すごーい綺麗で、年上の色気っていうのかな？そういうのも感じちゃって…。

『ああ、この人に彼は墮とされたんだ』って思った。」

「胸倉…。」

「それでも、せめて何かやり返したいと思っちゃって。爪痕残さないと、的な感じ。長くて綺麗だった髪を、全力で引っ張ってやった。千切ってやろうってね。」

「」

「あはは、引いちゃった？結構やるときはやるんだよ。

でも…案の定周りの取り巻きの人たちに抑えられちゃって。」

流石に男の力には敵わない、よな…。人数も多勢に無勢だし。中学生の女の子じゃ何もできないか。

「その後はもうあつという間。流れる様にコトは進んでね。

氷川さんが男の人たちに指示を出してたんだけど、羽交い絞めにされたまま近く

のアパートの部屋に連れ込まれた。」

「それって…」

「それで……うっ……うう……。」

「…もういい。もういいよ沙綾。」

これ以上は聞かなくても想像がつく。寧ろよくここまで泣かずに話してくれたもんだ。

当時中学生の女の子が一人で抱えるには重すぎる事件。心の傷の深さは、俺のような適当に生きてきた人間、ましてや加害者グループと同じ♂男♂である俺には到底計り知れないだろう。

「ごめっ……ごめんね……ちゃんと話す、から……。」

「もういいって。我慢しないで、好きなだけ泣け。」

背中に戻っていた腕に力を込め、泣き顔を伏せられるように胸元に抱き寄せる。

沙綾も抵抗することなくシャツに顔を埋める様に体を預け、静かに泣いた。つい先日まで嫌悪感すら抱いていた少女の涙に対し、自分の考えの浅さに対する情けなさといふこの状況での無力感にただただ寄り添うことしかできなかった。

※

「……えっと、なんかごめんね？」

「落ち着いたかい。」

「う、うん。」

「そか。」

気付けばすっかり夜になり、窓からは涼しい風と虫の声が入ってくる。

泣き疲れたのか落ち着いたのか、顔を上げた沙綾には疲労とも取れる萎れ様が見て取れる。

「…俺こそごめんな。辛い事、思い出させちまって。」

「ううん。説明しないといけないって、私自身が思ったことだから。それより――

――

心配そうな目。何かを畏れているのか、はたまたそれは怯えなのか。

長い睫にはまだ涙の残りを湛え、じっと俺の目を見てくる。

「――嫌いに、なった？」

「ああ、それなんだけど。」

「ん。」

「最初に言ってた、嫌いにならないかとか私を貰ってってのはどういう意味だ？
最後まで聞いても結局わからなんだ。」

「…えーっと…。」

「元彼がいるから嫌われると思ったとか？」

「いや、なんというか…。」

そういう過去があるってことは、一度穢されてるわけでしょ。汚い女って思われて嫌われちゃうかなーと思って。」

……汚い？

「よくわかんねえけど、さ。この前、大声出しちゃったときは凄く嫌いだったよ。でも今…話を聞いて沙綾を知って、凄く好きになった。」

「……。」

「辛い事だろ。思い出したくもない事のはずだ。それを、きちんと向き合って俺に話した。」

「…これだけ強くてしっかりした女の子、嫌いになるわけないだろ。」
「それって…。」

「言葉のチョイスおかしかったらごめんだけど、格好いいぜ沙綾。」

有咲を守るために動いてくれた事もそうだし、今日の前にいて俺と向き合って話してる沙綾もそうだ。

俺は…沙綾のこと、好きだぞ。」

沙綾が驚いたように目を見開く。

あれ、そんなにおかしいこと言ったかな。

「…すごいね。大樹さん、やっぱり量産型なんかじゃないよ。

少なくとも私の知ってる男の人とは違う。」

「そういうもんかね。じぶんじゃよくわかんないけど。」

「うん…有咲がべったりになる訳だ。」

「??…ああ、いい兄貴って感じか。」

「ふふっ、そうかもね。大樹さんみたいなお兄ちゃんが居たらなあ…。」

「はっはっは。流石にもう妹は増やしたくないなあ…。」

正直手一杯です。

妹は有咲だけでいい。

ようやく元氣を取り戻してか、笑みを零すようになった沙綾。

うん。今の沙綾となら仲良くやっていけそうだ。沙綾はどう思ってるか知らんけど…。

「それで…さ。」

「なんだ？」

「私は嬉しいんだけど…このままずっと抱きしめていてくれるの？」

「あっ」

そうだった。長時間姿勢を変えなかったせいで違和感すらなくなってたけど、ずっと沙綾を抱いて喋っていた。

またセクハラだ変態だとなったら大変だもんな。

「ご、ごめん。」

「そんな慌てて離さなくても大丈夫だよ。」

大樹さんに触れられていても、不思議と嫌な気持ちしないし。あ、もしかしたら」

チャッ

「？」

「あごめん、私だ。」

ポケットから取り出したスマホを何やら操作している沙綾。
急ぎの用等であれば俺も早く帰ったほうがいいかな？

「…あー。すっかり忘れてた。」

「用事かい？」

「んーん。今からここにもう一人呼んでもいい？」

「何故。」

「ほら、最初に言ってたでしょ。もうひとり謝りたい人が居るって。」

「：そんなこと言ってたような言ってなかったような：。」

「その子、呼ぶね？」

「ああ、俺は構わないけど：。沙綾の家だし。」

そのままタタッと入力している。

やがてチャットが終わったのか、こちらに向き直り、先程までのように身を寄せてきた。

「お、おい。」

「さっきまではしてくれてたんだからいいでしょ？」

：あの子が来るまで、また抱いててくれないかな。」

「：わかった。」

「ありがと。凄く落ち着くんだ。：あったかくて。」

それが自然であるかのように腕を回し、きつすぎない様に抱きかかえる。

先程とは打って変わって、穏やかな気持ちで頭を撫でた。

「…ふふ、やっぱりお兄さんだね。」

「ああ悪い、つい癖で…。」

嫌だったか。」

「…うん、何だか幸せな気持ちになれるから、続けて？」

「ああ…。」

そのまま手を動かす。

髪が揺れるたびに、シャンプーや整髪料などとはまた違った、沙綾の匂いが舞う。
有咲や香澄でも同じ匂いを感じたが、やっぱりそれぞれ違うんだな。女の子ってす
げえ。

「あの子…。」

「ん？」

「氷川さんにそっくりだった昼間のあの子。…謝りに行かなきゃ。」

「あー……。そいつの事なんだけど。」

「なに？」

「沙綾が覚えてる氷川さんって、下の名前わかるか？」

「ええと…「さえ」だったか「さや」だったか…そんな感じだったと思う。」

ああ…多分そうだ。

「昼間のあいつ、名前は「氷川日菜」っていうんだ。」

「ああ、じゃあやつぱり人違いだったんだね。」

「…まあ、な。」

ただ、日菜には双子の姉貴が居て…さ。」

「双子…。」

「そっちは、「紗夜」っていうんだ…けど。」

沙綾の眉がぴくりと反応をしたのを俺は見逃さなかった。

…思い出したか。

「さよ…うん、そんな感じだった。」

「…沙綾、その…」

「…大丈夫、だよ。」

…大樹さん、ごめんね。もう大丈夫だから。今は、もう…。」

「沙綾…。」

「…でも、会いにいく時、一緒に来てくれると、嬉しいんだけど…。」

「!!…お、おう！…任せてくれ。」

ちゃんと傍で見守ってるから。今度…何も無いとは思うけど、何かあったら何とかしてやる。」

「ふふっ…なにそれ。」

全てを吐露してくれたのかどうかは俺にはわからない。

それでも、その経験を思い返した上で「謝りに行きたい」という沙綾。

うん…放って置けるわけないよな。

「今度、向こうにはアポ取っとくよ。…一応知り合いだし。」

「えっ？あ…うん…本当に、何から何までありがとう。」

最初に出会った男の人が大樹さんみたいな人だったら…もうちょっと素直でいられたのかな。」

「…沙綾、あのさ」

ハッ

!!

「いらっしゃい！あなたのあたえちゃんです！」

：何から突っ込むべきか。

恐らくもう一人の子だが、取り敢えず空気を読むことを覚えよう。あたえ氏。

いつもより少々長めですが、閲覧ありがとうございます。

沙綾じゃなかったら作者も心が折れていたと思います。

一先ず真面目一山超えたので、ゆっくり書き溜めてからまた投げる予定です。

6・4.. 山吹家 一旦弛緩

投稿間隔が空いてしまっているにも関わらず読んでくださっている方、いつもありがとうございます。

評価・感想も大変励みになっております。

このままゆっくりではありますが、完走を目指していきますのでどうぞ生暖かい目で見えてやってください。

「おたえ、いらっしやい。」

「うん。遅くなつてごめんね沙綾。…ご主人様も。」

「まだそれ言ってるの。」

「うん。ご主人様はご主人様だから。」

…私にとって、たった一人の大事な人。」

それが謎なんです。

「それで、おたえ氏は一体何を謝りたいんだ？」

「あ、えっと…。」

「…取り敢えずさ、そんな入り口で立ってないでこっちおいでよ。」

沙綾が俺の膝をぼんぼんと2度叩く。

…は？ここに来いと？

「あ、うん！」

すすすーっと、摺り足十駆け足のような謎の移動方法で近づいたおたえ氏はそれが当然の定位置であるかのように俺の膝の上へ着陸する。

揺れる髪と同時に広がるフローラルな香り。…俺匂いの事ばっか言ってる気がするな。フェチかな。

悪戯っぽく笑みを作り、端正に並んだ白い歯を見せるおたえ氏。
見た目は美人なのに…な。

「…近いな。」

「ご主人様は、近いと嫌？」

「その呼び方はやめなさいって。」

「あ…そうだった。ヒロさん。」

「ん。」

器用に体の向きを変え、向かい合うように座り直すおたえ氏。

いやあのこれ、異性とするにはなかなか覚悟のいる体制だと思うんだが…。

「??…あっ、対面座」

「言わんでいい。」

「ふふっ、仲良しだね。」

笑ってないで助けてくれ沙綾。君がこんなところに誘導するからこうなっとなのよ。

「それで？」

「うん。ヒロさんに謝りたいの。」

…いきなり結婚って言って、ごめんなさい。」

「…ああ、うん。」

「あの場面で喧嘩が起きたのは、答えを急ぎ過ぎちゃった私の責任。だから、ずっとずっと謝りたくて…。」

「えーっと…。」

恐らく論点がずれている。ずれているというか、この子は何か大きな間違いの元

動いているような…

「あのさ、おたえ氏？

君が結婚だ何だって言いだしたのって何かキツカケとかあったん？

まさか、一目惚れってことはないだろう？俺、こんなんだし。」

なんせどこにでもある普通の量産型を自負しているからな。

見た目だって飽く迄平凡。派手でもなければ特別地味でもない。

格好良くもなければ不細工でもない。そう、願っている。

「確かにね。大樹さんって、あまり見た目だけで一目惚れとかされるタイプじゃないよね。

イケメンとかでもないし。」

「う、うむ…。」

まさか沙綾の方からそんなダメージを撒かれるとは思っていなかった。
お前、さっきちょっぴりいい雰囲気だっただろうにどうして…。

「一目惚れ？してないよ？

ただ責任取ってもらおうと思っただけ。」

「…俺が何したってんだよ。」

「裸、見たでしょ？」

「……………ん？どういうこと？おたえ。」

「だから、私、ヒロさんに何も着てないところを見られたんだ。」

「……………大樹さん？」

「何かな沙綾。」

「どういうこと？」

「…さあ。」

「どうしてそんなに壁を凝視してるの。私の目を見て、説明してよ。ね？」

「いやーなんというか…」

「???? ヒロさん、凄い汗。」

暑い? 脱ぐ?」

「脱ぎません。」

ちよいちよい入ってくるのやめてくれ。話が迷子になる。
それよりも、今は背中に犇々と感じるこの殺気を何とかせねば。
先程迄得かけた好感度が音を立てて削れていく気分だ…。

「沙綾さん?」

「ん? なあに?」

「その…殺気、しまってくださいません?」

「あはははは。そんなもの出してないでしょ?

もー、大樹さんは面白いこと言うねえ。」

「は、ははははは…。」

「あはははははは。」

「はははははははは!!」

もうわけわかんねえ。取り敢えずノリで笑っとけ。

「何笑ってんの？早く説明して。」

「アハハ」

怖。

声の低さだけで四肢がもがれるかと思ってしまう程だった。

「そ、そもそも、裸を見ようと思って見に行ったわけではなく、あのですね、
ー、ふ、風呂場に、向かったところですね、

えと、アハハ、エハハ」

「雑音が多いなあ。でも、緊張してるヒロさんも可愛いね。いいこいいこ。」

撫でないで！沙綾の目つきがきつくなるから!!

「ふーん？でれでれしちゃって…。

それだなに？お風呂場で脱衣中のおたえに会って、まじまじと目で楽しんじやったって訳？」

「ち、ちがうってば。ヤバいと思って、すぐに戸を閉めて俺は外に逃げ出したよ。」

「それだけ？」

「う、うん。」

「ふーん……？おたえ、本当？」

頼む。

「うん、ほんとうだよ。

だから責任取ってもらおうと思って。結婚してもらうの。」

「その場合の責任って、猥褻系の罪に該当すると思うけど…。なかなか裸見て結婚ってなくない？ねえ。」

いや、俺に振られてもさ……。わかんないし。

「取り敢えず、どうして責任が結婚になるんだ？」

「だって、書いてあったから。」

「…何に？」

「……………これ。」

見せられたのは青いスマホの画面。おたえ氏のものかな。表示されていたのはどうやらwebページらしいが…。

「これ…って、」

「ああ……。」

隣から覗き込んだ沙綾と目が合う。お互い何となく察したらしい。

「これ、暇なときに読んでるやつとか？」

「うん、練習疲れた時とか。休み時間とか。」

すっごいドキドキするお話。」

「web小説…か。」

「小説？…これ、ブログだからのんぷいくしょん。」

「どういう理由だ。ブログに自作の小説載せる人もいるだろ??」

「えー…。じゃあこれ、作り話？」

「うん。」

どうやら目の前のこの超絶天然美人さんは、誰かのブログ上に公開されているオリジナル小説から様々な知識を得ているようだった。

※裸を見られたからお嫁に貰ってもらわなくてはならない。※これも確かに記述があった。

まあ、該当箇所を見つけた時には沙綾と二人して頭を抱えたが…。

そこから暫くは、おたえ氏のおかしな常識を修正する作業が続く。

勿論、あるとき何があったか、どう思っていたかを沙綾に伝えることも忘れてはいない。

「…そうだったんだ。」

「うん。」

「じゃあ、別に大樹さんのことは何とも思っていないの？…その、本当に好き、とか。」

「大樹さんのことは好き。」

「!？」

「は、裸見られたからとかじゃなくて？」

「…沙綾は、裸見られたらみんな好きになっちゃうの？」

「なっ…」

「何故お前が正論で返せるんだ…。」

「ノンノン、大樹さん。お前じゃなくて、おたえ。」

ごめん、ちょっとイラっとした。

その人差し指振るのをやめろ。

「その時は確かに小説の知識で動いていたのかもしれないけど。

でも、沙綾に対して怒った時、あれは本当に有咲を心配して大きな声を出していたんでしょ？

私はちょっと怖くて何もできなかったけど、それでも、凄く優しい人なんだなと思つて。…あと、ちょっと有り咲が羨ましくなつて。」

「はあ。」

「私もお兄ちゃんほしい。だから、大樹さん好き。」

「あれれ、途中まで分かりかけてたのに、最後で急にわからなくなっちゃったぞ。」

「俺も。」

「大樹さん、私と結婚して、お兄ちゃんになってください。」

「…それだと、俺は今有咲と結婚してることになっちゃうんだが？」

「そうだと思ってた。」

「…それはそれで最高だな。…いってえ！」

腰のあたりを思い切り抓られた。沙綾め。

「有咲とは兄妹なんでしょ??そういう邪な妄想しないの。」

「へいへい。」

「…沙綾も、大樹さんと結婚する??」

「こらこら、その話題で広げるんじゃない。」

沙綾も赤くなってるんじゃない。

「と、とにかく。あれは色々誤解があって揉めたことで…いいよな？」

お互い状況も分かったんだし、引き摺るのも無しにして仲良くやろうぜ? まあ、君ら二人が相手なら何も心配しじゃないんだけどさ。」

「うん…そうだね。私は、まあ、大丈夫かな。」

「私も。」

「ん…。ところでさ。」

「なに？」

「バンド、組んでるんだよな？ 5人で。」

「そうだよ。」

「5人、なんだよな？」

「うん。」

「おたえ氏と沙綾と、うちの有咲に香澄、あとは…」

「りみ。」

「そう、りみちゃん。」

「…りみちゃんってさ、お泊り会の時にも居なかったけど、忙しい子なの？」

「？いや？なんかいつもタイミングが合わないんだよね。」

「普段の集まりには来るんだけど、遊びに行こうとかがって時は大体用事があるとかで…」

「：悪い子じゃ、ないんだよな？」

「有咲とも仲いいし、大丈夫だよ。」

「そっかあ：それならいいんだ。うん。」

有咲に害が無いなら正直何でもいいや。

「ヒロさん、本当にあれだね。」

「：どれだよ。」

「「シスコン」」

「声揃えて言うことでもないだろ：。」

「だって、本当に好きすぎるように見えるんだもん。」

「うんうん、有咲しか見えてないって感じ。」

「ねー。そんなんじゃ、大樹さんのこと好きって言う子にも気づかないんじゃないの？」

「ははっ、そんな奴いねえから大丈夫だ。」

「はい！」

「良い拳手だ、何だねおたえくん。」

「そんな奴、ここにいます。」

「そうかそうか！俺も好きだぞおたえくん！

これから有咲と仲良くしてやってくれなあ。」

「…だめだこりゃ。」

その後はただただ他愛もない話で時間は過ぎ、一日も終わろうかという時間におたえ氏は何かに導かれるように凄い勢いで帰ってしまったし、俺もそろそろお暇しようかしら。

「じゃあ、沙綾。俺そろそろ…」

「え…。帰るの？」

「??そりゃ、いくらなんでももう遅い時間だし、家の人にも迷惑だろ？」

「…帰っちゃヤダ。」

「はぁ？」

ぎゅっ。

帰ろうと立ち上がった俺の服の裾を握りしめ、上目遣いで見上げてくる沙綾。
…有咲だったらやばかった。

「泊まっていってよ。」

「急すぎるしそりゃ無理ってもんだ。」

ほら、俺も家で有咲が待ってるから——」

「有咲には私から連絡しとくから。ね？泊って行ってよ。」

…あんな話の後じゃ、一人は嫌だよ…。」

「沙綾…。」

「だめ…？」

そんな言い方されたらなあ…。

流石にこの弱り切った状態の沙綾を置いて、「はい、さようなら」じゃ薄情すぎるよな…。

「…わかった。ご家族にはどう説明するんだ？」

「ありがと…。家族にはうまいこと話すけど…そのまま伝えても問題なさそうだけどね。」

「わかったよ…。今日だけは、傍に居るよ。」

あ、沙綾からも入れてくれるみたいだけど、
やっぱ俺からも有咲に連絡しなきゃな…。

タイトルに反してどんどん有咲の出番が減ってますね…。

7・1…XXX 屑、動く

『なんとか、帰ってこれないの？』

『急ぎの用時とかあったか？』

『そういうんじゃないけど』

『沙綾と一緒に泊まるってどういうこと』

『一緒について言うか、山吹家に一泊するってことだよ』

『付き合ってるの？』

『それはないから安心しろ』

『帰ってきてほしい』

『さびしいの』

『相談があるらしくて今晚居てくれないかって』

『言われてるんだけど…』

『もういい』

『もう知らない』

『ヒロにいのばか』

『なんでそうなるんだよ』

『なあ』

『有咲？』

「…はあ。」

「有咲、連絡ついた？」

「ついたっちゃあついたけど…まあ、御怒りだ。」

お風呂を頂き、再度沙綾の部屋にお邪魔したところで問いかけられる。

『ばか』と言われたきり既読も付かず、もう2時間も連絡が取れていない。

何かあったんだろうか？ただ怒っているだけ？それともブロックされてる？

「…有咲が心配？」

「そりゃまあ…大切な」

「妹だから？」

「うん……」

「……帰りたい？」

「帰りたい……っていうか、兎に角有咲が心配かな。」

嫌われたくない、ずっと兄貴のままで居たいって気持ちが強くって。」

「……………そっか。」

精神的に弱っている沙綾のそばにはいてやりたい。俺なんかが、傍に居るだけで少しでも安らぐことができるのならそうしてやりたい。

でも、有咲が大切なのも間違いない。俺にとっちゃ現状ただ一つの守らなきゃいけないものだし、気にかけてやらなきゃいけない対象でもある。

その有咲が「帰ってきて」と、珍しいことだがはつきりと意志表現をしているのだ。これに応えてやれないで何が兄貴か。

「大樹さんってさ、彼女とかは作らないの？」

「…？急だな。」

「いいから、答えて。」

「うーん…要らないって言えばそれは嘘になる。」

でも、今は妹の事もあるし、俺自身の生活が固まってないというか、自立しているわけでもないから。

…って、まじめすぎたかな。」

「…んーん。真面目で良いと思うよ。」

それで、そういうのを全部理解した上で付き合いたいって言う人が現れたら？」

…そんなモノ好きは居ないだろう。

例えば話にしてもあまりに非現実過ぎて考えが纏まらんよ。

「どうなのかなあ…そんな変な奴には会ったことないが。」

…案外簡単に絆されちゃうんかなあ…。」

「…そっか。それならよかった。」

「よかった？とは？」

「大樹さん、私の、傍に居て。」

「…？ああ、ベッドに座れて事？」

「違うの。さっきの例え話。」

全部理解した上で付き合いたい人。」

「？うん。」

「…もう、通じないかなあ…。」

私は、全部分かった上で大樹さんに恋人になってほしいの。」

「…はあ？」

「私じゃ、嫌？」

部屋の入り口で固まる俺に歩み寄ってきた沙綾。

いつの間にかその距離は数cmまで縮まり、俺の両手は沙綾の両手によって包み込まれている。

話の流れに、沙綾の吐く言葉に思考が追い付かない。

沙綾が恋人？俺の？揶揄っている訳じゃ？いやいや、こんなに真剣な顔をしているのに。でも俺には有咲が。そうだ有咲。…有咲は妹？妹ならいいのか？これからずっと妹？

「大樹さん。」

「はい？」

「返事…聞かせてもらえる？」

「…俺には、有咲っていう妹がいる。」

「うん。」

「でもそれは血の繋がりもなく、ごっこ遊びみたいな兄妹で。」

「うん。」

「だから…その…。」

「…今すぐは、答えにくい？」

「……………そう、かも。」

「ごめん、沙綾が嫌いとかじゃなくて、そんなこと全然考えたこともなかったって

言うか…」

「…そうだよね。私も、変なこと言っちゃってごめん。

でも、本当に好きになっちゃったから。」

その真剣な瞳を直視することができない。

頭の中には様々な人間の顔が浮かぶ。

こんな俺なんかに好意を持ってくれている人達の顔だ。俺なんかと、一緒の時間を過ごしてくれた人達の顔だ。

半分パニックの俺を見兼ねてか、一先ず関係については保留で良いと言ってくれた沙綾。

年下に気を遣わせるなんて、どうしようもないな。

一旦会話をやめて自分の思考に没頭する。

第一好きとか付き合うとかそういうこと自体、あの花音からの告白を受けるまでは考えたこともなかった。受けた後だって、そんな資格が自分にあるとも思えず真っ先に断り方を考えてしまっていたし。くそ、何だってこういうことに限って頭

が回らねえんだ。

…と余りにも悶々と考えていたからだろうか。

気付けば周囲は明るく、恐らくは早朝と言える時間。

「あれ？俺は一体何して…」

周囲を見渡して気付く。

成程無意識でこうなつたとは俄かに信じがたいが、自分は横たわっていて隣に沙綾の寝顔。

「あ、あはは……俺、結局沙綾の部屋に泊まっちゃったって訳か…。」

——神様、俺はどうしようもない屑です。

あの後、沙綾を起こさないようにそっと抜け出し、恐らく万実さんも起きていないであろう時間に帰宅。

未だはつきりしない頭のまま、気付けば有咲の部屋の前に来ていた。

「…有咲。」

返事を求めているわけではない。飽く迄体裁として、※部屋に入る前にノックや声をかける※をやった迄だ。

部屋の中も廊下も、静寂が満ちている。庭から小鳥の囀りがはつきりと聞こえてくるほどだ。

清々しい筈の朝が、こんなにも重い気分にかけてくれるなんて。

暗い気持ちのまま、有咲の部屋の戸を開いた。

「ッ…!!…有咲、起きてたのか。」

「……おかえり、ヒロにい。」

「その、ごめ」

「帰ってきてくれなかったね。」

「…ああ、その、考え事してて…。」

「考え事してたら女の子の家から朝帰りしちゃうんだ。」

「いや、そういうわけじゃ」

「考え事のせいで私のお願いは聞いてもらえなかったんだ。」

「…有咲ほんとごめん。」

「別に、謝ってほしいわけじゃない。それだけ沙綾が大事だったんだもんね。」

「……。」

ずっとこちらに背を向けて座っているため表情まではわからないが、声の平坦さからしてきつと怒ってる。まあメッセーじもあんな終わり方だ。大体予想は付いていたが。

「それで?…こんな時間に部屋まで、何しにきたの?」

「その、できるだけ早く謝りたくて。」

「謝る? そんなの必要ないでしょ?」

「そんなことない、妹の言葉を見殺してこんな時間まで」

「もういいって!!」

「……ッ!」

普段あまり聞かない有咲の大声によって俺の言葉は遮られる。

なんだ、どこがそんなにいいなかった。怒らせるような言葉選びをしたつもりは

「私はヒロにいの『妹』なんだからさ!!」

もう何も気に掛けなくていいからさ!!

『妹』なんだから…『妹』でしかないんだから…もう、放っといていいから…」

「有…咲……?」

「出たって!!!」

※

その怒気に押し出されるように廊下、そして自室へ。

度重なる頭の追いつかない事態に最早呆然。

何も考えることができず、何も動けず。

ただひたすらに情けない、無力で無遠慮で、どうしようもない屑だと、自分を落とし堕ちていくしかなかった。

最愛の妹からぶつけられたこの気持ちを。

自分の意思とは関係なく湧き上がるこの気持ちを。

制御する方法も解決する方法も、俺は知らない。

※

抜けかけていた俺の魂を呼び戻してくれたのは、久々のピンク、彩からの着信

だった。

「…はい。」

「あっ!! ヒロさん!! あのあのっ、えっと…」

「…どした」

「か、花音ちゃん知りませんか??」

「花音…?」

その名前を聞いた途端、胸の奥がズシリと重くなる気がした。

痛みにも似た重い物。

「その…もう一ヶ月になるんですが、学校にも全然来なくて、連絡も取れなくて…
！」

「…一ヶ月も？何でまた」

「それがわからないからこうして訊いて回ってるんです!!

何か聞いてませんか??」

「……いや、俺は特に何も。」

嘘だ。

勿論何かを聞いて知っているわけではない。

それでもきつと、あの件だろう。一ヶ月前からという期間にも説明がつく。

あの件で立ち直れないほど傷ついているのだとしたら――

「それもまた、俺の責任、か。」

「……え？」

そうだ。そうだそうだそうだ。

きつとそうだ全部そうだ。

全ては、経験が無いとかいう逃げ道を頼りに人の心を弄んでしまっている俺が悪
いんだ。

だったら、全部俺が動くしかないだろ。

「彩、君今何してる？」

「普通に学校ですけど…。」

「そうか、学校の後って用事あるか？」

「今のところは特に…お仕事も連絡来てないですし。」

「よし、じゃあ学校終わったら連絡くれるか？」

「何かあるんですか？」

「松原家に突入するぞ。」

「ええ…？」

やってやる。

どこまでできるかはわからないが、全員との関係を何とかする。

出来るところまで、やり切って見せる。

※

彩からもう一度電話がかかってきたのは午後五時を回ろうかという頃だった。

…結構遅かったな。

「遅いぞ彩。」

「うう、ごめんなさい…今から学校出るんですが、どこで待ち合わせにしますか？」

「校門で良いかな。」

「校門…？もうすぐ着きますけど…あっ」

あまりにも待ち時間が長く暇だった為、花咲川の校門付近でスタンバイしていたのだ。

どうだ、先回りだぞ。さぞ驚いたことであろう。

「…全く。友達が心配とか抜かす割にのんびり屋さんじゃないか。」

「ち、ちがうんですよ。私は私で色々忙しくって…。」

「はっはっは、別に怒ってないさ。お疲れさん。」

「あっ…」

急いで走ったのか、すっかり乱れている癖のある彼女の髪をそっと撫でる様に直す。

ふむ、こんなもんか。

「何か、あったんですか？」

「えっ？」

「雰囲気が違う気がします、ヒロさん。」

「…そうか？気のせいだろ。」

まあそんなのは後回しで良いんだ。」

「そんなの…。」

「行くぞ彩、遅れるなよ。」

「えっわっ、ひゃあ!？」

何故か俯きかけ落ち込んでいる彩の右手を取る。

もたついている時間すらもどかしい。早く花音の元へ行こう。

そのまま走り出す俺の頭には、アイドルの手を握っていることや沙綾からの告白の事、有咲との仲が拗れている事…全てが影を潜め、あの時の花音の震える声だけが響いていた。

※

久しぶりだな、松原宅。

この時間帯にここに来ると、花音のドラムを運んでやったことを思い出すな。

あの金髪この子も今じゃ仲良し？ みたいだし、結果オーライって感じの出会いだったのかな？

まあいい。思い出に浸るのはこれが終わった後だ。

「カーテン、開いてませんね…。」

言われて二階の、花音の部屋を見上げる。

その窓にはびたりとカーテンが閉じられ、外の景色は疎か日の光すらも入らない状態となっていた。

「……チャイム、鳴らすぞ。」

ピョギ——

間延びするような音に気が抜けかけるが、これからの事を考えるとそうも言っていられない。身から出た錆とは言え、女の子と険悪になってばかりだな俺。

隣の彩も緊張した面持ちでドアを見つめている。…心配だな。

やがて、小さな音と共に少しだけドアが開かれる。思わず半歩後ずさりつつも

「…こんにちは。僕たち、花音…さんの友達で、僕は常盤と申しまして…」

「私は丸山っていいいます。」

花音の母親…お姉さんだろうか？ ドアから顔半部を覗かせる、同じような髪色の少し年上の女性に名乗る。

うまく取次いでくれたら助かるんだが…。

「…花音の？」

「はい！…私、同じ学年なんですけど、花音ちゃんが心配で…」

「それで、お見舞いに来たんですが…。花音さんはご在宅ですか？」

「ええと…ちょっと待ってもらってもいいかしら？」

俺達の言葉に逡巡するような素振りを見せた後、花音似の女性は一度引っ込んでしまった。

取り残される二人の間に、妙な緊張感が残る。

「具合…本当に悪いんでしょうか。」

「どういう、意味だ？」

「その、不登校…とか。」

「…いじめでもあったんか？」

訊くまでもない。理由はわかってる。だからここに居るんだから。
だから、俺でないとこの問題は――

「あの…常盤さんと丸山さん。…でしたっけ。」

「!!は、はい。」

「一先ず、上がってください。」

再び顔を覗かせた女性に招かれるまま、俺たちは松原家の中へと足を踏み入れた。
居間に通され、ソファへ。

「…お茶で、いいかしら？」

「あ！いえ、お構いなく！」

「……そうですか。」

言いつつ、向かい側へと座る彼女。

その後、「あっ」と何かに気づいたように声を漏らし、はにかむ様に笑いながら続けた。

「申し遅れましたね。私は花音の母です。

…あの子のお友達が訪ねてくるなんて初めてだから…私も緊張してしまっているかもしれません。」

「お母さん…可愛いですねっ！」

「ふえっ？可愛いだなんて、そんな…。」

「彩…」

「あっ、そ、そうだった…。お母さん、花音ちゃん、具合だいぶ悪いんですか？」

想像より若く見えるお母さんと戯れている場合じゃないぞ…。

…つか、あの「ふええ」って遺伝なのかな。

「…病院にも行っただんですが、体には異常がないと言われまして。

勿論、閉じ籠ってしまっているの、運動不足や栄養の偏り等は懸念されるとの事でしたが…。

…私も今日はお休みですけど、普段は仕事に行ってしまうので昼間の様子はわからないんです。」

「異常がない…。」

「花音さんは、今も部屋に？」

「ええ…。たまに音がするので、恐らくは。」

「…改めて、にはなるんですが。」

僕達、今日は花音さんのお見舞いに来たんですよ。もし、病気や怪我でないなら一度お話したいな—と思ひまして…。」

「お話ですか…。でも、あの子がいつ降りてくるかわからないですし…。」

「…花音ちゃん…。」

そろそくだわな。あのふわふわしつもしつかり者の花音が学校に来られないほ

ど落ちているんだ。

予想はしていたことだけど、家の中でもやはりこんな状況か。

…気が重い…が、行くしかないよな。

「お母さ…いえ、松原さん。僕、部屋の方まで行ってきてもいいでしょうか？
できることなら、話がしたくて…。」

「…ええ、それは構いませんが、部屋には鍵が。」

「勿論いきなり入ったりはしませんよ。ドア越しに、少し伝えたいことがありますし
て。」

「そう、ですか…。では、宜しくお願いします…。」

「私も…！」

「彩は一旦待っててくれ。後でバトンタッチするから…な？」

「は、はい…。」

そんなにシュンとするな。ちゃんと花音のこと、連れてきてやるから。

廊下に出て、見上げる階段。

以前来たときはこんなに長く聳える様に見えたらうか？

これから起こるであろうことに胃を痛めつつ、木の軋む音を感じながら一步を踏み出した。

長考モードに入ると、新しい作品の案ばかり浮かぶのは何故でしょう。

既書いてみたい新作のイメージがひとつ、ふたつ…あぁっ!!

完結はまだまだ先になりそうです。ペース遅くてすみません。

7-2.. 魔窟 始末

もうこれバンド関係ないですね。
すいません。

「花音。……俺だ、大樹だ。」

以前来たこともあって部屋の場所は大体覚えていた。

扉の前に立ち呼びかける。…ノックはとうに4、5回している。

ここ迄来ておいて散々迷った挙句、絞り出した声の何とか弱い事か。

…それでも、

「…大樹…さん？ほんとに、大樹さん？」

返事が返ってきて、というより久しぶりにその声が聞けて、嬉しかった。

「ああ、俺だよ花音。」

「お母さんが言ってたおともだちって、大樹さんの事だったんですね。」

「ん……。入ってもいいか？」

「…来てくれた理由にも、よります。」

理由、理由か。

「…えーっと、だな。」

一つは、花音が学校に来ないって聞いて心配になったから。

もう一つは…この前の件で、ケジメをつけようと思って、だな。」

「……ケジメ、ですか。」

「…うん。」

「……………」。

長い沈黙。

といっても、どっちが悪いとか俺がどうこうするとかって問題じゃない。

ただ黙って、花音の返事を待つ。

「……二つだけ、約束、してもらってもいいですか。」

「…なんだ？」

「まず今の私の、…部屋の状態を誰にも言わないでください。」

「…うん？」

「約束してもらえますか。」

「ん。……わかった。」

私の、はともかく部屋の状態??

散らかっけるとかそういうのじゃなくて……？

「うん。」

何でも来い。

「もう。」

「……私を、嫌いにならないでください。」

「……ん？」

「……約束、してもらえますか？」

一体中には何が待ち受けているというのだろうか。

嫌いになる？俺が？花音を？…そんなこと、万に一つもあるわけないだろうに。
俺の答えは決まっている。

「勿論。約束しよう。」

沢山の疑問と謎を孕んだ部屋。そこへ続いた一枚のドアが、開かれた。

※

「かの……うおっ！」

まず目に飛び込んできたのは、壁一面に貼られた大量の写真。

何かのファンだとかいうなら分からなくもない。好きな物には囲まれていた

て言うしな。

ただ、問題は被写体にあって…。

「……俺？」

全て、俺。常盤大樹の様々なシーンが切り取られ、四方からこの部屋を見つめている。

…おいおい、中にはリョナ系統のな雑コラまであるぞ。だいたい趣味悪いなこりゃ…。壁は俺で床は…。凄い量の紙？…だ。

「……引きましたか。」

「…引いてないと言えば嘘になる。…けど、前に来たときはもっと綺麗に片付いた印象だったんだけどな。」

「そうですね。」

というか、花音はどこに居るんだ？

声は聞こえど姿は見えず。おまけにカーテンを閉め切った部屋は薄暗く、目を凝らさないと足元も危うい程だ。

「…花音？取り敢えず暗いから明かりを…んぐっ!?」

「しーっ……ですよ？大樹さん。」

「!?……。」

突如として口が塞がれ、後ろから何者かに拘束される。…何者かと言ってもこの部屋には花音しかない訳だが。

その直後に耳元で聞こえる囁き声。到底体調不良で学校を休む奴の声とは思えないほど上機嫌そうに響くそれが、口を覆う掌の甘い香りと相まって、蕩ける様に耳から脳へ。

思わず膝が折れそうになる。

「ふふっ…見ちゃいましたね、大樹さん。

これが本当の私ですよ…?」

「…………驚いたな。人は見かけによらないもんだ。

で、後ろは振り返らないほうがいいよな?きつと。」

シャツ越しに伝わる感触からして、恐らく視覚的攻撃力全振りの状態で抱きついてるんだろう。…物理防御力ゼロ、と言った方がいいか?

一先ず口は解放されたので首だけ動かして再度部屋の中を確認。なるほど、床に散らばっている『紙』はティッシュかなんだな。

「振り向いてみてほしいなあ…。ふふっ。」

「楽しそうなところ悪いが、何点か質問だ。

こんな部屋の中でひと月も閉じ籠ってたのか?」

「もお、ゞこんなゞなんて言わないでください。私にとって、最高の視線を浴びられる部屋なんですから…。」

壁中どこを見ても大樹さんが居る。何処に目を逸らしても大樹さんに見られている。これ以上の快感はないでしょう？

…ふええ…。」

恐らくは恍惚とした表情でも浮かべているんだろう。話し方、特に後半の盛り上がり様なんかは、うっとりとしたようで興奮を混ぜたようなそれだ。

ゞ快感ゞとも確かに言っていたし、中毒症状のようなものでここに縛り付けられていたって訳か…？にしても俺で？わけわからん。

「あとは、さつき口を塞がれた時にも気になったんだが、君の腕何で濡れてんの。」

「腕え…？…ああ、これですかあ。」

ちよーっとだけ、切ったんですよ。何だか寒くって。」

「寒くて切るって発想はよくわからんけど、痛まないのか。」

「…簡単なことです。」

「…あん？」

急激に声のトーンを落としたかと思うと、俺の体を拘束していた腕を解き、目の前に回ってきた。

「ぐッ……!!」

「はぁ…やっぱり目を逸らしちゃうんですね。大樹さんは。」

一糸纏わぬ姿を直視できず思い切り視線を逸らす。

…本当は裸だけに戸惑っているわけじゃない。その綺麗な白い肌に刻まれた無数の傷。…腕だけでなく、首や腹、脇腹や腿にまで刻まれた傷。

…寒かった…という言葉の指す意味は不明だが、俺には痛々しすぎる景色に見えたんだ。

「快感の中でもね、時々無性に心が寒く感じることもあるんですよ。

体の芯、内臓ともまた違う。：体の奥底が。」

「……。」

「そんな時、貴方の事を思い浮かべながら切るんです。そうしたらね？

：流れる真っ赤な血を見て、「ああ、こんな私でも生きているんだな」って実感できるんです。」

「……そういう、もんか。」

「それにほら、その最中を大好きな大樹さんにこんなにも視られているなんて、興奮するじゃないですか。

：ああっ。あの視線、あの感覚：思い出すだけでゾクゾクしちゃう……。」

：目の前のこいつは本当にあの花音なのか？正直、表裏って言葉じゃ納得できないところまで捻れ曲がってしまったていると思う。

彼女の中の何が壊れてしまったんだろう。：よもや、この異様とも取れる状態が真の彼女の姿だということもあるまい。

困惑している間にも、机の上の様々な種類の刃物コレクションの中より一本の彫刻刀を手にした彼女は、新たな_レ証_をを刻み始める。

ツ―…と一筋入るソレからはまるで湧き上がる歓びを表すかのように液体が溢れ出る。

「あはっ。…ねえ、見てください大樹さん。これが、温もりなんですう。

はあ、はあ…痛いのだって私にとっては愛撫と同じ、快感の為の刺激なんですよ。」

「君は…一体どうしてこんな…」

「…大樹さん、今日は私を、改めてフりに来たんですよね。」

…私との宙ぶらりんな関係を断ち切ることで、終わらせに来たんですよね？」

…そうだよ。俺には大事な妹が居るからね。」

そう言えいいだけの事なのに。…花音の表情^{かお}を見てしまったきり、声を出せずにいた。

何て哀しそうに笑うんだ。何て寂しそうな眼差しを向けるんだ。

そこにあるのは期待か、諦めか…。

「…私、怖いんです。今まで誰かとお付き合いしてても、ここまで相手を想う事な
んかなかったから。」

突き放されるのが、大好きな人が離れて行ってしまうのが…。

「や、別段離れはしないけど…。」

「でも、お付き合いしてはくれないんですよね？私のもものになってくれない、私
を受け取っても貰えないってことですよね？」

「…花音？」

正直俺も怖いよ。このままきっぱりと断ることでこの後何が起こるのか。

彼女が言ったように、突き放し≡友達≡という距離を保つことでどういった関係が
続くのか。

もう経験が浅いからなどと言い訳はできないが、目の前の少女は紛れもなく最上

位の問題を抱えている。

「…だからこの部屋を創ったんです。

この部屋が！この部屋こそが私の生きていくべき場所なんです！

写真の…記憶の中の大樹さんは、私を決して裏切ることはないから…。」

「…それは違うぞ花音。」

「……何です？」

「当の俺から言うのもどうかとは思うけど…。

それじゃあ何にもならないじゃないか。現実の俺と、良い友達としてやっていくのは無理か？

付き合うか自分の世界に引き籠るか、二択しかないのか？」

「…大樹さんって、勝手ですよ。私の中を大樹さんで埋め尽くしたくせに、そうやってあっさり突き放す。

じゃあこの気持ち、どうしたらいいんですか!? 貴方以外考えられないんです…。

貴方以外、もう何もいららないんです…。」

「花音……。…えっ、ちょ」

瞳はどこか遠くの宙を見つめたように虚ろで、動きも酷く鈍い。だがそれでも言葉は途切れない。

俺への純粋な想いなのか、はたまた恨み言か。何にせよ、君の両手に訊きたいんだが、俺を脱衣させる必要どこにあるんだ。

…よくノールックでボタンやらベルトやら外せるな。

「花音、ちょ、ちょっとストップ。

話はちゃんと聞いてるから、脱がさないでくれ。」

「ねえ大樹さん。今日だけ、一度だけで良いですから…貴方が欲しいんです。

貴方が今この瞬間だけでも愛してくれたら…私の物に、なってくれるなら…」

「いや、下に彩もお母さんもいるからさ？じゃなくて、そういうのは違うだろ…」

「彩ちゃん…？彩ちゃんも来てるんですか？？」

まさか私をつる理由って、彩ちゃんが居るからですか？市ヶ谷さんを体良く理

由に使いながら彩ちゃんと???」

「それは本当に全く違うぞ。全部お前の勝手な想ぞ…うお!？」

ブツブツと相変わらざるの虚ろな表情で呟く花音にベッドへと引き倒される。

後頭部に強い衝撃。どうやら宮棚にしこたま頭を打ち付けたらしい。視界が揺れ、思考が止まる。

「花音、おかしいことはやめろ…このままじゃ、友達にもなれなく…ま」

「おかしいこと?これはもう仕方がない事なんです。よりもよって彩ちゃんともありえない。」

これはやらなければいけない事。貴方が私から離れようとするなら、私から繋ぎとめたらいいだけだった。

どうして今まで気づかなかったんだろう?もっと早く行動するべきだったよお、ふええ…。」

駄目だ。打ち所が悪かったか？ どんどん視界の揺れが大きく、耳が遠くなっていく。

花音の呪詛のように垂れ流す危ない言葉も右から左へと流れていく。

何もできないまま、されるがままの状態で、マウントポジションを取られる。幸いなことに俺サイドはズボンという守りがあるからいいが相手はノーガードだ。

いっどんな間違いが起きてもおかしくない状況で、抵抗しないなんてあっていいわけがない。

止めなければ。

——何を？ どうやって？

花音にこれ以上やらせちゃだめだ。

——一体何故？

俺には妹が。

——それは体裁を保つ為の言い訳？

思考が動き出す度に単純な疑問にぶつかりまた止まる。

切羽詰った状況だからこそ、頭の中で冷静な自分と熱くなっている自分、二つの

観念がぶつかり合うのが分かる。

頭で考えるだけじゃだめだ。行動を、何か行動を起こさないと……！

「花音！やめろお！」

「ッ!!」

思わず出した声に体を震わす。

…自分でも少しびっくりした。が、如何せん耳がよく聞こえないもんで勘弁して頂きたい。

「…さっきも言ったように、俺は今日ケジメをつけに、来たんだ。

先延ばしにしていた、返事を。」

「聞きたくない。」

お前が耳を塞いだとしても俺は言うぞ。

「俺には大事な人が居るんだ。傷つけちゃいけない、守ってあげたい大事な人が。」

「聞きたくない聞きたくない。」

伝えなきゃいけない、そのためにここ迄踏み入れてきたんだから。

「そいつは妹みたいなのやっただけど、妹じゃなくて。」

そいつと、もっと近付きたい、深い仲になりたいって今は思ってた」

「聞きたくない!!聞きたくないっ!!!!!!」

だからこそ、俺にしかできないこの……ッ!?

「ぐッ……う……??」

息が止まる。…これは何だ。

頭が痛い。さっきしこたま打ち付けたところだな。でも今の問題はそこじゃない。…腹が熱いのは何故だ？どこかにぶつけた？まさか。

腹に違和感。…何かが入っている…？

深く刺さったそれは鋭い…

…刺さった？

「あ……あ………」

「ふ、ふええ…。大樹さんが悪いんだから、大樹さんのせいなんだからあ…。」

鳩尾の下あたり、やや右か。鈍色の反射光を覗かせる金属質の物が、流れ出す血の中心で痛みを伝えている。

生の実感

ゆっくりと、脈打つように。愚かな俺を、嘲笑うように。

状況から推測するに、机の上のコレクション。その何れかだろう。

ああ…刺されたんだ。そう認識できたのは、二撃目の細く鋭い何かが左肩に突き刺さるのとはほぼ同時だった。

「——あああゝあゝッ！……！！……！！」

思わず上げた声はまるで獣のような、自分が出したとは思えない程酷く汚い音だった。

「あは！ははっ！はははは！！お揃い！お揃いだよお！大樹さん！！
嬉しいねっ！嬉しいねえっ！？あはっ！！」

久しぶりに聞いた彼女の笑い声はまるで狂気に取り憑かれたように陽気で愉快なものだった。

その異様な状況に何故か笑みを零しながら、また後悔と妹への謝罪を抱えながら、俺の意識は途切れた。

——有咲、ごめんな。

ひとまず書きたいところは書けたかなと。

間が空いてしまうかもしれませんが、ご了承くださいだけです。

X・X…分岐点と選択

ああ、真っ暗だ。

——気づけばこの空間にいた。

俺は今、どこに居るんだ？

——立っているのか座っているのかもわからない。

——しかし全部が黒。目を閉じているとかなないよな？

——何処を見回しても、目に映るのは漆黒のみ。

——いや、そもそも本当に目で見ているのか？

——首をぐると回すように周囲を見る。

——果たして本当に首が存在しているのか？

——疑問が増えただけだった。

「……………っ！……………っ！！」

——頭の遙か上の方、上空高い位置から声が聞こえる。

懐かしい響きだなあ。聴いていて安心する声だ。

——必死な叫びにも聞こえるソレが、何と言っているかまでは聞き取れない。

高い声、女の子かな。

——女の子、というキーワードが頭のどこかで引っかかる。

何か大事なことを忘れているような…？

——女の子、女の子…と記憶を辿るもそれらしい覚えはない。

うーん……考え事してたら眠くなってきたな…。

——体の存在を感じられない状態でも疲労はあるのかと思いつつも、耐え切れず

意識を手放した。

※

——どれくらい経っただろうか。

……んん??

——再び浮上した意識は、ぼんやりとした映像を確かに捉える。

……映画館みたいだ。

——映し出されているのは、何とも面白みのない風景。

——なんだこいつ。周り女の子ばっかだな。

——冴えない男は、どんなに場面が切り替わっても少女が近くにいた。

——すげえ、取っ換え引っ換えじゃん。

——色とりどりの髪色の少女たちが、いつも傍に居る。

……でも、楽しそうだな。

——喧嘩をしたり、じゃれ合ったり。

——周りも満更でもなさそうだし……ハーレムだなあ。

——ただ、あまりにもいい顔をし過ぎたのか、少女達との間の空気が陰悪なもの

になっていく。

そりゃこいつが悪いよ。人の気持ちも知らないでさ。

——本当にそう思う？

ああ、思うね。みんなに思わせぶりな態度取っちゃってさ……

そりゃギスギスするし、無意味に傷つけ合うようなことに……

——あれ、どう思う？

屑でしょ。女の子を悲しませた挙句それに気付かないなんて、同じ男として許せな……

——思い出した。

そうだ。確か花音に返事を、ケジメをつけに部屋まで行って……それからどうなった？

「ふええ……大樹さんっ？」

…花音。お前は結局、俺の事が好きだったのか？それとも、憎かったのか？

「そ、それを考えるのは、大樹さんの仕事だと思います…ふええ。」
そっか。

「私の告白も忘れないでね？大樹さん。」

沙綾…？忘れるわけないだろう。

誠心誠意、真っ向からキチンと答えて見せる。

「…付き合うつて事？」

…いや。お前に対しても、きつと哀しい思いをさせることになる。

「…そう。…それでも私、待ってる。」

日菜も来てくれたんだな。

「るんっ♪…ヒロくんっ！」

「来てくれた…っていうか、ヒロくんが考えてくれたって感じかな??」
考えてくれた? とは??

「あのね、ここって、ヒロくんの頭の中にしかない世界なんだ。」
頭の中…? それは、ニココロ♪とか♡気持ち♡とか、そういう類って認識で良いのかな?

「そーそー！ヒロくん冴えてるう♪」

どーも。で？考えたって言うのは？

「それは言葉のまんま。あたしのことを今思い浮かべてるんだと思う。」
なるほど？…じゃあ強くその人の事を考えたら、ここに現れると。

「そーそー。試しに誰か思い浮かべてみたら??」

んー……。。

「はあい！あなたのおたえちゃんです！」

ホントだ…。

「うわっちゃー。また凄いのを思い浮かべたね！」

まあ、インパクトあったほうが分かりやすいかと思ってな。

「はっご主人様っ…!?逢引??」

ぶれないなあ…。

「ひ、大樹さんっ……！」

…君にも、謝らなくちゃだな。香澄。

「私に??…どうして？」

折角友達になってくれたのに、その友達を傷つけた。
一番近くにいて、俺が。

「……有咲のこと、ですよね。」

ん。でも、ちゃんとケジメ付けて、謝りにいくつもりだから。

「……………。無理はしないでくださいね。」

…ああ。

…………満を持してって感じだな。

「本当に、無理はしないほうがいいと思うな。」

「さっき誰かが言ってたでしょ？ここはヒロにいの頭の中だって。」

俺がこの順番で思い返してゐるって事か。

「まあそんなところ。刺されたところ、痛かったでしょ？」

痛かった…のかな？気づいた時にはもうここだったけど。

「そっか……。ねえ、ヒロにい。」

なんだい。

「もう、休んでいいんだよ。…私のことは、もういいから。」

…どういうことだ。

「こんなことになっちゃうなら、あんな怒り方しなきゃよかった。」

いや、全部俺のせいだろ？

「それでも、もういいの。……ゆっくり休んでよ、ヒロにい。」

……………。

「色んな女の人と仲良くなるのは嫌だけど、ヒロにいが傷つくのはもっと嫌なんだ

もん。」

……………。そうか。

「うん、だから。」

ここは俺の頭の中、だったよな。

「う？…そ、そだよ。」

ん。…これはきつと、分岐点だと思うんだ。

一度大きな失敗をして、皆の気持ちと自分の体をボロボロにしまった俺への、最期の選択肢。

「…どういうこと。」

有咲。お前を傷つけないように俺は行動したつもりだ。

今後どうするか、どう行動すべきなのかも今ここで決めるべきなんだ。

もう、有咲が傷つくのは見たくない、ただそれだけなんだよ。

「ヒロにい…。」

だから、俺は——

投稿まで間が空いてしまいすみません。

推敲の結果、少し特殊な投稿の仕方になりそうです。

N-1..病院 懺悔には代償を

俺は――

もう一度、ゞやり直したいゞと思った。有咲の兄として、一人の男として、関り傷つけた全ての人に謝罪したい。

その結果がこのような事態を招いたんだとしても、何度でも立ち上がりながら、みんなに。

今更散々傷つける側だったんだ。今更少し肉体が傷ついたからなんだってんだ。俺がみんなに、有咲に与えてきた傷はもっと深い筈だろう。

――だからこそ、今は目覚める時なんだ。

※

「……う……………む……。」

「!!!!!!!!!!!!!!ひ、ヒロにい!!」

ぼんやりとした視界に映る真っ白な天井・壁・女の子の泣きじゃくる顔。

ここはどこだろうか。…ッ!!

周りを見ようとしたが体が固定されていて動けない。首も何かで固められているし、新手のイジメかあ……?…………おっ、左手だけは動くな。

「ヒロにい!今、お医者さん呼んでくるからね!!」

「…………??」

隣に居た女の子がそう言い残し走り去っていく。…全く、病院内は走っちゃだめだと教わらなかったのかねえ。

とお転婆で困る妹の姿に……妹?

「……あ」

俺が今何故この状態でここに居るか。こうなる直前に何があったのか。

…そして、さっきまで何を見ていたのか。

全てがまるでフラッシュバックのように脳裏を過る。思い出した…こんなことしてる場合じゃ…!!

「あり…さ…。うっ!?」

直前の事は思い出さなくてもよかったかもしれない。あの生々しい金属の感触を思い出したことによって、ソレが刺さっていたであろう各部位の痛みまで思い出してしまった。

肩が、腕が、腹が腋が腰が腿が。あらゆる場所がズキリズキリと痛みだす。思わず手放してしまいそうになった意識を必死で繋ぎ留めながら妹を待つ。

たしかさっき、医者を呼びに行くとかなんとか…。

ハ。タ。ハ。タ。

ああ、医者か有咲か、どちらにせよ俺にとって敵ではない者の足音がフェードインしてくる。もう少しの辛抱だな。

ガラッ

「ヒーロくんっ？起ってきたっかにや？……うわあ!!」

「……なんだ日菜かあ……。」

まだ視界がハッキリしないせいでイマイチ顔は分からないが、その無駄に明るい声は氷川の妹の方。

「ちょっと！なんだって何よう！……ってか起きてる！喋ってる!!」

「…日菜うるさい。病院だぞ。」

「あっご、ごめん…。…お医者さん、呼んでこよっか??」

「いやいい。今うちの妹が行ってくれてるから…。」

「そ、そう？何かあたしに出来ることない??」

出来ること、できることか…。

そうか、じゃあ最初に謝るのはこの子になるのかな。

「そうだな…。…じゃあ、痛みを紛らわすためにも、話し相手になっちゃくれないか。」

「う？…いい、いいよっ！何話す?」

「ええと…日菜ってさ、可愛いじゃん？」

「うえっ?! い、いきなりだねっ! ……自分じゃわかんないけど、そうかな。」

「前に可愛いって言った時、エラく動揺してたみたいだったからさ。謝りたかったんだ。」

入りはこんな感じで良いだろう。間違っちゃいない。

…ただ、これから謝ろうとしている内容が内容だけに、慎重に行かなきゃいけない。勘違いだったら超恥ずかしいじゃんか。

「えっ? ええっ!?! …あ、謝らなくていいよお! …あたしもその…嬉し、かったし…。」

「そっか…。……………なあ?」

「う、うん?」

「日菜ってさ…俺の事、どう思ってたの。」

「……………」

い、言っちゃった…!!

はああっどうすんだこの沈黙。そして忘れかけていたが傷口がいてえ。

「…ヒロくんってさ、何か不思議なんだよね。」

「不思議？」

「うん。……皆、シアイドルとしてミ可愛い可愛いって言ってくれるんだけど、ヒロくんってそういうの無いじゃない？」

「まあ、最初はアイドルだと思ってなかったからね。」

「それもあるけど！…でも、それだけじゃなくて…。あたしね、ちゃんと友達みたいに関わってくれる男の人に出逢ったことってないんだ。」

まあ…これだけ整った容姿の上この人懐っこさだもんな。そりや意識しちゃう男共が寄ってくるのも分かる。

「…だから、普通に弄ったり揶揄ったりしてくれるのが嬉しくって、……意識は、してたかも。」

「……………うん。」

「…だから、どう思ってるのかって訊かれたら…。好き？ なんだと、思う。…うん。」

よかった勘違いじゃなかった！ いや良くないわ！ これって一種の告白みたいなもんなんだよな？ で、俺はこの子に対して謝らなきゃいけないんだよな…？

「…ありがとう。日菜の気持ち、なんつーかすっげえ嬉しいよ。」

「!! ほ、ほんと??」

「ああ。……だから、これからずっとこんな関係保てたらいいなって、そう思ってる。」

「……………え？」

「ごめん日菜。勘違いだったら申し訳ないんだけど、もし異性として好きだって

言ってくれてるんなら、君の望む関係には進めない。

…今回こんな姿になっちゃった原因でもあるけど、どうやら俺は無自覚に女の子をその気にさせるような行動を取っちゃってたらしい。」

「…それで？」

日菜の沈んだような、とんでもないものを見てしまったかのような表情をチラチラと見やる度に、行き場のない罪悪感が胸を締め付ける。…こんな役回りはイケメン専用のポジションだと思ってたんだが、こんなにも辛いものか。

「……だから、俺は謝らなきゃいけない。俺は周りの子をそんな風には見てないんだ…。」

飽く迄友達として、いい関係を築きたかっただけで」

「あ、あはははは!! ひ、ヒロくん、勘違いしちゃって、おかしいんだあ!!」

「…日菜？」

「……わ、わかってたから。いいの! 謝らなくて! 全然!」

ほら？あたしって、結構モテるし？別にヒロくんの事本気で好きだったわけじゃない……から……さあ……。」

「……………ひん」

「じゃ、じゃあねっ！あたし、これから用事あるんだった！！！！　ばいばい！！」

初めて普通に接してくれる男の人、か。……状況が状況なら、ここからまた違った未来があったんだろうか。

日菜が涙を見せない未来が、あったんだろうか。

今できる最善の事をしたはずなのに、手元に残ったのは言いようのない虚無感と寂寞。この選択が本当に正しいかどうか誰も分からないが……振り返り走り出す直前に見えた日菜の表情は哀しみの底を見てしまったような、見る者の呼吸を止めるような辛いものだった気がした。

「は、ははは……これが責任か。……思った以上にクるな。」

思わず零れた乾いた笑いは、またしても熟考により掻き消された体の痛みを文字通り痛感させた。

※

ガラガラッ

朦朧とした意識の中、聞こえてきた扉の音は今度こそ医師と妹が駆けつける音だった。

「ひ、ヒロにいつ！駄目だよ起き上がっちゃ！」

「あり…さ…？」

「お医者さん呼んできたから！少し休もう？ね？」

「ありさ…」

宙へ伸ばした左手を有咲が力強く握りしめる。それだけで遠のいていた意識がハッキリとする気がする。

「……はああ。」

「ヒロにいい？」

そんなに心配そうな顔をするな。何もこれから悪くなるわけじゃない。後はお医者さん達が快復へ向かわせてくれるさ。

周りでは、計器やら薬やらと慌ただしく病院スタッフが動き回っている。無事目も覚めたし、あとはゆっくり休むだけ…

「常盤さん。…私の顔がしっかりと見えますかな？」

「…先生？…ああいや、まだ起きたばかりだからか、若干ぼやけます。」

「……そうですか。では次。……ああ、今は点滴で痛み止めを入れていますから、安心してくださいね。」

有咲に左手をしっかり握ってもらいつつ、眼鏡に白髭という如何にもな感じの医師の質問に答えていく。

言われた通り、痛みを感じなくなってきた。気がする。

「ええと、首は、動かせますかな。…無理はしない程度で。」

「……ッ!?少しは回りますが、起こすのは辛いです。」

「なるほど。…左手は…いいとして、右手はどうですか?」

「右手ってギブスか何か付いてます?…硬くて全く動かないんですが。」

「………成程。…常盤さん。」

「はい?」

深い溜息と沈黙の後、重々しく口を開いた医師が告げた言葉。

「……貴方を拘束しているのは止血帯と包帯くらいでしてね。固定する類のものは何一つありません。

今はまだ目覚めてすぐ、ということもありますが、最悪の事も考えておいた方がいいでしょう。」

「…というと？」

「……足は、動きますかな？」

「……あれ？ 足ってどうやって動かすんだっけ。こう、こうか？ 違うな。……こう、でもないか…。」

あれ、そもそも足の感覚ってどんなんだっけ？

「……常盤さん。恐らくこれから、少しの間入院して頂く事になります。その中でゆっくり着実に、リハビリをしていきましょう。」

…大丈夫、きちんとサポートできるよう体制は整えてあります。…あとは貴方の

氣力勝負、といった面も出てくるでしょうな。」

「……まじすか。」

どうやら俺は、体の自由が一時的に奪われた状態になってしまっているようだ。これから傷を治して機能を回復して、と一体いつまで掛かるのか先の見えない状況になってしまったが…。

今は少しずつやれることをやっていくしかない。そしてちゃんと、関わってしまった全員にケジメをつけるんだ。

「ヒロにい……うええええ……」

事態の重さに思わず嗚咽を漏らす妹を見つつも、不思議と気分は前向きだった。俺にはやらなきゃいけない事がある。…この子の、立派な兄貴として生きていく様に。

「先生……長い付き合いになると思いますが、宜しくお願い致します。」

「ええ、こちらにも全力を尽くします。がんばりましょう。」

…そういえば、入院するってことはそれ相応の費用が掛かるはずだ。恐らく緊急で行われた手術に対しても発生しているはずだし…。

「先生、俺の手術代や入院費って今どういう状況になってるんです??」

「費用ですか。…なんでも、松原様という方が全額負担すると伺っていますが?」

松原……か。どうやらそっちに関してもごちゃごちゃしたことになってるようだな。

ちゃんと動けるようになったら、松原宅にももう一度行かないと。原因がどうであれ、恐らく大金であろう費用の話をしない訳には行くまい。

「わかりました。…ありがとうございます。」

「いえ。…それでは、凡その処置も終わりましたので今日の所はお休みください。今後の事は、また明日以降案内します。」

医師一行が去っていき、部屋に残されたのは俺と計器類とまだ泣き続ける妹。

「有咲。……何から何まで、本当ごめんな。俺、お前に謝りたいこといっぱいあるんだ。」

「うえええ……。どうして、どうしてヒロにいがこんな目に合わなきゃいけないの……？ひどすぎるよ……。」

「違うんだ有咲。全部、全部俺のせいなんだよ。…こんな屑が兄貴面して、本当に申し訳ないと思ってる。」

「屑なんかじゃないよお!!ヒロにいは、ヒロにいは私にとって一番大事な人なんだもん!!」

「……………有咲。」

あれだけ喧嘩をして、その結果こんなことになって。自業自得だと鼻で笑ってく
れてもいい程の事なのに、やっぱりお前は優しいんだなあ。

でもな、やっぱりお前にもちゃんと謝らないと、前には進めないんだ。

「少し話をしようか、有咲。」

「……うえ？ 話……？」

「ん。……どうしようもない俺がやってきたこと。お前を傷つけるに至った事、全
てだ。」

訥々と時系列などお構いなしに全てを話し終えた頃。

俺達はまた、兄妹の形に向かって視線を据えられたような気がした。

つぎ⇒＜Normal END＞

もうすぐ全体で見たところの半分を迎えられそうです。

途轍もなくスローペースな投稿になってしまっていますが、読んでくださる方が居る限りきちんと完走致しますので宜しくお願い致します。

設定としては前回を分岐点とし、いくつかのルートそれぞれでエンディングを迎えるような形になります。

N-2..質屋 痛みに飲びを

このNormalENDこそ、気分的にはBadENDかもしれません。

あれから暫く時は経ち――。

年度が変わった、春。

柔らかな陽気と芽吹きのに、上着もそろそろ不要になりそうな予感を感じる。
最愛の妹が隣に居てくれているとはいえ、日々繰り返し辛いハビリに何度も心が折れそうになった。

それでも、今こうして、何とか流星堂のカウンターに再び立つことができているのは支えてくれた方々のお陰だろう。

カラン、カラン…

「いらっしやいま……あ」

「…常盤さん。すみません、お忙しいところに…」

「松原さん。……お店はこの通り、お客さんも居ないので大丈夫なんですが…」

「少し、話せますでしょうか…？」

ただ只管申し訳なさそうに言葉を探る松原芽美^{めぐみ}さん。…花音のお母さんだ。

こっちとしては丁度暇な時間帯だったので全く問題は無かった。…まあそもそも、この類の店が混むことはないんだけど。

一応カウンターにある内線で万実さんに連絡、…少し早めの休憩を頂く事にして客間の方へ芽美さんを案内する。

直接的に悪いのは芽美さんではないというのに…いや、未成年の子に關してはや

はり親が背負うことになってしまふのかね。…と、着いた客間で座布団を出しお互い腰を落ち着ける。

お茶の一つも出せたらいいんだが、生憎とうちのお茶出し担当は授業の真っ最中だし、俺の体じゃお茶は淹れられないしなあ…話だけで我慢してもらおう。

「…私が言うのも変かもしれませんが、まずは退院おめでとうございます。」

「あ、はい、ありがとうございます。」

「リハビリも大変だったと…伺っております。」

「…いえ、まあ、何とか動けるようにはなっただ。それよりも、入院中の治療費とか入院費用とか諸々、馬鹿にならない金額なんじゃ？」

長期の入院だけでも恐ろしい出費になるだろう。周りの人に訊いたとして色々意見はあると思うが、俺個人としてはそこまでやってもらう必要があったのかどうか、よくわからない。

責任だとか贖罪だとか当然の事なのかもしれないけど、それらを発端として発生

させた上で爆発させてしまったのは紛れもなく俺なんだ。引け目を感じるとしたら、寧ろ俺の方なんだ。

「いえ、常盤さんにはお詫びのしようが無いほどのご迷惑をお掛けしてますから……。警察沙汰にならないよう取り計らって頂けたのも常盤さんのご厚意だと伺いました。だから……」

「芽美さん。…僕、凄く感謝してるんですよ。……花音さ、いや、花音をああさせてしまったのは僕なのに、色々気を遣ってくれて。」

「感謝だなんてそんな……」

「警察云々というのもそうです。別に恩を売ろうとしてそうしたわけじゃない。…僕にも責任があり、何よりも僕は生きていた。…そして、僕は花音を、大切な人間の一人として考えている。」

どんなに悪いことをしてしまったとしても、その人の事が大切なら訴えることなんてできませんよ。…寧ろ、そういった事柄から守るべきだとさえ感じました。」

「常盤さん……………」

「芽美さん、前に会った時とだいぶ雰囲気変わりましたよね。」

「ふえっ?」

「僕の体の事なんかもいいですから。芽美さんが治療費周りを面倒見てくれたおかげですっかり治ったんで。…だから次は、花音をどうやってケアしていくか考えましようよ。」

「…まだ、状況は変わらないんでしょう?」

あの後。俺が病院に運び込まれ全身の手術を受けていた頃、部屋に取り残された花音は一人泣きながら自分の体を切っていたという。それがどのような感情からの行動かは分からないが、明らかに異常なのはわかるだろう。

それ以来花音の様子を伝え続けてくれたのは芽美さんで、俺は未だに直接会えていない。…直接会ったところで何ができるわけでもないが、今も尚荒れ続けている花音を想像するだけで胸が締められるように苦しくなる。後悔と庇護心と自分の不甲斐なさ…。。

俺が苦しい時に有咲が隣で支えてくれたように、花音にもそれが必要なんだ。心

のリハビリの最中、隣で寄り添ってくれる人が。

「まだ、ですね…。夜も突然泣き叫びだしたり、少し目を離しているうちに自傷行為をしたり…。です。」

お医者様には、入院も勧められているんですが…。本人が、あの部屋から離れないと。」

「…………ふむ。…二つ、伝言をお願いしても？」

「あ、はい…なんででしょう。」

「一つは、もし可能なら電話かメッセージで連絡を取りたい、と。そしてもう一つは…」

もし許されるなら、俺が寄り添えたら。

「もうすぐ、必ず会いに行くからと。」

※

芽美さんが帰った後、再びカウンターの業務に戻る。何とか苦勞して店に戻り時計を確認する……時間は正午を少し回ったところ、か。

…芽美さんは、とても良く似ている。娘の花音に。風貌というか雰囲気というか、勿論顔のつくりもそっくりなのだが、溜息や話し方一つとってもそうだ。…まるで少し草臥れた花音と話しているような錯覚さえ覚える。

だからキツいんだ。あんな顔をされるのは。…正直、錯乱している花音本人と対峙する方がまだマシかもしれないとさえ思ってしまう程に。

「ヒロにい？」

「……あれ、有咲。学校は？」

「ヒロにいが心配だったのと、午後の授業が楽しくなさそうだから帰ってきちゃった。」

「…後半が本音だな？」

「えへへ……バレた？」

「お見通しだ。」

兄を盾にするとは。けしからん妹であるな、まったく。……尤も、丸つきり嘘じゃないのはちゃんとわかってる。優しい子だ。

「ヒロにい、何かあったでしょ。」

「ああ、さっきまでお客さんが居てな。」

「……関係者の人？」

「ん、まあそんなところだ。」

「……凄く辛そうな顔、してるもん。……ぎゅーする？」

「うーん。幸せそうな提案だけど、今は一応勤務中だしなあ。……夜にいっぱいしてもらってもいいかな？」

「ん。わかった。……じゃあ着替えてきてお手伝いするね。」

「さんきゅー。」

「ヒロにいは私が居ないと無茶な事ばかりするから。」と仕事を手伝うようになった有咲。：まあ、手伝うと言っても暇なこの店だ。基本的には二人並んで座り駄弁っているだけなんだが。

ただ悪い点として、平日も連日早退を繰り返しているのが気に掛かる。折角学校へ通うようになってくれた有咲と、連れ出してくれた香澄。二人の間が今どうなっているのか、バンドとやらが今どうなっているのか：寧ろ俺の心配事も増えていく一方で、俺なんかより学校の方を優先してほしいんだけどな。

かといって、早退する度にそこを忠告して陰悪なムードも作りたくないし：ううむ。

「なに唸ってんの。」

「おかえり有咲。：可愛い妹が学校を疎かにしている件についてだよ。」

「む。勉強は1番出来てるもん。だから本当は授業も出なくていいんだもん。」

「学校ってのは何も勉学の為だけに通うわけじゃあない。友達と仲良くしたり、決

まりを守ったりさあ……」

「両方やってこなかった人の言う事なんか聞きませんよーだ。」

べーっと小さい舌を見せびらかしてくる。可愛い。

まあ確かに？ 学生生活でその手の経験を積んだ覚えはないしなあ。……友達たった碌に名前も顔も覚えちゃいないし……ああ、やけに懷いてた後輩が居たくらいだな。あいつ今何やってんだろ。

「とにかくだ。……今バンドの方はどうなってんだ？」

「ああ……一応集まったりはしてるんだけどね。おたえが、他のバンドのサポートメンバーとかやってるせいで練習も思うようにできなくてさ。」

「そっかあ……。お前らも2年生だもん……。」

「うん……。……ねね、店閉めちゃわない？」

「いくら暇でも勝手にそんなことできないでしょうよ……。」

「ばーちゃんに訊いてくるっ！」

「あこら！」

何だこの子は。休むとか辞めるとか、マイナス方向の時だけ元気いっぱいでする。

久々に見たぞアイツの全力疾走。

……うお、戻りも早え。

「はーっ！はーっ！……。つかれた。」

「はいはいお疲れ。」

「撫でて。」

「はいよ。」

ザザザザザザザザザザザザザザザザ……

「ん！」

「満足したかね。」

「した。……えっと、ばーちゃんが店閉めちゃっていいって。」

「まじか。」

大丈夫か？ 売上とか諸々。……まあ店長がいいって言うんなら従うまでだけどさ。

「手伝うから閉めちゃお。」

「あいよ。」

有咲と一緒に簡単な掃除、カウンター周りの整理、売り上げ金の精算と、締め業務をこなしていく。いつもは一人で黙々とやる作業だが、有咲が居るだけで不思議と楽しい。有咲も有咲で心なしかご機嫌だし、この時間に関しては文句もないな。リハビリで取り戻せたもの、取り戻せなかったもの。……様々な代償があるとはいえ、この日常にまた戻って来れたのはとても幸せな事なんだろう。今はもう力の入らない左手で、有咲の透き通るような髪を梳きつつしみじみ思う。

「どしたのヒロにい。」

「有咲のこと、一生大切にするからな。」

「…本当にどうしたの？プロポーズ？」

「…いや、兄貴としての誓いだ。」

「変なの。」

何も失ってないからこそ、幸せは不感なんだ。

人は縛られるからこそ美しい。
つまりはそういう事なんです。

N-3.. 周辺 緊張と弛緩と

焼きたての小麦の香ばしい香りがする。…とある日曜日に訪れた「山吹ベーカリー」。目的は勿論、沙綾への例の件だ。

入り口付近が硝子張りになっている為、外から中の様子をうかがうことができ。いきなり鉢合わせつても気まずいし、まずは店番が誰かを覗いて……

「大樹…さん？」

「うぐっ…」

後ろから掛けられる声に、恐る恐る振り返ると……デカイ竹箒を持った心配顔の沙綾が居た。

そうか、店番じゃなくて外に居るパターンもあんのか…。

「うぐ？」

「ああいや、ええと…。今って店、忙しい？」

「ううん。一応ピークは越えて静かになったとこだけど…」

「話、出来るかな。」

「……うん。部屋、上がって？」

沙綾に手を引かれ店内へ。沙綾のお母さんが驚いた顔で手を振ってきたため、軽く会釈で返し奥——沙綾の部屋へと向かう。

促されるままにベッドに並んで座る。……相変わらずいい匂いの空間だ。

「急に来るんだもん…驚いちゃった。」

「ごめんなあ。流石にアポ無しは非常識かとも考えたけど、頭より体が動いちゃって…。」

「ふふっ、大樹さんらしいね。……体の方は、もう平気なの？」

「完全に前みたいに動くわけじゃないけどな。…腱とか神経の損傷が大きいらしい。」

握り切れず開き切れない左手をグツ、パツ、と動かして見せる。それを見つめる大きな瞳は今にも歪みそうな程揺れていて、ギリッ…と歯噛みする音が聞こえた。

「まあ、なんだ…利き手じゃなくてよかったよ。他にもあるけど、差し当たって問題が多いのはこれくらいかな。」

「…辛かったね。」

「いいんだ。自業自得さ。」

「そんなことない！…大樹さんは、確かに思わせぶりな行動とか態度とか、人を傷つけてしまうような結果を引き起こしてしまったのかもしれないけど、これじゃあ余りに酷すぎる…。」

「こんな、一生残る傷を負う程じゃ…」

「ありがとうな、沙綾。…なんだよ、沙綾が泣く事じゃないだろ？」

本人も自分で気づけていないであろう涙が、頬を、エプロンを濡らしている。生憎とハンカチの様な気の利いたものは持っていなかったもので、空いている右手で拭ってやる。

この涙の温かみは、紛れもなく沙綾自身の温かみなんだろうな。その心優しさが、沙綾の魅力的な部分であり、恐らくこれから振り切らなきゃいけない敵なのだ。

「私、大樹さんの左手になりたい。」

「沙綾、それは…」

「前にも言ったでしょ、大樹さんっていう人を全部分かった上で好きになれる、物好きが私だって。」

二度目の告白。一度目と確実に違っているのは、俺の気持ちがいっかりと固まっていることだ。

「……沙綾。やっぱり君は優しすぎるんだな。…でも、俺なんかの為にそこまでするんじゃない。君は君として、君の人生を自由に生きてほしい。…俺の手になるなんて、そんな勿体ない事、させられないよ。」

「違うの！自由に、好きにやりたいから付き合っしてほしいの！」

「沙綾。……ごめんな。」

「ひう……。…そっ、か。…やっぱりだめかあ……。…」

目に見えて勢いが無くなっていく沙綾。前回とは違い、ハッキリと断りの言葉を伝えたしな。ショックもそりゃあるだろ。

本当に申し訳ないよ、沙綾。でも、俺はこれ以上他人に迷惑を掛けちゃいけないんだ。俺がすべて、責任を取って終わらせないと。

「沙綾のその優しさは、これから出会う誰かに向けてあげてくれ。俺は、人に頼っちゃいけないんだ。」

「……どうしてそこまで自分を追い込むの。」

「それほどのことを俺はやってしまったからさ。」

「…花音さんに？」

「うん。」

「……………私はそうは思わないけど、これは大樹さんの問題なんでもんね。」

「悪いな。」

「ううん。…でも、頼っちゃだめだなんて言わないで。例えば恋人にはなれなくても、私は大樹さんの味方だから。貴方の為なら、何だってするから。」

「……………ああ。沙綾にだけは、たまに頼ることにするよ。」

勿体ない。本当に勿体ないくらい、彼女は良い子だった。だからせめてもの願いとして、これからの人生は幸せな物であってほしい。俺みたいな屑とは関わらなくて済むような…。

「じゃあ、俺はそろそろ。」

「うん。……………また、遊びに来てね？」

「ひと段落着いたら、な。」

後ろ手に別れを伝え、部屋を後にする。

…女の子の泣き声を背に降りる階段は、まるでこれからの運命のようにとっても急な下り坂に感じられた。

※

「さて。今日はまだ時間もあるし、あとアポ取れそうな人は…。」

残りのケジメを付けなきゃいけない相手は、彩、花音、おたえ氏。…彩は仕事で忙しいだろうし、花音は都合上最後がいい。…となると、

「……………もしもし、俺だけど」

『ご主人様!?!』

「……ああ、うん、まあ…」

『お呼びですか!? あっ、あなたのおたえちゃんです!』

「相変わずだな君は。」

『??ご主人様の家に行けばいいですか!!』

「いやいや、それは悪いよ。待ち合わせしようぜ。」

『やったあ!!』

待ち合わせ場所として、いつか花音と飛び込んだカフェ、羽沢珈琲店を指定する。あそこは確か、おたえ氏の家から近い上にここからもそう遠くなかったはずだ。特に要件を伝えていなかった為か、矢鱈とハイテンションのまま終了した通話に少し後悔。上げて落とすって、残酷かもしれんな…。

暑くも寒くもない絶妙な気温の中を、ただただ無心で歩く。女の子を泣かしてきた俺が、これからまた一人傷つけようとしているんだよな。そんな惨いことってあるか。

……後悔するには、あまりにも遅いが。

「あっ！」

「…ん。」

ハハハハハハハハ…と息せき切って駆け寄ってくる待ち人…いや、この場合待た

せ人か。綺麗な長髪を揺らして駆け寄ってくる姿は、まるで長毛種の犬のようだ。

「…入って待ってりゃよかったのに。」

「待ちきれなくて！…ずっと会いたくて！」

「そうかそうか、ありがとよ。」

「うんっ！…入ろっ？…ご主人様！」

カランコロンという爽やかな音さえ懐かしく感じる。あれ以来全く寄り付かな

かった店だが、入ってみると成程あの時のことが思い出されるな。

「はは、あの時とは逆だな……。」

「う？逆??」

「ああなんでもない。こっちの話さ。」

入店に気付き近づいてくる女性店員に導かれ、あの時と同じ窓際の席へ。……………
あ、君も隣に来るタイプなんだね。

「おたえ氏、あっち側もソファなんだから、向かい合って座ろうよ。」

「なんで？」

「なんでって…隣にいたら話し辛いだろ？」

「ご主人様の声、この方がよく聞こえるんだもん。」

決して多くはない客と、…あとマスターもだが、ゞご主人様ゞというパワーワード

の登場に一瞬静まる。風呂の様なその雰囲気を感じ、居心地の悪さはすっかり最高潮だ。

「……たえ。呼び方が違うだろ？ここではあだ名はよせ。」

「あだ名？」

「ああ。俺も今、君の事はたえって呼んでるだろ？」

「……ほんとだ！……ええー、照れるよう……。」

「だから、たえも俺の事、普通に名前で呼んでくれな？」

「……ひ、ヒロ……さん。」

「ん、それでよし。」

よしよし、何とか上手い事誤魔化せた。これなら店の客からもマークされずに済むだろう。

「じゃあ本題な。……俺はたえに、謝らなきゃいけないんだ。」

「なあに？」

「……俺は君と、たえと、付き合ったり恋人になったりは出来ない。」

「??? うん。」

「えっ？」

「えっ。」

あれ？

今、隣り合って座った二人の頭上にはそれぞれ異なる色のクエスチョンマークが浮かんでいる事だろう。

なんだろう、顔を見つめても何の感情も伝わってこない。……俺、とちった？

「ええと……」

「う??」

「たえってさ、俺の事好きなんじゃないの？」

「すきい！」

「ん。……で、その気持ちに伝えられないってこと、なんだけど……。」

「うん。……ん?」

「ん?」

「え?」

「んん??」

ああああ……暫く振る形式に嵌っていたからすっかり失念していたが、こういうパターンもあるのかよ……。

つまりあれだ、おたえ氏は俺に好き好き言いながら、恋愛的感情は一切なかったと言う訳で……。つまり、俺が早とちりしてダダ滑りしたって言う……。

「俺、泣いていいかな。」

「……虫歯?」

「何でだ……。」

どうしよう。こんなに気を張ってたのに、少しほっこりしちゃったよ。他人の涙を見なくていいってことが、こんなに幸せな事だったなんて。

「ヒロさん、いいこいいこ。」

「ん……。」

ホッとしたような落ち込んだような、そんな複雑な心境が顔や雰囲気に出ていたんだろう。唐突に頭を撫でられる。

君さつき虫歯を疑ってたんじゃないの、とか野暮なツッコミを思わず飲み込んでしまう程、その綺麗な手には癒しの力があつたんだ。

「…まさかたえに癒される日が来るとはね。」

「ふっふーん。見直した？ 惚れた？」

「ははは、調子に乗るな。」

「元気になったならよかった。…もっとする？」

「……もうちょっとだけ、してくれてもいいぜ？」

「ふふっ、いいこいいこだよー。」

どうしようもなく屑な俺だけど、今だけは、少しだけ休憩してもいい…よな？

Normal ENDも折り返し地点を越えました。

全ルート終わるまでとなると、年内は無理かな、といった見通しであります。
もうしばらく、お付き合いくださいませ。

N-4..松原家 彼女に捧げる

「…それじゃ、行ってきます。万実さん。」

「ええ、気を付けて行ってきてくださいな。晩御飯、たとと用意して待ってますからねえ。」

「ありがとうございます。」

台所に立ち、朝食の後片付けをする万実さんに挨拶を済ませる。今日は俺の、最後のケジメの日。…できれば、最期にならないことを祈りたいが、事の運びによっては仕方ないということもあり得る。

…そう、今日俺は松原宅を再度訪問する。前回はまともに話し合いすらできなかったが、今の廃人になりかけている花音をどうにかできるのは、きっと俺しかないと思うから。

芽美さんにはアポも取ってあるし、有咲にも話は通してある。今回は彩は同行しない……というか今日の事を伝えていない。彩も、おたえ氏同様に盛大な爆死をかまして以来、少々顔を合わせ辛いのだ。

「めっちゃいい天気だな……。」

「大樹さん!!」

「ん。」

今しがた閉めたばかりの扉がカラカラ音を立てて開くと同時に、いつも通り明るく元気で、それでいて少し心配そうな声色に名前を呼ばれる。

振り返ればそこには独特な髪形の♀妹の友達♂が。

「……どした、香澄?」

「あの、えと、有咲から聞きました!!」

「今日の事?」

「はい！」

「そか。…連れて行かないからな？」

「…その…心配で。」

「心配い？」

「……だって！前だって普段通りに出て行ったのにあんな姿で帰ってきたらしいじゃないですか！

私…大樹さんが酷い目に遭うの嫌だし、悲しむ有咲も…もう、見たくないんです。」

目にいっぱい涙を溜め、両の手を音が聞こえそうなくらい力強く握りしめている。有咲がやっと手に入れた友達が、君みたいな優しい子でよかった。口に出すのは恥ずかしいが、今も改めて感じた事だった。

涙混じりの声で一生懸命に次の言葉を探す香澄の頭をぽんぽんと撫でる。

「…有咲はどうしてる？」

「……本当は言っちゃダメって言われてるんですけど、今部屋で……その……」

「いや、訊かなくても想像は出来ることだったな。……昨日話した時からずっと泣きそうな顔してたもん、あいつ。」

「……行かない、って訳にはいかないですよね？」

「ああ。……でも、ちゃんと帰ってくるから。俺の責任を果たして、な。」

「本当に？」

「おうよ。いいか香澄……男はな、やるって決めたことを最後までやり通して初めて男になれるんだ。」

決して投げ出したままで逃げたりしないさ。」

それは俺の意地でもあり、有咲の為でもある。俺が胸を張って有咲の兄だと言えるように、もう一度あいつらと偽りなく向き合えるように。

「……待ってますから、ね。」

「ん。……有咲の傍に居てやってもらえるか？」

「当たり前ですよ。有咲は私の大事な友達で、大樹さんは私の…私にとっても、大切なお兄さんですから。」

「ごめんな、香澄。…じゃあ、行ってくるわ。」

情けない話だが、香澄が居てくれて本当に良かったと思っている自分が居る。結局のところ、自分一人じゃ大事な妹を護ることもできないようなちっぽけな人間らしい、俺という奴は。

門を出て坂を下り、見送りの香澄が見えなくなった辺りで自分の頬を叩く。……気合を入れる。見定め、選び取るんだ。俺の行く末を…俺たちの未来を。

※

チャイムを押す手に、最早迷いはない。ドア一枚を隔てて聞こえる間延びしたチャイム音に深呼吸しつつ待つこと十数秒。開いたドアから顔を覗かせる、花音をそのまま大人にしたような少しあどけなさの残る女性。

目が合い互いに会釈をした後に導かれる様にしてリビングへ。

「今日は来て頂いてありがとうございます、常盤さん。」

「いえ、こちらこそ都合付けて頂きありがとうございます。」

「今、お茶を淹れますね。」

「あ、どうもすいません…。」

カチャカチャと隣接するキッチンより聞こえる陶器の音に、不思議と落ち着きを覚える自分を感じた。何気なく見やった動き回る芽美さんに、何だか未来の光景を見た気がして…。

今日花音に対しケジメとして持ってきた案を、先に芽美さんに伝えるべきか否か…そう迷っている間に、お茶の用意が出来てしまったらしい。その点の心の準備ができないまま、向かいに腰を下ろす芽美さんを呆然と見つめる。…恐らく呆けたような間抜けな面を晒しているに違いないが、考え事の最中って皆そうなるものだろうか？

「……？ど、どうかしましたか？」

「あ、ああ、いえ。…少し考え事を。」

「……そう、ですよ。本当に、常盤さんにはご迷惑ばかりお掛けしてしまって…大人として、母親として、申し訳ない限りです。」

「ああ、そんな！頭を上げてください！…僕の方こそ、色々お世話になってしまってますし、元はと言えば僕が撒いた種ですの…」

「でも……」

「ええと…あ、そうだ！花音…さんはあれからどうですか？相変わらずですかね？」

どうもこの話題になると互いに頭を上げられない押し問答が続いてしまうからな。言いたいことは言ったので、さっさと話題を変えてしまおう。

と言っても、変えた先の話題が今日の本題なわけだが。

俺の問いにゆっくりと顔を上げた芽美さんは、心配ながらも疲労が見え隠れする

顔で続ける。

「そう、ですね……。変わったことと言えば、私に質問を繰り返すようになったこと、位ですかね。」

「質問？」

「え、ええ。その……以前常盤さんから受けた、伝言だったんですが……。伝えて以来というもの、「いつ来るの?」「大樹さんは?」と繰り返す訊く様になりました……」

「ッ!」

この場合、会話ができたと喜ぶべきか否か。……何にせよ、花音が俺を待っていることは確かなようだ。その意図は計り知れたものじゃないが。

「……常盤さん。どうしてあの子に、そこまでして頂けるんですか?……親の立場である私としては少々言い難い事にもなるんですが、常盤さんがそこまで責任を感じることは、無いんじゃないかと思うんです。」

「いえ、そんなことは…」

「まだ若い男女が想い想われて、答えられずに離れていく…それが、そんなに悪い事なんでしょうか。」

「芽美さん。」

「…はい。」

「僕はね、あんまり頭が良くないんですよ。それに器用な方でもない。」

「…はあ。」

「いくら人付き合いが下手だとは言え、花音さんを…大事な友達を傷つけてしまったことには変わらないし、言い訳にもならないと思うんです。」

「ただ好かれて、応えられなくて…それだけなら、誰だってあそこまではなりませんよ。」

「そこまでの過程が、より深く傷つけてしまった要因だと思ってるんです。」

前にも散々指摘され、後悔したように。最初^{ハナ}から思わせぶりの態度を取らなければ、言動にももう少し気を配っていたなら……傷つく人はもっと減ったはずなんだ。

それが分かっていいるからこそ自分に責任が無いなんて言えないし、花音の状況を軽んじることも出来ないのだ。

「…それで、これからあの子に、何をしに行くんですか？」

「……………」

「また、貴方が傷ついてしまうんですか？他でもない、私の娘の手で。」

「違いますよ。…僕はケジメを付けに来た。つまるところ、落ち着くべき処にこの一件を落ち着かせるために来たんです。」

もう一度花音に、あの素敵な花音自身を取り戻させて見せますよ。」

「…………それは、責任感からですか。」

立ち上がり階段を見上げる俺の手首を掴み、落ち着いた声色で淡々と問いを投げ、芽美さんに真正面から答える。その目は花音と似た色を宿しつつも、改めて大人なんだと感じさせるような強い光を湛えていた。

「…そんなんじゃないですよ。」

「それなら」

「僕は、花音が大切に、大好きなだけですから。あの、ふえふえ言ってる花音がね。」

「……………そう、ですか。」

「はい。だから、芽美さ…いや、お母さんはここで、待っていてください。」

俺を掴むことで力が入っているのか、僅かに震えを感じる芽美さんの手にそっと掌を重ねる。

緩んだその手をゆっくり離し、改めて芽美さんの目を見返し頷く。

「……………お茶、後で淹れ直しますね。」

「はい。…花音の分も、用意してあげてくださいね。」

「宜しく…お願いします。」

キッチンへ向かっていく芽美さんの背を見送り、階段へ一歩踏み出す。ギュ、と

小さく鳴く木目が綺麗な階段に、重い重い一步を。

これから俺は、上手くやれるだろうか。偽ることなく花音に、俺の想いを贈れるだろうか。

その後のことはまた追々考えとしても、俺が今からやろうとしている事は果たして花音の為になるのだろうか。簡単な手段で、ある意味『逃げ』と捉えられても仕方ない事で、責任という言葉がまるで軽いものの様に感じてしまう…そんな安易な結論なんじゃないか。

大して皺の刻まれていない屑の脳で思いつく行動としては、これが限界であろうと思っではいるが。…俺に捧げられる物は、これしかないんだから。

「……………」

たった十三段の階段だ。考え事は完結するまでもなく登り切ってしまう。対峙するあの時と変わらないドアに、あの日の記憶が蘇りかけるのを必死に押し留め呼吸を整える。

あの時とは違うんだ。俺は俺達の未来を、自分の手で。

「……花音。俺だよ、大樹だ。」

「……………大樹、さん……？」

「そうだよ。……長い事待たせてすまん。入っても、いいかな……？」

久しぶりに聞いた花音の声に畏怖や嫌悪は全く感じず、不思議と柔らかい気持ちになれた俺は、そのドアノブを回したのだった。

次回でNormal ENDもラストとなります。

今回は導入も兼ねている為少々短くなってしまいましたが、何となく察せる話に

なったかと思えます。

お読みいただけますと幸いです。

N・E・N・D…想いの先に

まず最初に感じたのは鉄の錆びたような独特の金臭さ。そして遅れるように甘ったるいような生温い空気。

その渦の中でシートに包まっていた包帯だらけの少女が虚ろな顔を上げた。

「大樹、さん…？」

花音。かつて俺が振り回し、結果気持ちをやぶ傷つけてしまった子。俺にそんな気は無かったと言えど言い訳にしか聞こえないが、人間関係、何がどう作用するか分かったものじゃないというのは何とも貴重な教訓だ。

淀んだ空気に若干正気を持っていかれつつも、目に焼き付けるように部屋の惨状を見回す。相変わらず壁中を占める無数の俺は辟易するような笑みを浮かべ、床に

散らばった包帯やティッシュと共に俺を責め立てるような錯覚さえ覚えた。

「久し、ぶりだ。」

「えへへへえ、ほんものの大樹さんだあ……。」

出来れば帰って来たくは無かったと、あの日貫かれた孔の痕が熱を持つ。直視するに堪えない程、以前より増えたであろう生傷だらけの少女はにんまりと笑い、尻を引き摺る様にして俺の足元に縋りつく。

細い。確か食事も碌に摂っていないと聞いたが、もう立ち上がることも難しいんじゃないだろうか。

「……………っ。…相変わらず空気箆もってんなあ花音。」

「…大樹さん、大樹さあん。」

「花音？」

「大樹さんの匂い、大樹さんの温度、大樹さんの感触、大樹さん大樹さん大樹さん

大樹さん大樹さんああああああ

「か、花音落ちて着けての。」

俺の脛に頬ずりしだしたかと思うと、掴む箇所徐々に上へ上へと移動させ、這い上がる様にして胸元へ。咎人が地獄の窯から這い出る様を彷彿とさせたが、どちらかと言えばその体重を支えるだけの耐久性を持つ服に驚きだ。

終いには名前を繰り返し呟くようになってしまった花音の細い体を抱き締め、背中を摩る様に優しくたたく。

「そうだ、ここ換気もしてないみたいだしさ、一回窓でも開けないか？な？」

「……………」

「…よ、よし、沈黙は肯定と受け取るぜ！オープン……ちょ、ちょっと、一回離れられるか？花音。」

「……………」

今度は黙りこくって石のように動かない花音。体重もほぼ全てを預けて凭れている状態のため、窓まで歩こうにもたった数歩が辛過ぎる。そもそも体の機能が著しく低下している身だ……人を引き摺って移動するなど至難の業だろう。

一先ず花音をリリースする為、窓よりは近い場所にあるベッドを目指す。

「ちょっと乱暴に行くからな……おおりゃあ！」

「……!？」

左手は動かないが左腕に力は入る。半ば放り投げるようにして、抱え上げた花音をベッドに横たえることに成功した。

この作業だけで死にかけ。視界はチカチカしているし呼吸も辛い。

「……………はあ。よし、これでいよいよ窓を」

「ふえええええ……!!」

「はえ!？」

振動に驚いたのか何処かを打ち付けたのか、ワンテンポ置く様にして泣き声を上げだす花音。全身を見られる体勢になり服を着ていない事に気付いてしまった結果直視は出来ないが、放っておくわけにもいくまい。

「か、花音??どうした?どこかぶつけたか?びっくりしたか??」

「ふえええ…ひ、大樹さんが居なくなっちゃったよお…!また、また偽物だったよお…!!!!」

彼女の瞳は何を見ているのか。天井を見詰めたまま手を宙に伸ばし大声でしゃくり上げる姿に、少しばかりの疑問と改めて込み上げてくる自責の念に胸が痛んだ。「また偽物」…彼女はこれまでの間、好きになってしまった俺の幻影を見つけては捉えられず、触れては気付き…を繰り返してきたのだろうか。どれだけ繰り返したのか知る者は居まいが、どれだけの愛情を抱いていたのか、どれ程の苦しみに心身を痛めて来たのか。

「…ちょっと、待ってろよ…花音。」

「ふえええええ!!!」

疲れ切った体を起こし、机や壁を支えにして窓へ辿り着く。道中こびり付いた様な赤黒い染みにも触れ、引き籠った状況の壮絶さの片鱗を見た気がした。

「……………ぷあっ!」

開け放てばまだ青い空。頬を撫でる細やかな風に癒しを得た。

淀んだ室内に新鮮な空気と久々であろう陽の光が射し込む。空気の入れ替え一つでも俺掛かっていた心に再び力が入るというもの。

振り返ってみれば、上体を起こし不思議そうにこっちを見ている彼女の姿が。

「……………あかるい。」

「…ああ、久しぶりだろう。もう春なんだぜ。」

「……………あれえ、大樹さん？」

「…そうだよ。…会いに、来たよ。」

薄暗い部屋、射した光は彼女の瞳を照らし、さっきまではブレていた視線が今日初めてぶつかりあった気がした。

「……………あ、え……………？ほん……………ものの…大樹さん…？」

「ああ、真正正銘。復活した常盤大樹だよ。」

「……………う……………うえ……………ふええええ……………！……………ほんとお？……………ほんと…！」

「本当も本当。……………ごめんな、中々会いに来れなくて。」

何度目かの涙。勿論初めて見るものではなかったが、顔を涙でぐちゃぐちゃにしつつもゆっくりと歩き近寄ってくる様は少なくとも先程までとは違い正気のようなものを感じさせた。

やがて俺と窓の元へたどり着いた花音は涙まみれの顔で弱々しく笑う。

「……………もう、一生会えないと思ってたあ。」

「…まあ、ありや痛かったからなあ。」

「……………謝っても、謝りきれません……………」

「……………いいんだ。俺も謝って済むレベルじゃないこと、しちゃってるし。」

「ふええ……………そ、そんなこと……………ないですよお……………」

「……………花音、今もまだ俺のこと好き？」

「……………嫌いだったら、こんなに辛くないもん。」

確認がしたいがために口から出た言葉だったが、我ながら中々に無神経な言葉だったと思う。でも、必要だったのだ。

俺なりの、けじめを付けるための最終確認。

「……………俺は今の花音、あんまり好きじゃないわ。」

「…ですよね。」

「でもま、そうさせたのは俺のせいなんだ。」

「……違いますよ。…私が、おかしくなっちゃったのは、私が…」

「笑ってる花音が好きなんだよ、俺。」

「……え？」

これまでいっぱい泣かせて、いっぱい苦しませてしまった分、叶うならば彼女の笑顔を見続ける為に人生を捧げたい。

責任だの罪悪感から言っているわけじゃない。あの暗闇で見た光景。目が覚めてからも頭を離れない存在。数多の女の子の行為を断り、時に爆死させたのは誰のためだったのか。

「…本当にごめん、花音。俺は何もわかつちゃ居なかった。」

「……大樹さんが、謝ることじゃ」

「俺はこれから先、君の笑顔を一番近くで見ていたいと思う。一人の男として、一

人の女の子である花音の想いに応えたい。

一度壊れてしまったお互いを、支えあっていつまでも一緒に……」

すっかり閉じきらなくなってしまった左手で花音の頬に触れる。びっくりと肩を震わせた彼女だったが、再び上げた顔は朱に染まっただけ。泳ぐ目、震える口、それでも一度ここまで人に裏切られた少女は簡単に現実を認識できない。

「嘘。」

「……へ？」

「きつとこれも嘘なんだ、また目が覚めたら一人なんだ。大樹さんは私を見てくれない、大樹さんは私が嫌い、大樹さんは私から離れて……」

「花音……！」

不意に。傍に落ちていた彫刻刀を拾い上げ、憎々しく自分の左腕の包帯を見下ろしたかと思うと彼女は――

「そうだ。…きつと痛ければ夢じゃない。痛みがあれば、流れる血を見れば、きつとまた目が覚める…。……あああああッ!!」

「花音ッ!!!!!!」

ズグン、と左手の甲に鈍い熱さ。この感触、久しぶりだ。

あわあわと驚いた表情で手を離す花音は突き立てられた彫刻刀と俺の顔を交互に見比べている。幸いなことにただ痛みを感じるだけの俺は、彼女を呼び戻すべく笑ってみせる。

「花音!!…大丈夫、大丈夫だ。…これは現実。…一度は君を傷つけた俺だけど、迎えに来たんだ。」

「あ……あ……ひ、大樹さん…!!」

「…ほら、お互いボロボロだろう?…お似合いだと、思わないか?」

「嘘……嘘、また……いやでもこれはきつと、また幻の」

「ええい目え覚ませ!!」

左手を振るい痛みの根源を抜き飛ばす。彫刻刀が壁に跳ね返り転がる音を聞きながら、俺は目の前の唇を塞いだ。

半ば強引だったかもしれないが、これが始まり。彼女を闇の中から陽の下へ連れ出すための、第一歩。

「……………ふ、ふえ…」

「…また、傷つけちゃったかな。」

「……………うん。…ずっと夢見てたことだったんです。」

「……………笑えたじゃん、また。」

彼女に似合うのはやはり笑顔だ。

春の陽光に照らされた小さなはにかみは、唇の感触と共に強烈な思い出となって俺の中に仕舞われたのだ。

*
*
*

「ふええ……素敵な結婚式だったよお……。」

「お前、泣きすぎな。」

「だ、だってえ……有咲ちゃん、綺麗になったよねえ。」

「そりゃな。俺の自慢の妹だぞ？」

「…………大樹のシスコンぶってるところ、私まだ引っかかってるんだからねえ？」
「相変わらずの嫉妬力だなあ……。」

素敵なドレス、囲まれる沢山の友人、優しそうな夫。……あいつもあれ以来凄く変

わった。

俺の結婚を機に、「全てを受け入れられるように」、「兄が居ずとも何でもできるように」と、学校にもちゃんと通うようになったし俺のことで花音とも和解してくれた。

気付けば大学卒業と同時にこうして結婚……これからは志していた音楽の道をあの時以来の仲間たちと邁進していくという。俺と万実さんに向けての手紙を読むシーンでは、周りが引くくらい号泣してしまった。

体が一部不自由になってしまった俺のサポートをしてくれた可愛い妹も、これからは他人の物に……何故か少しばかり複雑な気分だ。あまり意識するとまた花音の機嫌が悪くなること請け合いなので、心の内に秘めておくが。

「……顔にでてるよ？」

「くっ……お前は俺を知りすぎなんだよ……！」

エスパーか。

「違うもん。」

「うぉあ、デジャヴだ。」

「おーい、ヒロにい！」

ドレスをはためかせ、愛しの可愛い妹が駆け寄ってくる。彼女の後方に視線を移せば少し心配そうな婿さん。

結婚の挨拶に来たとき、若干揉めた相手だ。今は説明済みとは言え、その表情もまあ納得だ。

「おいおいエロいな、そういうドレスも。」

「ヒロにい最低。…ねね、ヒロにい？」

「はっは。…あん？」

「…私がいなくても、大丈夫？」

「え。」

「式も終わっちゃったし、もう本当に一緒にいられなくなっちゃうからさ。」

有咲はあの家を出ていくことにしたらしい。万実さんの跡を継いだ俺と妻の花音は市ヶ谷家で暮らしているが、有咲は都心を少し離れた郊外に借りた部屋で新生活を送るとか。

ヒロにいは来ちゃダメね、と念を押されてしまったが…頼まれても行かねえ。

「何言ってるんだ。花音もいるし大丈夫だろ。…そんな情けない兄貴と思ってんのか？」

「はははっ、そーじゃないけどね。かのねえだけじゃちょっと不安だなーって。」

「ふえっ!？」

「まあ……確かにな。」

「ふええっ!?!大樹まで!？」

「だって、なあ……。」

「ね。……かのねえ、まだ方向音痴治らないんでしょ？」

「う…。」

「前もヒロにいの病院の待合室で迷子になって…」

「わー！わー！！……大樹、喋ったの…？」

「わりい。可愛い妹に迫られるとどうしてもなあ…」

「むー！！！！有咲ちゃんも、誘惑しないで！」

「誘惑て…かのねえ…。」

こんなやりとりも今日で最後なのかもしれない。

散々揶揄うだけ揶揄った有咲はまた友達の輪の中に戻っていった。その後ろ姿を見つめじみ思ふことは。

「花音。」

「なあに……。」

「拗ねんな、いつもの冗談だ。」

「ふーんだ。」

「そんなことよりさ……」

「人間関係って不思議なもんでな。一回こっ酷く壊れたとしてもそれで終わりとは限らねえ。」

「……ん。」

「落ちるところまで落ちることも、傷つけ合うことも時には大事らしい。その先にはこんな未来もあるんだってな。」

「………大樹。」

「ん。」

「………本当は、有咲ちゃんのこと妹だなんて思ってたでしょ？」

「………昔のことは、覚えちゃいねえなあ。」

「……ふーん。」

「あー勿論、今は花音が一番だぞ？」

「今は……って……ふええ。」

何かと出会うことは、総じて何かが変わるきっかけであり。

何かを深めるということは、総じて何かの犠牲の上に成り立つ行為なのだ。ともあれ、今日この日だけは、妹と俺の出会いに祝福を。

俺の歩んできた道が大外れでは無かったと信じて。

「∴結婚おめでとう、有咲。」

・ N o r m a l E N D ・

・ 花音 ・

随分とお待たせいたしました。

ノーマルエンド、花音ルートになります。

流星堂の居候 - U n i n t e n d e d h a r e M -

著者 津梨つな

発行日 2020 年 9 月 4 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/192735/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。